

2. 1 地域創造と人間生活

本校の地域創造と人間生活は、①自分を知る、②地域を知る、③世界を知るという3つの柱でカリキュラム開発を行ってきた。①については自分史やマインドマップを用いた自己理解を通して、将来を見据えてありたい自分を考え、②では演劇を通して地域の課題を知る学習を行い、③では世界の様々な困難を肌で感じてきた方からの協力で、世界の課題を知り、自分、地域、世界をつなげ、2年次からの未来創造探究に繋げてきた。今年度は新型コロナウイルス感染拡大による休校措置で、当初の予定通りにプログラムを実施できないこともあったが、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google ClassroomやFlipgridを使用した課題の提出・共有などに素早く切り替え、チームで代替企画を考え、コロナ禍だからこそできる学びのバージョンアップを追求した。

2. 1. 1 課題を知る学習

(1) 実施内容

① オリエンテーション / アイスブレイク

昨年度は新型コロナウイルス感染拡大によりオンラインでの実施となったが、今年度は対面での実施が叶った。初めて出会う「地域創造と人間生活」という授業に対し不安を抱えている生徒と目線合わせを行い、仲間がしゲームや地域クイズなどを通し、生徒同士の関係作りを行った。



② コミュニケーションWS / 演劇WS

生徒同士で対話のしやすい雰囲気を作るために、ワークショップを二週にかけて行った。コミュニケーションWSでは体を動かし楽しみながら、生徒同士で、あるいは教員・講師の方々と交流を深める様子が見られた。また、このWSは、教員が生徒の性格や関係性の把握にも効果があったと考えられる。

演劇WSでは、NPO法人PAVLICの方々とオンラインでつながり、これまでの人生について振り返り人生グラフを作成した。震災を直接的に体験している生徒の多くは、5歳のときにグラフがガクッと下降しており、震災による影響の強さがうかがえた。



③ 双葉郡8町村バスツアー事前調べ学習

双葉郡の現状と課題を実際に自分の目で見て、この地で学ぶ意味を考えるとともに今後の演劇及び探究活動につなげることを目的として、双葉郡8町村バスツアーを毎年実施している。今年度は5月末に実施予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により7月に延期せざるを得なかった。

「地域創造と人間生活」を履修する高校1年生には、東日本大震災を知らない・体験していない生徒もいるということを踏まえ、まずは地域を知るために調べ学習を

行った。マンガラートを活用して地域の魅力を知るだけでなく、震災前と震災後の地域の比較も行った。震災後の8町村に対し、「人口が少ない」「寂しい」といったネガティブなイメージをもっている生徒も見られたが、調査を進めていく中で、地域を盛り上げるために行動している方が沢山いるということを学んだ。

④ 双葉郡8町村バスツアー

日時：7月7日(水)

講師：

1号車	浪江町	木村正信(浪江町役場) 鈴木知洋(本校教員)
	檜葉町	森雄一朗(一般社団法人ならはみらい) 松本 淳(株式会社FiveStar)
2号車	葛尾村	堺 亮裕さん(一般社団法人葛力創造舎)
	双葉町	松本佳充(元双葉高校教員)
3号車	広野町	磯辺吉彦(広野わいわいプロジェクト)
	大熊町	佐藤亜紀(大熊町復興支援員)
4号車	富岡町	青木淑子(3.11 富岡町を語る会)
		平山 勉(双葉郡未来会議事務局代表)
	川内村	井出寿一(一般社団法人かわうちラボ)

行程：

1号車 浪江町・檜葉町

学校 ~ 浪江高校 ~ 国道114号で沿岸部方面へ道の駅なみえ ~ 請戸漁港・請戸小学校 ~ 大平山霊園 ~ 展望の宿天神 ~ 檜葉周辺ツアー(みるーる天神、木戸川漁協、J ヴィレッジ 檜葉遠隔開発技術センター、道の駅ならば みんなの交流館ならば CANvas) ~ 学校

2号車 葛尾村・双葉町

学校 ~ 葛尾村(かつらおやぎ広場がらがらどん) ~ 落合集会所 ~ 双葉町へ移動 ~ 双葉高校 ~ 双葉駅周辺ツアー ~ 東日本大震災・原子力災害伝承館 ~ 学校

3号車 広野町・大熊町

学校 ~ 広野町内散策(防災緑地、新妻有機農園、広野復興公社(バナナ園)) ~ 大熊食堂 ~ 大熊町内散策(大熊町役場、商業施設、災害公営住宅) ~ 大野駅 ~ 大野小学校・ネクサスファームおおくま・酒米田んぼ等車窓より視察 ~ 学校

4号車 富岡町・川内村

学校 ～ 富岡高校 ～ 富岡町内散策 ～ ふたばいんふお ～ 川内村へ移動 ～ 高田島ヴィンヤード(ワイン畑)・サラブレッド馬牧場・川内小中学園・かわうち保育園 ～ 天山文庫 ～ 学校



概要：

クラスごとに、1日かけて双葉郡内8町村のうち2町村をめぐる。浪江高校、双葉高校、富岡高校を訪問した生徒達の中には、大震災から10年以上経つ現在でも、時がとまったままの校舎を見て言葉を失っている生徒もいた。

また、地域で生きる方々や、地域を盛り上げるために活動している方々とも直接交流ができたことで、今後の演劇創作や未来創造探究につながる学びとなった。本校には、福島県外出身者も多数在学している。事前に調べ学習を行い、地域についての知識をインプットした状態で、バスツアーを実施できたことも大きい。それにより、実際に自分の足でその地を訪れた際に得る学びが深化したと考えられる。また、双葉郡出身者で、震災後避難して以来初めて故郷を訪れる生徒も一定数おり、バスの中から自分の家のあたりを必死で探す様子もみられた。震災以前とは様子の変わった町に驚く生徒もいたが、10年振りに故郷を見て様々なことを感じたようだ。バスツアー振り返りでは、こちらが想像したよりも生徒は多くの学びを得ていたようだ。



バスツアーの感想より

実際に見て、話を聞いて、少しずつ復興が進んでいることがわかった。	人口も少ないけど、小さい村でも資料よりたくさん面白いことや食べ物があった。
行ってみたいとわからなかった。	ふたば未来ができた意味を考えた。
結構復興してる・・・のかな？	実際に休校になった校舎を見て衝撃だった。
津波で流された土地、自分だったら考えると辛いなと思った。	みんな多くのものを失ったんだと思った。自分はそんな人達のために何が出来るだろう。
もっと地域の人たちと関わりたい。	イベントとか参加してみたい。
同じ双葉郡にいても知らないことが多い。じゃあ県外は？海外は？どうやったら伝わるだろう。	時間が止まったまま。
	いつでも遊びにきてね、と言ってもらった。夏休みにもう一度行ってみたい。

⑤ 夏休みプチ探究

夏休みの宿題として、プチ探究を実施した。双葉郡バスツアーを経て、自分の気になるものに対して何かしらアクションを起こすことを目的とした。右上の3つのコースから自分に合ったものを選んでもらった。成果物として、アクション結果をGoogle Formに入力することと、短い動画にまとめて提出してもらった。提出先は、生徒

達でも携帯電話から簡単にアップできるよう、Flipgridを使用した。生徒達はバスツアーで双葉郡に興味を持ち、自分たちの興味・関心をベースに自由にアクションを行った。生徒達の得意とする動画を使った表現にしたことで、生徒達も楽しみながら取り組むことができたようである。生徒が提出した動画はどれもクオリティが高く、双葉郡の魅力がより伝わるものとなった。

3つから1つ選んでアクションプランを作ろう

[A] 背伸びしてチャレンジ!
「未来創造探究」先取りコース

[B] コレってどうなってるの?
「疑問をタネに探究」コース

[C] とにかく動け!
「ひたすらアクション」コース



「ひまわり迷路」(広野町)



浅見川の水質調査(広野町)



「木戸川ゴミ拾い」(楡葉町)



(2) 成果

昨年度と比較すれば、今年度はコロナによる影響はうけながらも対面での実施が叶った授業が多数あった。予定通りに進めることができない部分も、Zoomを使ったオンラインでの授業や、Google Classroom、Flipgridなどを用いて柔軟に対応できたことが、生徒の学びをとめいだけでなく ICT 能力の向上にも寄与した。

また、実際に双葉郡を自分の目で見たり、直接地域の方々と触れ合ったりするということの大切さを改めて再認識することもできた。

(3) 課題と展望

昨年度から1日かけてバスツアーを実施することで、双葉郡8町村全てに足を運ぶことができるようになった。しかしその一方で、時間的な制約も多く、じっくりとツアーすることができないという点が課題である。関わってくださる方も増えると共に、震災を直接的に体験していなかったり、体験していても記憶が定かではなかったりといった生徒も増えてきた。来年度以降はさらにコースを増やし、それぞれの地域をより深く学ぶ機会としていきたい。

2. 1. 2 演劇

本授業は、劇作家・演出家、芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生をはじめ、NPO 法人 PAVLIC より、劇作家・演出家のわたなべなおこ氏他多くの演出家、舞台俳優を講師として招聘し、「地域創造と人間生活」の課題発見・解決学習 Project Based Learning (PBL)として実施した。演劇を通して「多様な価値観を多様なまま理解する力」と「多様な価値観の共存」に向けて自分達が思考を深めることをねらいとしている。生徒全員が16班に分かれて演劇を創作し、演じた。

生徒達は課題を知る学習における双葉郡8町村バスツアーを通して、震災前と後の双葉郡の変容について話を聞き、地域の復興に向き合う。また、演劇の題材となる地域の課題を発見するために、事前に調べ学習をした後、地域の公共機関や商店、企業などを訪問し、フィールドワーク(FW)を行う。生徒たちは復興に携わる地域住民の内面に焦点を当ててインタビューを行い、学んだ内容を演劇創作につなげていく。演劇創作の中では、訪問先における復興に向けたありのままの姿や悩みを持ち帰り、議論しながら双葉郡の復興のための核心的な課題を見つけ出す。それぞれが置かれる立場の違いから生じる葛藤や対立など、複雑に絡み合う事象から、解決できない課題があることを認識する。生徒は発見した課題や学びを、その後2年次から展開される未来創造探究(探究活動)を通じて探究することになる。

(1) 目的

- ① 出身中学校を問わず、学校の所在する広野町の特色や課題の理解を深めるために、自分たちが設定した具体的な課題に基づき、地域住民や企業、公的機関、施設等への取材(FW)を実践し、地域についての正しい知識を身につける。
- ② 対話劇を創作することで、地域の様々な立場の方々の視点で物事多面的に見つめ、そこで出てきた課題と向き合い、2年次以降の未来創造探究での活動に繋げる。
- ③ 自分達の学習の成果について、特に伝えたい内容や相手を踏まえた有効な方法を確立し、校内外での発表を通して正しく伝える。

(2) 授業概要

		時間割	学習活動	講師来校
1	9月15日(水)	5・6	取材先を決める	
2	9月22日(水)	5・6	演劇オリエンテーション① / 取材準備	
3	9月29日(水)	5・6	演劇コミュニケーション② / 取材準備	
4	10月6日(水)	5・6	演劇創作のための取材	
5	10月13日(水)	5・6	演劇創作のためのFW	
6	10月20日(水)	5・6	演劇創作WS ①	○
7	10月27日(水)	5・6	演劇創作WS ②	○
8	10月28日(木)	終日	演劇創作WS ③	○
9	10月29日(金)	終日	演劇創作WS ④・中間発表会	○
10	11月17日(水)	5・6	演劇創作WS ⑤ ブラッシュアップ	○
11	12月8日(水)	5・6	演劇創作WS ⑥ ブラッシュアップ	○
12	12月14日(火)	終日	演劇成果発表会	○
13	12月16日(木)	5・6	演劇振り返り	

(3) 講師

平田オリザ(青年団主宰 劇作家・演出家)

わたなべなおこ(劇団あなざーわーくす主宰・劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC 代表理事)

森内美由紀(青年団・俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠理(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、河野 悟(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

石本 径代(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、有吉 宣人(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

宮崎 悠里(俳優、NPO 法人 PAVLIC)、植浦菜保子(俳優、NPO 法人 PAVLIC)

北村 耕治(俳優、劇作家・演出家、NPO 法人 PAVLIC)

(4) 対象生徒

1 学年生徒 96名 16 班編成

(5) 授業内容 (抜粋)

1 取材先を決める

演劇の班ごとに希望を取り、地域で様々な分野で復興に携わる方々の中から生徒達自身が取材希望先を選んだ。これまでお世話になった方々に加え、毎年地域との新たな繋がりも増えており、今年度は震災当時中学生だった方で、震災後に復興に携わる仕事に就いた方など、初めて取材を依頼した方もいた。

	FW先
1 班	鷺 周作さん(檜葉町・株式会社 J-Village)
2 班	松本佳充さん(双葉町・双葉高校元教員)
3 班	青木知里さん(東京電力福島復興本社)
4 班	下枝浩徳さん(葛尾村・葛力創造舎)
5 班	菅原文宏さん(富岡町・ホテルリーブス)
6 班	西村正夫さん、脇田伸吾さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
7 班	青木淑子さん(富岡町 3.11 を語る会)
8 班	鈴木謙太郎さん(木戸川漁協)
9 班	藤田 大さん(富岡町・鳥藤本店)
10 班	森雄一朗さん(檜葉町・ならはみらい) 森 亮太さん(檜葉町・喫茶ヤドリギ)
11 班	花井真里奈さん、大須賀勝之さん (東京電力福島復興本社)
12 班	清田彰一さん、水野静雄さん (鹿島建設・中間貯蔵施設)
13 班	平山 勉さん(富岡町・ふたばいんふお)
14 班	加井佑佳さん (東日本大震災・原子力災害伝承館)
15 班	秋元菜々美さん(富岡町役場)
16 班	木村紀夫さん(大熊町)

2・3 演劇オリエンテーション

まず4月に、チームビルディングのためのコミュニケーションWSを丁寧に行った(2.1.1 課題を知る学習)。演劇オリエンテーションでは、演劇を通して地域課題を知ることの意義について体験を通して学んでいった。身体を使ったゲームや、台本を使った短い演劇体験を通して、イメージを共有することの難しさや、人それぞれに価値観が違うことを楽しみながら学び、そこから福島の問題にも結びつけて考えた。震災後これだけふくしまに対するイメージが多様化してしまった今、正しいことを伝えようとしても言葉だけではイメージの共有は難しく、風評被害と闘うためには、伝え方を工夫しなければならない。その伝え方の一つとして「演劇」があるということ学んだ。



4・5 演劇創作のための取材・FW

演劇の題材を探す(地域の課題を発見する)ために、2回インタビューを行った。1回目は学校に来校いただき、時間をかけてインタビューを行った。そして2回目はFWとして生徒達が現地に赴き、インタビューで伺った場所を実際に見ることで、イメージの共有をするという形式をとった。



今年度で7回目となるこの取り組みだが、地域の方々の協力がなしには成立しない企画である。今回も様々な資料等を用意していただき、FWの際には生徒達により伝わるようにツアーを組んでくださるなど、伝え方を工夫してくださった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。生徒たちは、事前に調べ学習の中で考えた質問内容を演劇コミュニケーションWSにて更に掘り下げたのちにインタビューを行った。ただ用意した質問をするだけでなく、相手が答えた内容からさらにストーリーを引き出すことができた。さらに、2回目に実際に現地を訪れ、語られた言葉とその場所を重ねて震災当時に思いを馳せることができたことは、その後の演劇創作に真摯に打ち込む生徒達の姿勢に繋がったと感じる。

6～11 演劇創作WS

昨年度に引き続き、NPO 法人 PAVLIC わたなべなおこ氏をはじめとする講師陣と共に、生徒の状況を見ながら授業を組み立てた。取材内容を基に少しずつ演劇を通してイメージを形にしていく工程を丁寧に行った。演劇創作においては、脚本を書かずグループで話し合いながらその場でシーンを創りあげていくエチュード方式を取り入れた。書かれた言葉に頼るのではなく、その場で生まれる表現を大切に、全員で合意形成を図りながら創作をすることで他者と協働する力を伸ばすことをねらいとした。実際に、どの班も全員で協力しなければならず、班の中でも様々な対立や分断が見られたが、どの班もそれらを乗り越え、誰一人取り残さない姿勢が見られた。

「演劇を通して地域の課題を表現する」という正解のない問いに対してグループで一定時間内に答えをだす過程では、自分自身、班のメンバー、地域の課題とも徹底的に向き合うことを意味している。粘り強く向き合い続けた生徒達にはこの一週間で大きな成長が見られた。何よりも、チームビルディングから丁寧にWSを行ってきた成果か、生徒達が協働作業を楽しんでいた。



中間発表会では教員が審査員として入り、地域課題がより多角的・多面的に見えてくるよう、作品の中で足り

ないところをアドバイスした。視点は以下の3つである。

- ① 取材対象の心理描写だけでなく、地域課題がきちんと描かれているか。
- ② 取材対象に寄り添いすぎて、物事を一方向から見ているか。きちんと相手の背景も描けているか。
- ③ 取材相手が何者で、どのような仕事をしているのかが劇を見て分かるようになっているか。

中間発表会でのアドバイスを受けて、多くの班が追加取材をした。例えば、ある班は休校になってしまった双葉高校の元教員にインタビューをした。震災後各地にできたサテライト校を1箇所集約する際のやり取りと葛藤を演劇にした。すでに避難先で生活を立て直した家族からは、また家族がバラバラになってしまうと責められ、県教委には保護者への連絡を急ぐように言われ、先生自らも被災者であり避難者でありながら、板挟みに苦しむ様子を演劇にした。中間発表会でのアドバイスを受けて、当時の県教委にも葛藤があったはずだと、追加取材をすることにした。取材には、震災当時、県の学校経営支援課にいた方が応じてくださった。当時の県庁の混乱の様子や、サテライト校を作る際の思いや葛藤を聞くことができた。どちらにも立場があり、大切にしなければならぬものが違うからこそ対立が起きてしまうということを知り、生徒たちはとても悩みながら成果発表会に向けて作品をブラッシュアップしていった。この作品については、TBS ラジオの取材でこの班の作品と創作過程について取り上げていただいた。

参考 TBS ラジオ「アシタのカレッジ」
澤田大樹記者による取材報告
2022/03/11 放送(2:10:00～の部分)



中間発表の最後には、プロの講師の皆さんによる演劇を鑑賞した。演劇プログラムを始めて7年目になるが、これまで生徒たちは講師が舞台上に立つ姿を見たことがなかった。これは演劇プログラムが成熟し、我々大人に余裕ができたことにより実現したものであった。最後の教室のシーンでは、担任をはじめとする有志の教員が、生徒役で舞台上に立つというサプライズを行った。演劇が学校全体の文化として浸透した成果である。何も知らされていない生徒たちは教員の登場に大いに湧き、最後まで集中して観劇を楽しんだ。生徒の感想には「演劇は恥ずかしいと思っていたけど、先生たちの本気の演技は格好良かった。」「伝えたいことが観客に正確に伝わるように、私も恥ずかしながら堂々と演じたい。」といった感想が多く、これから成果発表会に向けて大きな後押しとなったと思う。



1 2 成果発表会

本校みらいシアターにて、成果発表会を行った。16班

16 作品を4グループに分け、グループごとに生徒達による投票を行った。評価の観点は以下のとおりである。

- ①テーマ (広く見てもらいたいと思う内容だった)
- ②発想力 (オリジナリティがあり、ユニークだった)
- ③セリフ (心に響く、印象に残る台詞があった)
- ④構成 (話の流れ、組み立て方が良かった)
- ⑤演技 (迫真の演技、役になりきっていて引き込まれた)

また、FW先をはじめ今年度お世話になった方々にも案内を出し、発表をご覧いただき、フィードバックをいただいた。今年度はイラクで人道支援をしている高遠菜穂子氏にも来校いただき、最優秀賞、平田オリザ賞、校長賞、副校長賞の他に、高遠菜穂子賞を選出し、表彰を行った。

	班	タイトル	FW先
A	3	トリチウム	東京電力
	11	出発点	東京電力
	14	加井物語	大熊町
	5	ホテルリーブスができるまでの道のり	広野町
B	1	人生なんとかなる!	J-Village
	8	Suzuki 物語	木戸川漁協
	7	語り部	富岡町
	15	10	富岡町
C	9	大さんの過去と休日	富岡町
	10	覚悟	東京電力(略)
	6	福島の裏側	中間貯蔵施設
D	12	清田's life with 水野	中間貯蔵施設
	13	富岡は負けん!	富岡町
	4	かづろうへ行こう!	葛尾村
	2	MANABU	双葉高校
	16	Don't Forget	大熊町

特に衣装や舞台セットなどはなく、全員がジャージ姿で演じるのだが、それでも情景が伝わるのは、演劇が様々なものを受け手が補完して鑑賞する表現であるからだ。生徒たちは、椅子や机などの少ない小道具を上手に使って防波堤や瓦礫、家、会社などを表現していた。演劇は、舞台上に立つ演者同士のコミュニケーションだけでなく、舞台と観客の間のコミュニケーションも成立しないと上手くいかない。4月からの演劇WSを通して、生徒たちの中に、受け手を想像し伝え方を工夫するという能力が積み上がっていると感じた。この力は次年度の未来創造探究でも活かされるだろう。

なお、今年度は記録映像を撮影した。本校の演劇プログラムが時間をかけて形になり、形に残すことができた。今後、様々な場面で本校の取り組みを伝える上で重要な資料となった。東日本大震災時に4、5歳だった生徒達が、当時の大人達と丁寧に対話し、取材した内容を演劇にすることで経験を自分事として表現した16作品は、後世に残る貴重な記録となるはずだ。

各発表の後、観劇いただいた取材対象の方一人一人からコメントをいただいた。

「東電が抱える課題を大変分かりやすく表現いただいた。

我々の今後の活動においても意義のある時間だった。今後
も一緒に考えていきたい。」

「インタビューの中で皆さんと話した、震災直後の入社時
の『被害者から加害者になってしまう』という葛藤を丁寧に
描いてくれた。当時はかなり悩んだが、この演劇を見たこと
が1つの答えになった。」

「震災を経験して10年、自分がどんな道を歩んできたのか、
皆さんの作品を通して振り返ることができた。現在の仕事
に就いて2年目だが頑張ろうと背中を押された。」

「取材を受けながら、自分の語り部としての仕事を振り返
った。語り部をしていることに対する町民の受け止め方も
違う。クレームの電話が来ると身構えてしまうと話したが、
そういった方々の声を聴き、一緒に考えたら良かった。とい
う気づきもあった。」

「私の家は帰還困難区域で除染もしてもらっていない。生
きている間に帰れるかわからない。この学校は、色々な思い
を抱えながら休校せざるを得なかった5校の生まれ変わり。
それを是非覚えてほしい。」

地域の方々も、演劇を通して自身のこれまでを客観的
に見つめる貴重な機会となっている。更に、震災直後
では考えられなかった、立場を越えた対話の場が生まれて
いる。震災から10年経ったからこそ話せることがある
と感じた。このプログラムが、生徒達だけでなく地域
の方々にとっても有意義な時間となっている。

1.3 演劇振り返り

成果発表会を終えて、これまでのプロジェクト全体を
振り返り、個人として・チームとして自分達がどのよう
に成長したのかを言語化するWSを行った。生徒の感想
は以下の通り。

・人前に立つこと、意見を言うことが苦手で、私一人が頑張
らなくても何とかかなと思ってた。演劇はそれではダメ
だと気付かせてくれた。自分の知らなかった物事、人の一面
を見ることでたくさんの発見をした。地域も人ももっと知
りたいと思った。

・震災で大きく生活が変わってしまった人の人生や、想い
を、演劇を通して深く理解することができた。この演劇があ
ったことで、町ですれ違う人に「あの人はどんな人生を送
ってきたんだろう」と、人の生き方に興味を持つようになり
ました。そこが成長したところかなと思います。

・震災のことを沢山学びました。自分が思っていた以上に被
害が大きく、目に見える被害だけではなくたのだとここ
に来て学びました。私は県外から福島に来て、福島のため
に何が出来るだろうと考えたときに、スポーツの力で双葉郡
に勇気・元気を届けることだと思っています。福島で学ぶ
以上、震災のことを正しく伝えられる人になりたいです。

(6) 振り返りと評価

昨年度と同様に、合意形成のトレーニングとして、全
員で話し合いながらの作品創作を行った。台本を使用し
ないことで演技は自然になり、より観客に伝わる伝え方
ができた一方で、昨年度は生徒達の興味・関心が取材対
象の個人的な葛藤に集中してしまうという課題があった。
その外側を取り囲む複雑な構造や対立・分断を描くため、

今年度は中間発表でのアドバイスを意識的に行った。地
域課題をより多面的に捉えるため、相対する側の話も聞
きたいと、追加取材を希望する班も多く、それによって
作品が深まった。

演劇創作は探究に必要な論理的思考と批判的思考の
トレーニングの場である。論理的思考は、演劇を作るこ
と自体が論理的に情報を出していかないと相手に伝わら
ない。批判的思考は、時にはフィクションの力を使って
地域が抱える課題を掘り下げることだ。審査員の平田オ
リザ氏の言葉を借りれば、「探究」とは課題を探究するの
ではなく、「人間」と人間が作っている「社会」について
探究するものだ。人間の複雑さを深掘りすることが重要
である。取材をすると、どうしても取材対象に共感して
しまい、そのままに伝えたい！という気持ちが起るが、
そこで踏ん張って、その周りを取り巻く複雑な構造を深
掘りしてもらいたい。

福島で学び、原発事故、復興、トリチウム海洋放出問
題、様々なものをこれから背負わざるを得ない彼らが、
この不条理と闘うためには、大人の言うことを全て真に
受けるのではなく、批判的思考を持ってほしい。それが
演劇をつくる意味である。この経験を活かして2・3年
次の探究活動に生かしてほしい。

(7) 次年度実施への課題

地域で働く様々な方々の気持ちに寄り添うことができ
たことは大きな一歩ではあるが、やはり共感だけでは地
域の課題解決には至らない。震災時の年齢が低年齢化し
ている中、生徒達自身が地域の課題の本質に気付き、時
間を掛けてそれらを深掘りする中で基本的な知識をイン
プットしていく仕掛けが必要である。

※参考資料 「成果発表会の映像」

【平田オリザ賞】
15班「10」



【高遠菜穂子賞】
7班「語り部」



【学校長賞】
3班「トリチウム」



【副校長賞】
2班「MANABU」



【生徒投票最優秀賞】
16班「Don't Forget」



2. 1. 3 国際理解教育

本年の「地域創造と人間生活」は、キャリア学習を意識し、コミュニケーション力向上のためのスキル学習を土台として「自分を知る」、「地域を知る」、「世界を知る」の3本柱を軸として授業を構成している。「自分を知る」では、スタディサプリの活用やしくじり先生を通して、働くことの意義を考え、自己理解を図る。「地域を知る」では、フィールドワークを通して、双葉郡の現状と課題について知る・学ぶ授業を展開する。そして、「世界を知る」では、世界で活躍する外部講師を招聘し、世界における様々な課題を知り、生徒自身がグローバル社会の一員である自覚をもたせる (Global Citizenship Education)。

(1) 高遠菜穂子氏による国際理解講演会～概要～

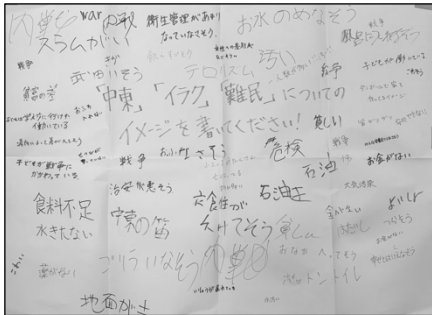
イラクで教育支援ボランティアに取り組んでいる高遠菜穂子氏に、『紛争地で起きていること～イラクが抱える課題事例から～』という演題で講話いただいた。

高遠氏の体験談を通して、地域が抱える課題を地域だけのものとして考えるのではなく、世界の平和や国際理解の意義を理解させることを目的としている。

- ① 日時 令和3年12月15日(水) 5, 6校時
- ② 講師 イラク支援ボランティア
エイドワーカー (フリーランス)
高遠菜穂子 (たかとお なほこ) 氏
- ③ 対象 本校1年次生徒、教職員

(2) 実施内容

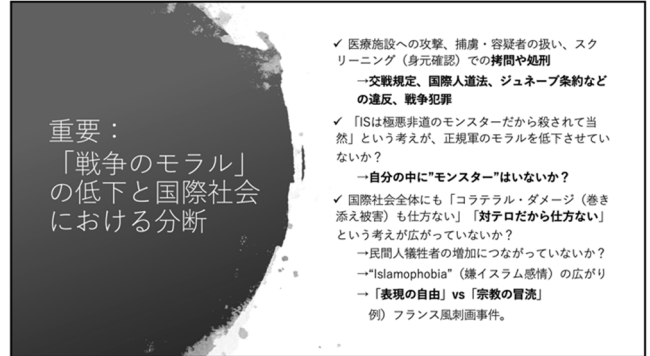
高遠氏には、前日の演劇成果発表会から参加していただき、審査員もしていただいた。発表会の際に、高遠氏から「中東、イラク、難民と聞いて、あなたが抱くイメージ」について自由に紙に書いてほしいという宿題があった。生徒達は壁に張り出された模造紙に自由にそのイメージを書いて



生徒達が演劇を通して学んだ地域課題の中に、分断や対立、福島に対する差別などがあり、それらの出来事に苦しむ地域の方々へ心を寄せてきた。そんな生徒たち自身の中にも少ない知識と偏った情報により、中東・イラク・難民に対する差別を作り上げてしまっているということを知った。「物事は多面的である。少ない情報から得るイメージが全てとは限らない。偏見や差別はそこから始まってしまいがち。そして、それらは戦争の素なのです。」という高遠氏の言葉は、生徒達に深く刺さったはずである。

イラク支援を事例に、復興の現状と課題についてお話いただいた。戦争と難民の問題について、「人道危機」と報じられる時には大抵事態は泥沼化していることや、報道は「点」でしかなく、時々しか出てこない点と点を繋げて結論を出すのはとても危険であること。大切なのは点と点の間にある経過を知ることだということを知った。世界で起きていることをなるべく自分の力で知ろうとすることや、そのためには日本のメディアだけでは情報は圧倒的に足りず、海外のメディアに頼るしかなく、それ

には英語が絶対が必要であることなどを生徒達に訴えた。



また、広い国際社会の中で平和に共存していくためにはお互いをもっと知らなければならないことや、非暴力の解決方法は対話によってしか生まれないという結論から生まれた高遠氏の現在の活動 (絵本の読み聞かせや演劇WSなど) にも触れ、本校で行っている演劇プログラムの感想も交えながら、一緒に世界を平和にしていましましょうとお互いの活動を称え合った。



(3) 生徒の感想

- ・日本は平和だ、戦争に関わりはないと心のどこかで思っている節があった。海外に目を向けるのは勿論、日本についても知るべきだと思った。
- ・事前に高遠さんがイラクで拘束された時の記事を読んだ。日本国民の激しいバッシングがあったと知った。今回お話を聞いて、それが無知ゆえの行動だと思った。もっと自ら世界の問題に目を向け、批判するにもしっかりと知識を身につけた上で行動したい。
- ・自分がどれだけ世界に対して無知なのか思い知らされました。日本、そして福島への偏見があるように、中東やイスラム圏への偏見・差別が少しでもなくなるように、世界の現状を自分事として理解することはとても必要なことだと思いました。

(4) まとめと今後の展望

最初に行った宿題は、偏った知識によって生まれる偏見を自分事に捉えるという、若干荒っぽいやり方ではあったが、生徒達は自分達の中にある偏見に気付くことができ、衝撃的な体験となった。その後の講話は、イラク復興と双葉郡の復興を重ねながら聴くことができた。ここで感じたことを受けて、まずは身近な社会から変えていけるよう、生徒の能動的市民性を育てていきたい。

2. 1. 4 探究接続

二年次から始まる未来創造探究とのスムーズな接続を図るためのプログラムを年度後半に実施した。昨年同様、コロナによる影響は大きく、講師を招聘しての講義やワークショップ、対面による活動はできず、オンラインによる対談や、探究への導入段階となるような夏季休業中の課題に取り組みせるといった機会を通し、探究への意識づけを図った。

(1) はじめに

1年次で履修する地域創造と人間生活は、二年次以降の未来創造探究への準備として位置づけられる。地域課題等を未来創造探究につなげ、より深い学びを可能にすることができる。一方、年々、先輩方が行ってきた探究活動がより多様化、発展化していることから、探究活動自体への不安を持つ生徒も少なくない。この実態を踏まえ、次のようなプログラムを実施した。

(2) 実施内容

① 2月2日（水）テーマ検討ワークショップ

探究テーマとは何か、という確認をしたうえで、前述のとおり、探究への不安や疑問を少しでも解消し、1年次での取り組みを円滑に探究に生かせるよう設定した。

事前にアンケートを実施、探究について思っていること、印象をあげさせた。多くの生徒が、何をしてよいかわからない、先輩方のような探究ができるのかどうか自信がない、双葉郡に限定したテーマでないといけないのか、といった不安をあげていた。そのような生徒の声をもとに、探究の意義の再確認と、卒業生、カタリバスタッフとのオンラインによる対話を行ったのが本事業である。

■みんなと考えたい問い

そもそも「探究」とは？

探究をして良いことあるの？

未来創造探究って何？
地域って何？

探究を進めるにあたって大切なことは？



初めに担当教員より探究活動の意義や、2年次・3年次へのつながり（深化）について確認した。その後、担当教員、卒業生（4期生 M・K さん）、カタリバ横山氏の三者対談へと進み、M・K さんの探究へのきっかけやその後の取り組み、その中で自分がどう変わっていったかという内面の変化までを語っていただいた。まとめとして、M・K さんは後輩たちに「身近なところから始めてよい」「そこで生まれた興味と地域の課題が最終的に結びつくこともある」など、経験に基づいた道筋を示していただいた。

(3) 成果

生徒からは「探究活動が身近に感じられ、不安が軽減された」、という旨の意見があがり、非常に前向きなかたちで終えることができた。授業後にはさらに質疑の時間を設け、多くの生徒が、具体的に自分のやりたい探究に関するアドバイスを求めるなど、制限時間いっぱいまで質問をしていた。これから探究へと進むこの時期に、より具体的な流れを示せた、という点で有意義であったと思う。

(4) 課題と展望

新型コロナにより、開催時期の調整が難航する事態もあるが、対面・オンライン問わず、具体的な指針を生徒に示し、適切な時期に開催できることが、本事業の大きなポイントとなると目される。

2. 1. 5 キャリア教育

本校の地域創造と人間生活（産業社会と人間）の3つの柱「自分を知る」「地域を知る」「世界を知る」は、生徒が自らのキャリアを考えるために重要な要素となっている。3本柱を通じて、年間を通して生徒には自らのキャリアについて考えられるようにしている。特に年度後半の時期に、高校卒業後の進路のみならず、将来どのような生き方をしたいのかを考えるきっかけとなる機会を設定した。

(1) はじめに

演劇のためのWSと重なる部分もあるが、オンラインでのPAVLIC講師の講話、並びに生徒同士での対話を通し、自らのキャリアについて考えさせるプログラムを実施した。「人生グラフ」作成のプログラムにおいては、生徒自身が自らの人生を振り返り、他者に自らの人生を話し、また他者の「これまで」と「これから」を聞くことで、自分のキャリアプランニングのきっかけとなる機会となった。

(2) 実施内容

① 2月3日（水）しくじり先生

昨年度に引き続き、本校教員による講話、対話を行った。対話に参加してもらった教員には、人生の転機、苦しかった・辛かった時期などを具体的なエピソードとともに語ってもらった。これからのキャリアに向けて一歩を踏み出せないでいる生徒が、自分から一歩を踏み出せるよう、教員には失敗を含めた踏み込んだ自己開示をしてもらった。その結果、生徒は教員が経験した失敗や挫折から奮起に勇気をもったり、同じような悩みを抱えていたことに共感したりしていた。



② 2月2日（水）マインドマップ講座

内山雅人氏による、実技を交えた講話をオンラインで行った。マインドマップの具体的な活用方法、それをもとにどのような効果が得られるのか、などを教授いただいた。探究活動に向けた、各自の思考の整理、視覚化を目指したものであるが、日ごろの学習方法といったところにも活用できる、という点でも、生徒たちは興味を持ち、また熱心に取り組んでいた。



(3) 成果

教員への印象の変化、同じ悩み、似た性格を感じ取り親しみやすさを感じたほか、これからの動き出し（カタリバの活用や進路意識の具体化）が見られた。特に、自らが失敗を恐れず、挑戦を続ける姿勢を感じられたことは、成果として大きいと思われる。

(4) 課題と展望

キャリアへの取り組みは、3年間継続して行われるものであり、適切な時期に行われなければならない。進路指導部や探究活動とのつながり、将来への見通し、今後の社会変化なども踏まえ、教員、スタッフが柔軟に対応できるか、という点が課題といえる。

2. 1. 6 「未来創造探究への接続」の観点から見る「地域創造と人間生活」

本校では本事業の指定を踏まえて、令和3年度より学校設定科目「地域創造と人間生活」を開講した。これまでは「産業社会と人間」が開講されていたが、時代背景に合わせた刷新、また2年次への接続強化を目的として、より3年間のカリキュラムを有機的に繋げていく意図を込めて新たに開講した。

各プログラムの詳細は各頁に任せ、本頁では2年次から始まる「未来創造探究への接続」という観点から見た際の要素を記述する。

(1) 「地域創造と人間生活」について

「産業社会と人間」は総合学科の課程では入学年次の必須科目となっているが、指導要領上では「勤労観、職業観の育成」や「各教科・科目の履修計画の作成」が大きな目的となっていた。これまでの本校における課題として、2年次から始まる「未来創造探究」への接続の弱さが挙げられていたこともあり、科目の目的を再整理する意味も込めて、本科目を新たに開講した。

(2) 複眼的視点から課題の本質を掴む「クリティカル・シンキング」

今年度の演劇プログラムでは、追加インタビューを行った班もあった。特に最初にインタビューした人とは異なる立場にいる人の話を聞いた班もあり、複眼的視点から地域の有り様を観察している様子が見られた。2年次の未来創造探究で地域課題解決の実践を行っていく上で同様の観点は重要であると言える。地域や社会で起きている問題の原因の多くは、多様な立場の人が関わっており複雑である。その中から課題の本質を掴もうとする思考（クリティカル・シンキング）を育むことに繋がっていると考える。

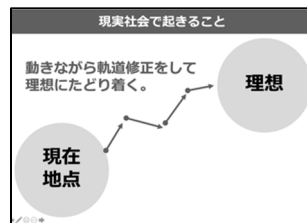
(3) 解のない問いに向き合うための学習姿勢「AAR サイクル」を育む

2年次に控える未来創造探究ではいわゆる「解のない問い」に向き合うこととなる。机上の空論で終わらせず、複雑な地域社会での実体験を通して学ぶこととなるため、想定外のことが起こる。その際に求められる学習姿勢が「AAR サイクル」である。AAR サイクルとは「Anticipation＝見通し」「Action＝行動」「Reflection＝振り返り」の略で、「OECD ラーニング・コンパス 2030」で提唱されている学習姿勢である。精緻な計画を作成・実行していきながら、仮説を持ちながら試行錯誤や軌道修正していきながら、目標へ近づいていく。

ただ、生徒はこの学習姿勢に慣れていないことが多く、

2年次では例年、「うまくいくか分からないから実践できない」といったような様子が一定数見られた。

「地域創造と人間生活」では、AAR サイクルを定着させるため、「プチ探究」や「しくじり先生」を実施し、「まずは実践に移すこと」や「思い通りにいかなかった経験から学ぶこと」という体験を図っている。

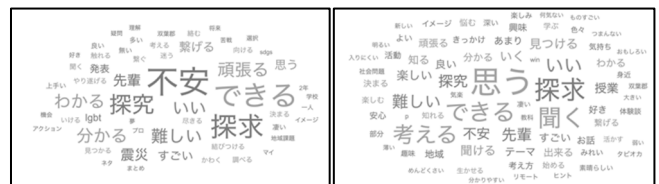


プチ探究において、
失敗は存在しない

(4) 年次横断化によるシームレスな探究テーマ設定

これまでは年次で区切りとなるため、本来繋がるはずの1年次で取り組んだ学習内容が繋がりがづらかった実情があった。そこで昨年度より、2年次から始める探究テーマ設定を数ヶ月前倒しして、1年次から「プレオリエンテーション」を開始している。自身の気になる Will/Need キーワード（マイキーワード）の洗い出し、初期調査の基となる「小さな問いづくり」までを行い、あえて学習内容を年次で区切らないことで、シームレスに接続させようとしている。

また探究テーマ設定までの過程を丁寧に踏めることにより、2年次に臨む上での不安や疑問が解消される様子も見受けられる。



※左：プレオリエン前の感想／右：後の感想

右の方が好意的なワードが増えている

2. 2 未来創造探究（2年次）

2～3年次の「総合的な探究の時間」では、地域の問題の解決に向けた実践プロジェクトを創出する。本校で「未来創造探究」と呼ぶその授業において、生徒は自らの興味関心に従い、「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」の6つからひとつのゼミに所属して探究活動を行う。オリエンテーションでは自分の興味・関心（Will）や地域の課題（Need）について考えたうえで、ゼミ選択を行った。

2. 2. 1 探究オリエンテーション

（1）はじめに

本年度は「問いの設定」と「調査方法」を年度当初の主な目標とした。まず、探究を進める上で大変重要な「問いを立てる」練習に重きを置きながら、自立して調査を進めることができるように、学校図書室での文献の検索方法やインターネット検索時の注意点等について情報提供を行った。

（2）実施内容

まずは問いのワークから始めた。前年度担当者からのアドバイスにより、探究を進めるにあたって一番必要となるのが、「問いの設定」ということであった。高1年次の後半から、少しずつ自分のテーマについて考えてはいるが、それを問いの形で整理しないことには、探究が進まない。「問い作りブラッシュアップ」と称し、まずは「閉じた問い」と「開いた問い」を行ったり来たりしながら、できるだけ多くの問いを作る練習を行った。題材としては、高1年次の最後に行った「ヒューマン・ライブラリー」という地域で活躍する人のお話を聞いた際に残っていたワークシートを元に、自分が興味ある内容に絞り、それを別の生徒と議論を重ねながら、問い作りを行った。

次に行ったのは、「調査の方法」についてである。「問いの設定」の次に大事になってくるのが、調査アクションである。これも前年度担当者からアドバイスがあり、「調査する」というと生徒は安易にインターネットに頼る傾向があり、書籍等の文献を参考にすることが少ないという指摘があった。そこで、今年度は「問いの設定」がある程度できた生徒から、学校図書室での文献検索の方法や、インターネット（特にGoogle検索）検索時の注意点について話をした。特に強調した内容としては、文献調査とインターネット調査それぞれのメリット・デメリットである。安易にインターネットに頼る危険性と文献調査の信頼性の両面を伝え、合理的な調査方法の使用を推奨した。ちなみに、この時期はちょうどゴールデン

ウィーク直前で、休暇中の課題として自分の探究テーマに合った文献を1冊選び、その報告をするというのを課題とした。

ちなみに、この「問いの設定」と「調査方法」のワークが終了したのち、自分の興味関心に基づき、6ゼミ（「原子力防災探究ゼミ」、「メディア・コミュニケーション探究ゼミ」、「再生可能エネルギー探究ゼミ」、「アグリ・ビジネス探究ゼミ」、「健康と福祉探究ゼミ」、「スポーツと健康探究ゼミ」）の担当者と面談し、所属ゼミを決定していくという流れになる。

（3）成果

オリエンテーションとして問いのワークをすることで、探究テーマについて深く考えるきっかけを作ることができ、その後のゼミ選択への円滑な移行に繋がった。また、調査方法特に文献調査の薦めにより、本を読もうという意識が少し向上したようである。

（4）課題と展望

この年の12月に宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校に視察をした際、担当者の方から「探究が進むのは問いのワークの際の逡巡の後に爆発した時です」という言葉が脳裏を離れない。本校では問いのワークをそこまで突き詰めてやらなかったが、とことん問いと向き合うことの大切さを、後から感じている。本校と連携している早稲田大学の研究員の方も「良い研究ができるかどうかは、納得いく問いが立てられるかどうかです」という話に通じるところがあり、改めて問いの大切さを感じた。これは生徒だけでなく、生徒の伴走者となる各ゼミの担当者についても同様に、問いの大切さをいかに共有し、各ゼミ担当者も生徒の探究に関連する問いを磨くために伴奏できる仕組みや環境を整えることが大切だと感じている。

2. 2. 2 進路探究 キャリア学習

本校の「未来創造探究」は、水曜日の5・6校時と木曜日の3校時に設定されている。木曜日の授業は、探究に関する知識のインプット学習と進路に関する学習の2つの側面で行われた。インプット学習については、主に福島の抱える課題を社会科学的及び自然科学的な観点から捉えた。また、進路に関する学習については、小論文や志望理由書、セルフエッセイ作成を通じ、自分の進路について深く考える時間とした。

(1) はじめに

今年度は水曜探究2時間と木曜探究1時間の連携・往還を深め、探究と進路については教科学習の意欲が高まるよう、関係部署による連携を綿密に行った。

(2) 実施内容

前期（4月～9月）の前半は、まだゼミの所属や探究内容も明確ではないため、地域の課題として福島や日本が抱えている課題を取り上げ、水曜日5・6時間目で各自が行う探究活動における、テーマ設定・問い設定の助けとなるよう、授業内容を設定した。

例えば、社会科学的な視点からは、処理水の問題、メディア報道のあり方、過疎化・高齢化問題、自然科学的な視点からは主に放射線について理解を深め、それについて簡単な議論も行った。

また、前期の後半においては、探究に行き詰まる生徒も散見されたタイミングを見計らい、SDGs という観点で、全世界的な課題を復習しつつ、日本の課題の特徴を捉え、また、課題は独立して存在するのではなく、様々な問題と関連を持ちながら存在することに目を向けることで、視野を広く持たせ、より自分の興味関心のある課題について理解を深めるきっかけを作った。

後期（10月～）になると、生徒の探究テーマ・問いもある程度決まり始め、解決のためのアクションも少しずつ実践されるようになり、各生徒が自分なりの目標・方針を定めて進み始めた。そこで進路探究では、生徒の進路意識の向上を目指し、まずは小論文および志望理由書作成の講座受講、模試受験およびリライトによる文書作成を行った。四年制大学・専門学校進学希望者には小論文を、就職希望者には志望理由書の作成をしてもらい、まずは実際の文書作成の練習を、数週間に渡って行った。

志望理由書の作成においては、業者が提供する自己診断適性検査の結果も参考にし、自分の適性（コンピテンシー）・長所等を客観的に見つめることで、深い自己理解に努めさせた。

また、年が明けた後期の後半（1・2月）においては、

年度末に近づいていることを踏まえ、進路意識をより明確にしていくために、セルフエッセイの執筆に取り掛かった。セルフエッセイとは主に探究活動を通じた自分なりの生き方・在り方について、「書き手自身の個人的な知識や体験を基にし、読み手を説得するような、自分なりの意見を所定の書式に従って書くもの」である。セルフエッセイは昨年度まで3年次で書いていたが、進路意識の向上と、3年次4月における中間発表会に向けた準備の一環に位置付けたため、今回は2年次で実施した。

(3) 成果

水曜日5・6校時との連動を毎回意識したカリキュラム・マネージメントができた。生徒の学習の様子や学期・行事を十分に考慮しつつ、単発あるいはその場限りの内容ではなく、探究活動を深め、進路意識を高めるのに資する内容を提供できた。

特に、セルフエッセイの作成においては、偶然ではあったが、後期の期末考査（学年末考査）が終了し、毎年本校で行われる3.11 東日本大震災追悼式の時期に近い時に実施したため、想いを新たにして書く各生徒も少なくなかった。

(4) 課題と展望

木曜日3校時のゼミ担当者の意識がやや低くなってしまっているのが問題である。水曜日5・6校時は各ゼミ主導なので、主体的な運営がなされる一方で、木曜日3校時は年次（学年）主体になるため、ゼミ担当者の意識が薄れる傾向が出てしまう。進路希望を把握している担任と、専門的な観点から探究内容を把握しているゼミ担当者とは、縦と横で紡ぐ網の目のように生徒理解に努めていくことは、大きな化学変化をもたらす可能性に満ちているため、このつながりを多く作ることができるような戦略を様々な場面で考えていくことが重要であろう。

2. 2. 3 ① 原子力防災探究ゼミ

今年度の2年次は23名の生徒が原子力防災探究ゼミとして活動を行なった。例年に比べ、グループで同じテーマに取り組むという形態が減り、個人で設定したテーマに取り組む者の割合が多くなっている。地域コミュニティの再生を中心とした、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究するというのがゼミ全体のテーマであるが、ゼミを選択してきた生徒の興味・関心、課題の捉え方は必ずしもそれとは合致しなくなってきている。

(1) はじめに

今年度、原子力防災探究ゼミでは、生徒個々の興味・関心を出発点としたテーマ設定を重視した。一般的に地域の課題だと認識されているものを、半ば自らの興味・関心が地域の抱える課題の解決にどのように生かせるのかという視点で、多くの生徒がテーマ設定を行なっている。例年以上に、テーマは細かく分かれ、23名で18プロジェクトが進行している。複数で取り組んでいるプロジェクトも2名がほとんどで、それ以外は個人でテーマを設定して活動を行なっている。

(2) 実施内容

生徒個々の興味関心に基づくテーマということもあり、教員側からの一斉講義形式でのインプットはあまり行なわず、基本的に生徒の活動に対する教員のフォローは個別に行なっている。生徒ごとの担当教員も設定していない。生徒は毎回、その日の自らの活動を振り返る時間をとっている。それにより、時間の経過とともに自らの探究活動がどのような経過をたどってきたかを後に確認できるようにしている。また、振り返りにより、次の活動でこういった取り組みを行うかの見通しを立てる。

生徒相互が地域の課題や自ら設定した課題についてゼミ内で意見を交換する機会を確保したいと考え、テーマ設定の時期には、自らの理解が不足しているキーワードを自覚する機会を設けたり、テーマ設定後にはお互いのテーマやプロジェクトについて共有したりする機会を設けている。

(3) 成果

テーマ設定はお互い異なるが、お互いのプロジェクトに協力しあう生徒の姿も見られる。個々で設定したテーマはぶらさずに、仲間の助けが必要なときや、情報収集として有益な機会には、テーマを超えて協働している。具体的には、地域の子どもたちを集めたイベントを開催する際に、ゼミ内の別のテーマで探究を行なっている生徒が当日の運営に協力をしたり、地域の方へのインタビ

ューを行う際に一緒にアポイントメントをとり、同じ機会にそれぞれのテーマに関する情報収集を行ったりという動きである。

また、調査のために学校の外へ積極的に出ていく姿や、継続的に地域の方々の協力を得る姿は例年以上に多く見られた。学校外での活動については、コロナの影響でやりにくかった時期もあるが、そうした時期においてもオンライン等を積極的に活用し、地域の方々と繋がろうと努めていた。地域内でもやや遠方の方とのコミュニケーションについてもうまくオンラインを活用できている。

他のゼミの知見を生かして地域課題の解決にあたりと、ゼミをまたいだ協働も見られている。

【主なテーマ・プロジェクト】

①子どもたちが自信を持って自分の気持ちを表現できる地域づくりを目指し、チアを活用した居場所づくりの探究を行っている。地域の小学生向けの5回シリーズのチアスクールといわきFCホームゲームでの披露の場を組み合わせた「地域チアアップチャレンジ」を企画・実践した。双葉郡内の小学生14名が参加し、女子児童の習い事が少ないという双葉郡の潜在的ニーズも明らかとなった。子どもたちが自信をもって表現する力の育成や、チアを通じた地域のつながりの創出を目的として活動しており、その効果もアンケートで測定し、有効性を確認している。現在、次なる取り組みを検討している。

イベント日程 /

第1回 10月9日(土) 9:30~11:30 練習会ふたば未来学園 地域共同スペース
 第2回 10月17日(日) 9:30~11:30 練習会みんなの交流館ならはCanvas
 第3回 10月24日(日) 9:30~11:30 練習会@富岡町文化交流センター学びの森
 第4回 10月31日(日) 時間未定 11月8日にあけのりハーサル予定
 第5回 11月3日(水・夜) Jヴィレッジで行われる「いわきFCvs東京蹴球」の試合前パフォーマンスに参加!

【申し込みについて】

①右のQRコードを読み込む
 ②フォームに必要事項を記入
 ③申し込み完了! (後日確認メールをごちから返信します)

プロジェクトについて

「Let's cheer up futaba project」とは、ふたば未来学園中学校の生徒がよりよくなるために、ふたば未来学園の内外で、地域の子どもたちを集めて、地域の子どもたちを応援したいという気持ちを持ってきてね〜

新型コロナウイルス 対策実施!

チアダンスが楽しくなるかも! WEBで見るのもオススメ!!

練習の持ち物

動きやすい服装・水分・運動靴(中履)・タオル
 チアを楽しみたい方の実音!!

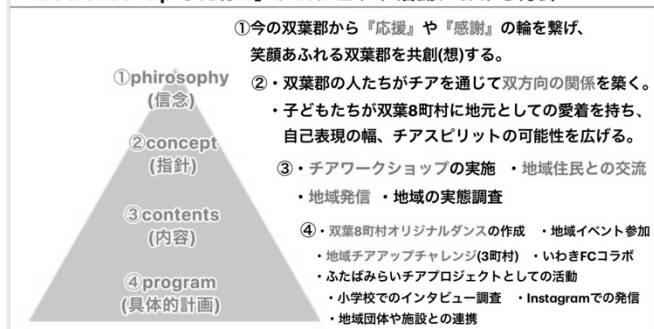
その他

この事業をコーディネートしている「ふたば未来学園」のホームページ「cheer futaba@gmail.com」にてご確認ください。

主催 Let's cheer up futaba project
 責任者 ふたば未来学園中学校2年 松岡 千尋(cheer.futaba@gmail.com)



「Let's cheer up ふたば!!」プロジェクト活動における方針



②原子力防災探究ゼミと再生可能エネルギー探究ゼミのメンバーが協働でプロジェクトを行なっている。再生可能エネルギーを用いたイルミネーションの設置により、地域の安全や安心をはじめとした、地域の明るさを取り戻す探究を行っている。原子力防災探究ゼミに所属する生徒が1年生の時に、学校を明るくしたいと学校敷地内のクリスマスイルミネーションを提案して、実行したことがきっかけとなっている。昨年の3月11日には、広野町の『3.11 復興 10周年を心に刻むライトアップ&祈りのスカイランタン』に参加してライトアップによるまちづくりの可能性を感じるとともに、ボタン電池等使い捨ての電源ではなく、持続可能な社会に適した、電源の工夫も出来ないか考えていた。

一方で再生可能エネルギー探究ゼミに所属している生徒3名は、地元広野の川を生かした小水力発電の可能性に関心を持ったり、浪江町の水素ステーションを見学したりして、再生可能エネルギーを生かした社会づくりを考えていた。

この両者が出会い、再生可能エネルギーによるライトアップで町の明るさを創出しようと取り組んでいる。取り組みに際しては、地域の方々から現在家庭で使っていないイルミネーションの寄付を受け付けるとともに、広野町、いわき市のNPOと連携して、それらの団体が主催するイルミネーションイベントへも協力するなど、お互いに共同する関係を築きながら着々と実践を重ねている。



(4) 課題と展望

本ゼミでは、原子力発電所事故後の地域社会のあり方について探究することがゼミ全体としての大きなテーマとなっている。具体的には、廃炉の進め方や汚染水の処理方法等、事故後の様々な処理について地域がどのように関わるべきなのか、避難や期間の過程で生じた対立や分断をどのように解決するのか、避難により断絶してしまった地域コミュニティをどう復活させるべきかといった課題に取り組み、解決に向けて実践することを想定していた。

実際には、地域の分断や地域コミュニティの再生に向けた取り組みは見られるが、廃炉や事故後の処理についてテーマにする者は現在ほとんど見られない。生徒の興味・関心を出発点としてテーマを設定しているため、仕方がない面もあるが、この地域が今後数十年と向き合っていく廃炉や事故後の処理について生徒らが関心のない現状については、危機感を抱くところでもある。一方で、各種団体のワークショップ等で廃炉等について学んだり、同世代の仲間と対話したりした生徒には、「これまで知らなかったり、避けてきただけで、廃炉や事故後の処理はこの地域の課題であり、自分たちの声も届けなくてはならない」といった感想を持つ者も少なくない。これらについて生徒らが学ぶ機会が乏しいという現状を改善していく必要がある。

また、「活動」したことで満足することなく、その活動が、理想の地域や、地域の課題解決にどのように資するのかを常に確認することはゼミ全体として徹底したい。

2. 2. 3 ② メディア・コミュニケーション探求ゼミ

メディア・コミュニケーション探求ゼミ（以下MCゼミ）は、双葉郡を中心とした地域が抱える課題に対し、情報の発信（デジタルマーケティング）や過去の記録（アーカイブ）といった手法を通して、その解決に寄与することを目的としている。その取り組みには、地域の魅力や特徴を効果的に発信して興味を抱いてもらうという外的視座、震災等のつらい経験を教訓として地域で共有し同じ苦しみを繰り返すまいという内的視座の両面が想定される。

MCゼミを構成するメンバーは30名で、その内訳はアカデミック系列生20名（女16、男4）、スペシャリスト系列生10名（女9、男1）となっている。一人で活動に取り組む者も多いが、テーマの近いもの同士、またはテーマの方向性が違うもののその手法に類似点があるもの同士でグループを形成し、各々のペースで探究活動に励んでいる。

（1）はじめに

震災について「ほとんど覚えていない」と本ゼミ生の大半が語る。これは、震災当時彼らが未就学児であったことに起因する。これまでの探求では、自身の経験した「ストーリー」に基づいたテーマ設定が主であったが、これまで家庭や学校で得た学び・双葉郡の地域課題について考察した高校1年次での活動などによる、客観的知識に基づいたテーマ設定が顕著となる。伴って、彼らに寄り添う我々アドバイザーの関わり方も、柔軟な変容が求められる。



前述のことに由来して、本年は、震災・原発事故からの復興や風評被害の払拭といったテーマが減少し、双葉郡の魅力の開発・発信や、他地域も抱える課題に対し双葉郡を活用して解決に取り組むなど、多様なテーマが設定されている。一見立派なテーマであっても、考察が表面的である可能性に留意し活動を進めた。

最後に、今年も続いた新型コロナウイルスによる制限は、本ゼミにとって非常に悩ましい課題である。現場に足を運び、様々な人間と関わりあうことが必要条件であるため、我々をはじめ彼らも機会の確保に非常に苦慮している。その制限の中で得た貴重な機会に、細かい分析と深い考察を加え、活動を進めているところである。

（2）実施内容

【Ⅰ：ゼミ選択期】

年次全体で取り組んだ「問いづくり」によって、ある程度テーマの構想が見えている状態でのゼミ活動スタートとなった。構想はあるものの、迷いのある学生も多数いたため、一人一人と丁寧に対話しゼミとの適切なマッ

チングを模索した。その結果、当初40名弱集まった本ゼミであったが、他ゼミへの異動により、現在の30名体制となった。

【Ⅱ：導入期 ～指定課題の調査アクション】

集まった彼らの想定しているテーマは幅広く、双葉郡の魅力発信という本ゼミらしいものがある一方で、商品開発や楽器演奏・古着活用など、必ずしも震災というテーマと直接結びつかないものが散見された。そのため、まずは本ゼミが想定している活動に目を向けてもらうべく、こちらが指定した課題についての調査アクションに取り組ませた。指定課題と選択した人数は下記である。

- | | |
|----------------|------|
| ① 「メディア」とは | 6名選択 |
| ② 「コミュニティ」とは | 3名選択 |
| ③ 「アーカイブ」とは | 8名選択 |
| ④ 「風評」とは | 7名選択 |
| ⑤ 「双葉郡の食品」について | 6名選択 |

調査結果は、パワーポイントなどのスライドを用いた「プレゼンテーション形式」で発表することとした。これは、収集した情報を他者に伝えることで、知識を根本的に理解してほしいという願いと、探究発表会に向けた練習もかねての取り組みである。発表はグループで行ったが、模範的であった生徒1名を選出し、全員の前で発表させて共有した。



【Ⅲ：テーマ決定期 ～自由課題の調査アクション】

前述の活動を踏まえ、テーマ決定に当たっては「双葉郡」というキーワードに触れるように指示をしたうえで改めてテーマを再構成するよう求めた。各々の設定したそれらのテーマに基づいて、自由課題の調査アクション

に取り組ませ、指定課題同様にプレゼンテーション形式での発表により、お互いの学びを共有した。この場面で発表させた背景には、調査アクションの推進はもちろんであるが、科学的エビデンスに基づいた説得力ある

論を構成する経験値を高めるという目的も内包している。分科会形式での発表の後、各分科会で代表者を選出し、代表者のみ全体の前で発表させて共有した。

<テーマの決定>

例年取り上げられる風評の払拭や後世への東日本大震災の伝承に加え、地域の魅力をアニメや動画で発信する活動、さらには女性の生理問題やフードロス問題・ゴミ問題などについて双葉郡を舞台に解決していく活動など、彼らの個性が顕れる幅広いものとなった。

【IV：活動前期 ～解決アクション】

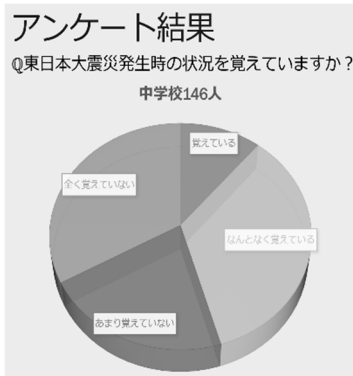


ここから、各々の探究活動が本格化する。効果的な解決方法を模索するためアンケート調査を行う者、発信するための絵本製作や調理を行う者、地域の魅力を見つけるために様々な

地域施設を訪問する者、自身のテーマに関するスペシャリストとの繋がりを得る者など、テーマの解決仮説を得る活動が多く見られた。また、テーマの類似性などからグループの解体・離脱なども積極的に行われた。

【東日本大震災・原子力災害伝承館 訪問】

本ゼミ生全員で、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪問する機会をいただいた。そこでは、語り部さんの体験談の聴講と館内視察を行った。多様な展示物を網羅するには時間の制約が大きかったため、事前に館内の情報を共有し、自身のテーマに沿った観覧コースを予め絞ったことで、各々が有意義な時間を過ごすことができた。これをきっかけに、テーマの再構築を行う学生もいた。



(3) 成果

【A：地域課題への理解】

自ら調べ、外部の方とコミュニケーションをとり、考察を続ける中で、これまで得てきた地域課題に関する知識が表面的であったことに気づくことができたようだ。特に、双葉郡8町村が震災からの復興や風評の払拭、地域の魅力発信のために様々な取り組みをすでに行っていること、他方では自分のテーマに関して先行的に実践している方がたくさんいることなど、驚きであったようだ。

【B：課題解決への実践】

活動前期である今年度でも、積極的に解決アクションを行う学生が見られた。例えば、生理問題について取り組む学生は、校内のトイレに生理用品を設置して意見を集めた。アニメで聖地巡礼と題したチームは、作成したキャラクターをSNSで広く一般に拡散し、名前の公募を行った。ここまでの進捗がなくとも、テーマに関するプロフェッショナルと繋がり、先方の活動に参画するなどして解決への道を歩み続けている。

【C：学生の資質】

数回行った発表を通し、得た知見について論を整えアウトプットする能力が身についた。また、活動が進むにつれて、意見等の反応を得た生徒は、他者に何らかの影響を及ぼすことができたことに喜び、社会の一員としての市民性の獲得と社会貢献への意欲の喚起が見られた。



(4) 課題と展望

夏季休業中の蔓延防止等重点措置、冬季休業中のオミクロン株の発生等により、今年度は彼ら自身が思い描いた活動ができずに苦慮している。一方、来年度の前期は

【活動後期】である、探究テーマの結論を得るべく、活動による材料収集を終えなければならない。この制限が解除される明確な基準がない以上、この制限の中で活動を進めることを想定することが必要となる。

探究を深めるにあたっては、他者との関わりは必須であるため、活動の在り方や方法を工夫して行動制限下でも実践できるよう運びたい。また、数少ない活動機会をより有効に活用できるよう、広い分析と深い考察ができるよう、生徒に寄り添いながら今後進めていきたい。

2. 2. 3 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故による災害から10年が経過し、再生可能エネルギーを取り巻く環境は大きく変化している。2050年に向けたカーボンニュートラル、コロナ感染拡大に伴うエネルギー消費の分散化など、脱炭素実現のために再生可能エネルギーが果たす役割は尚一層着目され、導入拡大への具体的取組みが求められている。また、福島県では2040年頃を目途に県内エネルギー需要の100%に相当するエネルギーを再生可能エネルギーから生み出す目標を掲げている。

本探究ゼミでは、相双地区の復興状況や地域課題を調査し、原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会づくりを目指すため、より身近なエネルギーとして理解を深めるため探究活動を進めている。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒12名が、5つのグループに分かれ探究活動を実践している。除染除去土壌から双葉郡の環境再生に取り組む『除去土壌班』、次世代の新エネルギー社会を考える『水素エネルギー班』、地域に流れる川や水路を利用し実験を行う『小水力発電班』、再エネの中での風力発電の現状を調べる『風力発電班』、二酸化炭素の排出量削減の視点から再エネ普及を目指す『CO₂削減班』。各班ごとに課題を設定し、地域再建するための再エネの役割について考えていく。

(2) 実施内容

① 除去土壌班

震災後から現在まで汚染された土壌がいたるところにたくさん保管されており、現在も除去作業は継続中である。それによって、保管場所の確保や管理のため多くの土地や人が必要となる。汚染土そのものを減少させるための方法の一つとして、除去土壌の再生利用というテーマがある。

このテーマで探究を始めようと考えたきっかけは双葉郡の飯館村長泥地区や富岡町にあるリプルン福島において、双葉郡の環境再生事業が実施され、そこでは汚染土壌に関する研究や外部から訪れた方への震災前、震災後、現在から未来についての情報提供の場を設けており、研修という形で様々な高校の生徒とディスカッションや学習が行われている。特に飯館村長泥地区では、環境省が環境再生事業等を行っていることを見学し、汚染土壌活用研究の最前線を見学させてもらい、新たな視点を得ることができた。また、福島高専の原田正光教授にご講演をいただき、より深く土壌利活用について見識を深めることができた。

【飯館村長泥地区の見学】



以上のことから、「除去土壌の再生利用」を探究のメインテーマとし、私たちができることを考えることとした。今後、並行して本格的に再生可能エネルギーの利用を目指し波力発電に関する研究を進め、具体的に発電構想を行いプロトタイプ発電モデルの製作に取り掛かりたい。

② 水素エネルギー班

FH2Rを見学したのをきっかけに、水素に興味を持ち「水素を知る・伝えること」を目的にしています。最終的には水素を活用した様々な機器について学び、水素によって動かすことのできる機器を製作したいと考えている。

本研究テーマは、CO₂排出ZEROを可能にできる「水素」をどのように活用し、普及させることができるのかに挑戦するプロジェクトである。水素を燃料にした「fuel cell」という燃料電池自動車のキットで、模型自動車を走らせたり、ソーラーパネルを使って純水を電気分解し水素を得る実験を行った。燃料電池で水素を使って酸素と結び付け、起電力が得られることを実験で証明でき、模型自動車を走らせることができたが、今後、実用的にするにはどうしたらいいかが課題である。

燃料電池の数を増やしてみることや、純水のタンクの大きさを変更することを実験で試したい。また、今後安定的に高い起電力を発生させるために燃料電池の構造を研究し、自作できるか、レンタルできるかなどを試行錯誤し前に進めていきたい。その後、水素のメリット、デメリットを伝える予定である。

【FH2R 見学の様子】



③ 小水力発電班

広野町は、駅からの登下校の道が、夕方暗くなり危ないと思っていた。地元の人たちはどう思っているのかをアンケートで確認したところ、88%の方

が同じような思いを持っていることがわかった。その現状を再生可能エネルギーの力で変えたいと考えた。ただ明かりをとすのではなく、広野町全体をイルミネーションで飾ることで、震災後人口減少で寂しい感じがする広野町の人々の心にも元気を届けたいと思った。実際に暗がりや比較的明かりの少ない地点を絞り込み具体的に計画を考えた。その計画を基に、役場の復興企画課に出向き、イルミネーションを設置する許可を得た。イルミネーション機器は学校にあるものを活用しようとしたが、数が足りないことが判明した。そこで、21世紀の森公園の冬場イルミネーションにおいて、公園をライトアップしている団体「NPO 法人いわきイルミネーションプロジェクトチーム」の手伝いをし、その流れで機材を貸していただけることになった。1月22日に実際に設置する予定までこぎつけることができた。

【イルミネーションの設置】



④ 風力発電班

浜辺に打ち上げられるゴミ問題、とくにプラスチックゴミについて関心を寄せていた。プラスチックゴミは海洋生物との関わりで広く世界から興味関心を引いている部分である。本校では二つある寮のうちの一つの名前が「海風寮（うみかぜりょう）」であり、身近な海を研究することで周囲の自然環境をよいものにできればと考えている。

地元の豊かな自然環境について考えていくという点で、風力発電にも注目している。福島県には大きな二つの山脈が南北に横たわり、山脈を吹きわたる風も多い。すでに郡山市の布引高原風力発電所（65980kW）や田村市のユース滝根小白井ウインドファーム（46000kW）などが設置されており、私たちの学校のすぐ北に位置する檜葉町では浮体式の洋上風力発電の実証実験が行われていたこともある。風力発電は、振動や騒音また環境の問題から建設が反対される場合があるが、雄大に羽が回転する様子や周囲の長閑な景観を併せて、前述の布引高原のように観光資源として利用している場合もある。

この班では、早稲田大学の永井准教授からアドバイスを頂き、住民にも受け入れられデザイン的にも優れ観光名所になるような風力発電について考えている。また、原子力災害により山林に入る事ができないところが多く、今後、山林が今以上に荒れたり、獣害も増加したりすると考えられる。風力発電の建設や観光化は、山林の有効活用にもつながると考えられ、住民と里山の機能を補助できるのではないかと考えている。

【道の駅なみえ見学】



⑤ CO2 削減班

再生可能エネルギーすべてに共通するのは CO2 を増やさないということである。CO2 増加は近年、地球温暖化や異常気象の原因と認識され、世界的に解決しなければならない課題とされている。この班では、発電することで CO2 を削減するものはないか、さまざまな発電方法の中でも CO2 が出ない発電は何かなどを考えている。また、私たちのどのような行動（例えばテイクアウトでお弁当を食べると、自宅で料理して食べるのとどちら）が CO2 削減につながるか、想定して計算してみる活動も行なっている。これらの想定した計算がまとまったら、わかりやすくまとめて校内に CO2 削減を呼びかけるポスターを設置し、啓蒙活動を行いたいとかがえている。本校では中学校があり、カフェも設置され外部から来た人も飲食することができるため、やり方によっては幅広くこの活動を知ってもらえるのではないかと考えている。

【FH2R 太陽光発電システム見学】



（4）課題と展望

これまで、各班において思うように探究活動が進まず、試行錯誤を繰り返している状況ではあるが、アンケート調査や地域の方々とコミュニケーションを取りながら活動している。まずは、中間発表に向けての課題解決アクションと、再度『現状』と『理想』を整理し、再生可能エネルギーがもつ本質的な役割を模索しながら、粘り強く探究活動を継続していきたい。

2. 2. 3 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミの研究概要は、福島県の復興につなげる今後の農業とビジネスを探究することである。選択している生徒は、アカデミック系列1名、スペシャリスト系列【商業】1名の計2名（女子2名）と少人数である。本ゼミでは、2年次初めから2つのプロジェクトが進行している。コロナ禍の影響ではあるが、収束時期やオンライン等を活用し、自主的に能動的な活動が展開されてきた。

昨年度のゼミ生から、アグリという言葉が“agri：農業”だけでなく、“aggregation：集約する”、“ugly：醜さ”、“agree：承諾”といった意味のバトンを受け取ったことで、地元農産物を活用したマーケティングやエシカルの考えを取り入れ、グローバルな活動へとつながっていく。

(1) はじめに

探究活動でアグリ＝農業、ビジネス＝商業としてとらえた場合に、新学習指導要領における教科の目標を確認した。

【農業の目標】農業の見方・考え方を働かせ、実践的・体験的な学習活動を行うことなどを通して、農業や農業関連産業を通じ、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人として必要な資質・能力を（次のとおり）育成することを旨とする。

【商業の目標】商業の各分野に関する基礎的・基本的な知識と技術を習得させ、ビジネスの意義や役割について理解させるとともに、ビジネスの諸活動を主体的、合理的に、かつ倫理観をもって行い、経済社会の発展を図る創造的な能力と実践的な態度を育てる。

本来であれば、基礎的・基本的な科目を学習してから探究活動が好ましいが、2年次からの専門教科の学習が始まるため、同時展開での探究となっている。

今後必要とされる教科の目的を達成するために、解説の内容を確認した。

このような知識と技術を習得させるためには、資格取得や競技会への挑戦など目標をもった意欲的な学習を通して知識と技術の定着を図るとともに、単に知識や技術を習得させることにとどまらず、知識と技術を活用する上で必要となる思考力、判断力、表現力等を育成すること、ビジネスの場面を想定した指導をすること、商業の学習と職業との関連について理解させることなどが大切である。とある。

それでは、アカデミック系列の生徒とスペシャリスト系列の生徒はどのようにして実践をしたのかを振り返ってみる。

(2) 実施内容

・共通テーマである化粧品、地元というキーワードから地元で化粧品を製造している工場に、生徒たちがアポイントメントを取り、見学している。

2021/10/13 RACE Co., Ltd 広野工場見学

事業内容：化粧品の製造販売・化粧品の卸売り



○アカデミック系列 生徒S

・テーマ「双葉郡新お土産 せっけんせっけん」
・設定理由（生徒原文） 最初、石けんをつくりたいと思うようになったのは、私がずっとフォローしていたハンドクラフトの YouTuber がコーヒークラスを使って石鹸を作った動画を見てからです。

一回目の石けん作りで失敗したことと私的にこれを



作っても私が考えた「福島の魅力を多くの人に伝えたい」というビジョンにちょっと物足りない感があったのでやめました。

けど、このアクションを私の発表に入れて、三戸さんに発表して、どうやら覚えてくれたらしくて、たまたま、いわきのトラフト企画さんがコーヒークラスを使った石けんを依頼しようと思ったところ、三戸さんが私の話をしてくださって、



「よかったら、ぜひ高校生の方と一緒に！！」と言ってくれました。

私の中では特産品である果物を石けんにしよという思いはありましたが、それだと調達の難しさや季節性で難しいと感じて、手が止まっていたところ、この話が出てきたので、すごく嬉

しかった！！

・この生徒は、他の教科よりも研修での学びを多く取り込んでいる。高校1年には、ドイツ研修(British Hills・徳島県上勝町「地域の現状と自分の探求についての紹介」、高校2年ハッピーロードネット主催(北海道・青森研修「原発廃棄物の再処理や最終処分場について」、広島研修、NY研修(British Hills: 国連関係とオンライン(予定)と、今後の研修内容と探究がクロスすることで、より深い活動が期待できる。

○スペシャリスト系列【商業】 生徒Y

・テーマ「美容で町おこしすることはできるのか？」
・設定理由(生徒原文) 美容を通して双葉郡に興味を持ってもらい、地元の人が双葉郡のいいところを自覚できる社会。私がこのプロジェクトを始めた理由は、少子高齢化・過疎化や双葉郡の魅力を知らないことが気になったからです。そのため、商業で学んだことを、自分が興味を持っている美容を組み合わせたいと思いました。双葉郡産の果物を使った化粧品を開発し、それを使って魅力を発信して双葉郡に興味を持ってもらえたらいいなと考えています。双葉郡の果物を使うことで風評被害の削減にもつながったらいいなと思いました。

・この生徒は、以下のような活動を取り入れ、先輩や中学生との共同活動を展開し、活動の幅を広げている。
高校3年 再生可能エネルギー探究ゼミのリモネン発電班が取り組んだ内容を必要として、協力依頼し協働で実験を行った。化粧品の工場見学の反省として、自分たちで化粧品の成分抽出が可能かを検証した。



2021/12/14 中学生への呼びかけ

成分抽出に必要なミカンの皮を調達するために、ミカンの実は給食で食べてもらい、皮の回収は食堂や給食時の



Zoom 放送で呼びかけを行った。



・広野町より無償でいただいたミカンの報告会の場で、抽出した液体を副町長へ説明する機会があった。その際に、広野町も地元の果物を使ったものをふるさと返礼品として模索していることを教えていただいた。



一つ一つの活動が、多くの人に結ばれて行き、未来への探究活動を照らす結果となった。

(3) 成果

活動から生み出された内容として、わらしべ長者のように、一つ一つの活動の価値を地域が認め、そこから生まれる新たなワクワク感を生徒たちが楽しんで取り組み、意欲へと変換されていった。問題を解決できる手段が、協働で実践されることで、生徒たちの探究テーマが地域に必要で価値あるものに育ってきていることがうかがえる。

(4) 課題と展望

次年度は、民法改正により高校3年生での契約履行が可能となることから、地域の資源を活用した商品開発、地域産業の振興方策の考案と提案、情報通信技術を活用した合理的なビジネスの推進など、実際のビジネスに即した体験的な学習活動が、よりリアルな探究への進化し、創造されていくことだろう。また、各科目において習得した知識や技術などを基に、日ごろから学校教育活動全体を通して、経済社会の発展に主体的に貢献する意欲を高めていくことだろう。

これらの活動が、他の学校の総合的な探究活動にも参考となることに期待する。

2. 2. 3 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えようとしている。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。震災や原発問題で受けた子どもたちの運動能力低下問題も、様々なプログラムが考えられるようになり、少しずつ回復傾向に向かっている。しかし、震災や原発問題の余波もいまだに残り、福島県民の生活に不安を残し続け、不自由な環境で生活を送っている人々もあり、時間が経過したことで忘れられようとしていることや新たな課題が生まれていることも事実。将来的な課題は続いている。さらに、今年度は新型コロナウイルス感染症が世界で拡大。私たちの生活する日本、福島県にも大きな影響をもたらし、震災からの復興を目指すスピード感にも鈍りを与えた。

「当たり前は当たり前ではない」。これは11年目に私たちが身をもって感じたことである。そして今、「ステイホーム」「新しい生活様式」「緊急事態宣言」「ソーシャルディスタンス」など、私たちはまたそれを感じる事態となっている。日常の一部であった「スポーツ」というものが、どれだけ多くの人に元気や勇気を与え、様々な課題を解決できる可能性を秘めたものであったのかを改めて感じることとなった。「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指す。

(1) はじめに

スポーツを通して地域を豊かにする方策を探究する。総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行ってグローバルリーダーの育成を目指す。

(2) 実施内容

① 興味あるテーマに対する文献調査

高校1年次に決めた、各生徒のテーマに沿ってインターネットや図書館を使用した文献調査を行った。生徒が抱える小さな問いやテーマに関係する、人、施設、団体、専門家を切り口として、既に行われている取り組みや分かっていることの情報収集した。



② 地域のスポーツ振興を担う施設、団体の訪問

文献調査の後、地域のスポーツ振興を担う施設、団体を代表して、広野みかんクラブとナショナルトレーニングセンター Jヴィレッジを訪問、取材を行った。文献調査で分かったことと実際に活動している方から得た情報の同じ部分や異なる部分を通して、生徒が持つテーマをより多様な視点で向き合う時間を設けた。

③ グループ学習(調査・アクション)

文献調査や地域の実態、声を通して得た情報を基に、より深く調査する内容を探索し、生徒自身がどのようなアクションを通して、地域のスポーツ振興に寄与するかを検討した。実施する内容によって、個人で活動する生徒やグループで活動する生徒がいたが、生徒の主体性に任せ、グループ学習を行った。

広野 Revolution

「自分たちの得意なスポーツを使って貢献できる」ことを探して、活動を始めた。調査する中で、広野町が福島県の中でも運動力が低いことを知った。広野小学校の教頭先生と協議を重ね、小学校でスポーツイベントを開催し、小学生に運動する機会を届けた。



Easy Sports で not 苦手

「運動が苦手な人を減らすにはどのようにすればよいか」という疑問を基に活動を行った。高校2年生対象にスポーツに関するアンケート調査を行った結果、幼い頃からスポーツをやっているかがスポーツへの苦手意識に関係していることが分かった。その調査を基に、こども園に通う子どもが楽しめるスポーツを開発した。



コロナ禍でもスポーツ観客数を増やそう

新型コロナウイルス流行により、スポーツ観戦ができなくなった経験を基に、「コロナ禍でもスポーツ観戦ができるようにしたい」と考え、活動を始めた。いわきFCの試合ボランティアを行うことや、VRでのスポーツ体験を通して、多様なスポーツ観戦の実現により、スポーツ観客数を増やせることが分かった。現在、ふたば未来学園のバドミントン部と協働してVRコンテンツを作成し、学校内での活動の応援が活性化することを目指して活動している。



バドミントンで地域活性化

広野みかんクラブで開かれているバドミントン教室の参加者増加を目指して、活動を始めた。バドミントン部所属の生徒が、持っているスキルを活かし、地域に対してできることとして、バドミントン教室を選んだ。週1回、バドミントン教室を手伝い、小学生が楽しんでバドミントンができる環境を模索している。



スポーツを通して町をきれいにしよう

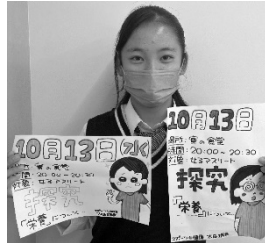
広野町にポイ捨てのゴミが多くあることに問題意識を持ち、活動をはじめた。日本で普及しているスポーツ GOMI 拾いを通して、広野町をきれいにすることを目指した。実際にイベントを開催した中で、きれいにすることよりも参加者がゴミに対する意識の変化が起きること



に気づいた。より多くの人に意識の変化を起こしてもらうために、小学校や地域でのスポーツ GOMI 拾いイベントの実施を計画している。また、広野町生涯学習発表会やFMいわきで活動の報告を行った。

アスリートに必要な栄養を少量で効率的に摂る方法とは

「少食なアスリートが無理せず栄養を摂取できるようにしたい」と考え、活動を始めた。株式会社明治の方とオンラインでヒアリングを行い、現在のプロテインやゼリーの現状を知ることができた。これま



での調査を基に栄養指導をふたば未来学園のアスリート生徒に行う予定だったが、コロナウイルス感染拡大により残念ながら中止となった。

(3) 成果

スポーツと健康探究ゼミに所属する生徒は、トップアスリート系列として日頃からスポーツや運動に親しんでいる場合が多い。しかし、スポーツの4観点(する、見る、支える、知る)で見ると常に「する」立場にいる。このことは、チームメンバー以外に交流することがないことを意味する。なぜなら、スポーツを極めるにはそれ以上の関わりが必要ないからである。しかし、未来創造探究は、地域の課題に焦点をあて、自らのやりたいことと重なる課題を解決するために活動する。すなわち、学校外の人と交流しながら、地域の人のために活動をするのである。自らの能力やチームのレベルをあげる

ことだけ考えればよかったのに対して、未来創造探究は自分以外の人たちのことを考え続けることが要求される。最初の時点では、生徒は地域の方に取材をしたり、協働することに対して、緊張していたり、積極的な姿勢を示さなかった。だが、地域の方との接点が増える、実際に生徒によって何かを提供できたことなどによって生徒が主体的に動き始めることがあった。様々な理由が考えられるが、「私でも、誰かになにかができる」ということを経験から気づくことができたからではないかと考えている。

スポーツはいつか、手段になる。お金を稼ぐためかもしれない、子どもに何かを教えるため、誰かを支えるためかもしれない。スポーツを超えて、だれに何をなしたいのか、簡単ではないが、生徒が少しずつ考え、生徒自身の思いを形に行ってもらいたい、そしてそのスタートを今年の1年で作れたのではないかと。

(4) 課題と展望

本ゼミに所属する生徒の多くは、各部活動の試合や練習日程などによりフィールドワークや各種の体験会などにグループ全員で参加することが難しい場合がある。長期休業中も同様であり、探究活動と部活動のバランスがうまく取れない状況がある。授業時間をうまく活用し、より多くのアクションを起こしていくには、情報共有や機会提供の面でより工夫が必要だ。個別活動が、2人以上のグループになることに対して、策を講じる必要があると考える。スポーツと健康ゼミは8割以上の確率でグループを作る。興味関心が同じである場合は、グループ活動をしていてもよいが、自らの興味関心に向き合いきれていない生徒がいることも分かった。グループになることで、プロジェクトは前に進みやすくなる。しかし、生徒のやりたいことや興味関心に寄り添うことは忘れてはならず、生徒が主体的に行動できるような状態を作る必要はあるのではないかと。また、トップアスリート系列の生徒は、各生徒が行うスポーツ以外に興味関心が薄い傾向があり、地域に目を向けることには多くの人的サポートを必要とする。しかし、現時点では、生徒数に見合った教員を配置できていないと感じる。教員側のスキル面もあるかもしれないが、地域と向き合う経験が比較的少ない生徒に対して、よりよいサポートができる体制を構築できることを望む。

探究活動は何のために行うのか。プロアスリートになれるのはほんの一部の選手のみであり、必ず引退も訪れる。いわゆる「セカンドキャリア」である。高校生のうちからスポーツの4観点到触れ、様々な角度からスポーツを探究していくことは今後の人生に必ず生きてくるはずである。選手を続けている期間でも、探究で学んできたことで視野が広がり、様々な気づきに繋がっていくと思う。次年度は今年度を生かした大きなアクションを起こす年。単発的なアクションではなく、持続可能なアクションを起こし、周囲を驚かせる結果を求めたい。

2. 2. 3 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

本ゼミは、少子高齢化や人口減少が加速する地域における、住民が安心して暮らすことができる町づくりを目標として活動している。高齢者への生活支援、健康づくりや介護予防対策の充実、地域住民の交流の場の設定など、医療・介護・福祉が結びついた包括ケア、地域の高齢者から子どもまで様々な年代の共助による生きがいのある生活の創造を目指し探究と実践を行っている。

今年度本ゼミに所属しているのは、アカデミック系列生徒4名、スペシャリスト系列生徒7名（農業1名、福祉6名）の計11名であり、「健康」や「福祉」分野に興味のある生徒や、高校卒業後の進路に福祉系・看護系・栄養系を考えている生徒が多い。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて、個人あるいはグループで探究活動を行っている。

(1) はじめに

年度初めにゼミを決定した時点で、生徒たちは今後取り組みたいと思っているテーマを仮にはあるが設定していた。しかし、興味関心のある事柄について挙げていだけで、具体的にどのような活動をしたいか述べる事ができる生徒はほとんどおらず、福祉・健康についての知識も不足していることが分かった。そのため、まずはゼミ全体で福祉・健康分野の知識をインプットし、今後の探究活動のヒントをつかむ機会を設けてから、個人の調査活動や実践活動に移行させることとした。

(2) 実施内容

①今年度の流れ

「福祉」「健康」「栄養」についてのインプット学習（5月～7月）

- ・福祉科教員による講義・演習（5月）

本校福祉科教員による講義とボッチャ体験を通して、福祉分野や障がいについての知識を深めることができた。パラスポーツを実際に体験することによって、障がいに応じて様々な工夫がされていることや、障がいを持っている方だけでなく幅広い年代の人が共に楽しめることに気づき、自分の探究活動で活用したいという生徒も見られた。



ボッチャ体験

- ・大学教授によるオンライン講義（6月）
東京家政学院大学運動生態学研究室の江川賢一先生か

ら、「ヘルスプロモーション」をテーマにオンライン講義をしていただいた。広野町、福島県、日本、アジア、世界全体の健康や運動に関する現状をデータと共に解説していただき、専門的知識を得ることができた。また、生徒は質疑応答を通して、探究活動への具体的なアドバイスをいただくことができた。



- ・栄養教諭による講義（6月）

本校併設中学校の栄養教諭である水口公美先生を招き、「健康」「栄養」について講義をしていただいた。調理面、栄養面についてだけでなく、人が集まり共に食事することで生まれるコミュニケーションや、食事を通じた他者理解や地域理解にも言及していただき、「食」が様々な分野とつながっていると気付かせることができた。



・ゼミ内発表会（8月）

夏季休業中に各自のテーマと関連する事項について調査を行わせ、その内容をゼミ内で発表させた。教員やカタリバスタッフ、同じゼミの生徒にアドバイスをもらい、課題解決のための活動に生かす機会とした。

②探究活動内容

・地域リング

地域における子ども、高齢者、障がい者の交流を増やすことを目標に、公共施設での子育て世代に対するアンケート調査や、パラスポーツを取り入れたイベント等を実施した。



ボッチャや脳トレを取り入れたイベント

・「介護」について知ろう

多くの人に介護に興味を持ってもらうことを目標に、特別養護老人ホーム施設長様へのインタビュー、アンケート調査、介護体験イベントの企画等を行った。



特別養護老人ホームでのインタビュー

・LGBTを知ろう

LGBTへの理解を広めることを目標に、校内で中学生・高校生を対象としたLGBTへの意識等についてのアンケート調査を実施し、結果を分析した。

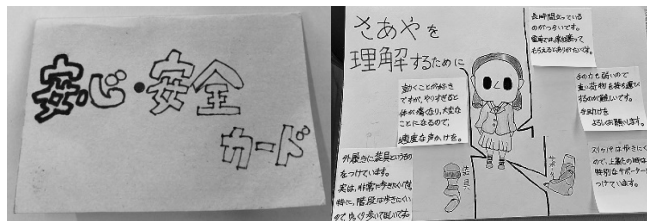
・交流で心もからだも元気に

震災前より地域での世代間交流が減少したという地元の方の話から、世代間交流を増やし高齢者の健康を守ることを活動の目標とした。高齢者へのインタビュー、様々な世代が共に楽しめるイベントの企画等を行った。

・災害弱者の避難について

災害時に障がい者や高齢者が避難から取り残されないことを目標に、アンケート調査、支援学校教員へのイ

ンタビュー等の様々な調査活動を行った。障がい者自身とその周囲の方が災害時に活用できる「避難マニュアル」の普及を目指し、試作している。



避難マニュアルの試作品

・中高生に正しい食習慣を身に付けさせる

福島のメタボ率が全国ワースト4位であり、肥満の要因となる食行動をしていることに着目し、若い世代に正しい食習慣を身に付けてもらうことを活動の目標とした。本校の中学生・高校生全員を対象とした大規模なアンケート調査を実施し、食生活の傾向を分析した。

・DANCEでたくさんのスマイルを

コロナ禍で増加したストレスをダンスによって軽減させることを目標に活動している。ストレスの状況、ダンスへの興味関心についてのアンケート調査を実施し、結果を基に中高生を対象としたダンスイベントを企画した。

・幼児と音楽・幼児と運動

音楽と運動を通して子どもたちの笑顔を増やすことを目標に、こども園の職員の方へのインタビュー、アンケート調査、音楽と運動を組み合わせたイベントの企画等を行った。

(3) 成果

ゼミ活動の早期に「福祉」「健康」「栄養」分野について、講師の方々から最新の知見を得られたことは、その後の探究活動を進める上での大きな推進力となった。

また活動を通して、様々な年代や職業の方と交流し、多様な価値観に触れる事ができたことは、大きな財産である。最初は外部の方に連絡をとることに抵抗感を示していた生徒が、連絡をとった相手から、関連する人を次々と紹介してもらえるとという体験を経て、積極的に人とのつながりを持つ姿勢も見ることができた。

(4) 課題と展望

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、時間をかけて準備してきたイベントが直前で中止となる等、対面での探究活動が思うように進められず、落胆している生徒も多い。しかし、オンラインの活用等、今だからこそ有効に働く手段を考える良い機会と捉え、課題解決のための実践を進めさせたい。

2. 2. 4 探究活動整理のための発表会

10月27日に2年次の探究のプレ発表会を行った。目的は以下の4つである。①これまでの活動を通しての学びや今後の課題を振り返り、発表という形で表現することにより、他の班の探究班の生徒たちと共有し、探究活動の意識の高揚を図ること、②探究テーマ（問い）を明らかにした先にある、自らが考える「地域・社会のあるべき姿」と課題解決に向けて実践したアクションや、構想中のアイデアを報告する、③地域の方から意見やアドバイスを受けることにより、今後の実践を具体的に落とし込む機会や個別に地域の方から協力を得る足がかりとすること。④まとめの段階に入っている3年次生や教員からの意見やアドバイスを受けることにより探究ゼミの縦のつながりを強くする機会とすること。地域のアドバイザーとしては、以下の方々にお越しいただいた。

氏名	所属	地域	関連領域
和田 智行	小高ワーカーズベース	南相馬	原子力
石井 修一	絵本の石川屋	田村氏	原子力
小波津 龍平	クムト	南相馬	メディア
平山 勉	双葉郡未来会議 代表	富岡	メディア
小沢 晴司	宮城大学 教授	広野	再エネ
佐藤 亜紀	HAMADOORI 13 事務局	大熊	アグリ
猪狩 僚	igoku 編集長 いわき市役所	いわき	メディア、福祉
大和田 幸弘	NPO 法人みかんクラブ 事務局長	広野	スポーツ
半澤 悠司	NPO 法人みかんクラブ	広野	スポーツ

(1) 発表準備

課題設定やプロジェクト内容について、印象や思い込みではなく、データや根拠に基づいて設定されているか生徒に気をつけさせた。また、それを受けて、どのような調査／資源（調査源、外部協力者）があれば、探究活動をより深化させることができるか考察させた。今回は生徒の発表回数を増やし、より多くのアドバイスを受けられるようにした。

発表の項目として以下の7つの点を示した。

- ①探究テーマ、そこに至った経緯
- ②どんなアクションをしてきたか
(調査のためのアクション、課題解決のためのアクション)
- ③自分が考える「地域・社会のあるべき姿」
- ④アクションする前後でわかったこと、気づいたこと、学んだこと、新たな仮説
- ⑤自分の考え方や姿勢にどのような変化があったか
- ⑥今後の「課題解決のためのアクション」の内容、計画
- ⑦現在の悩み、壁、相談したいこと

(2) 実施内容

発表件数は原子力防災ゼミ 19 件、メディアコミュニケーションゼミ 20 件、再生可能エネルギーゼミ 5 件、ア

グリビジネスゼミ 2 件、スポーツと健康ゼミ 18 件、健康と福祉ゼミ 10 件。合計 74 件となった。

発表者をプロジェクト内容に基づきゼミを横断して 12 会場（A～L グループ、1 グループにつき 6 プロジェクト）に分け、発表を行った。1 プロジェクトの発表につき 12 分の時間を取った（発表 5 分、ディスカッション 5 分 移動 2 分）。



(発表の様子)

(3) 成果

発表会が探究のマイルストーンとなり、生徒の刺激となったとともに、アドバイスによって探究のブラッシュアップがされた。また早稲田大学の山田研究員および永井祐二先生に発表資料を見てもらい提供し、プロジェクトに関係する外部協力者を紹介いただけた。

2. 3 未来創造探究（3年次）

総合的な学習の時間の中で、3単位を未来創造探究として実施した。そのうち1時間は主として自らを見つめ、進路実現のための時間として、残りの2時間を探究活動として実施した。2年次に引き続き、3年次においても6つの探究ゼミに分かれ、グループや個人でテーマを設定し、実践を行った。昨年までと比して、グループでの探究より個人探究が増え、その結果プロジェクト数も増加した。



2. 3. 1 未来創造探究の概要（3年次）

(1) 3年次の探究活動概要

- 4月21日 中間発表
- 5月～9月 各班、グループに分かれて探究活動
- 9月25日 未来創造探究生徒研究発表会
- 10月～1月 論文作成

(2) 実施内容

① 中間発表

今年度の中間発表は3年次の4月に行った。発表会に新2年次を招いたことにより、2年次がこれから取り組む未来創造探究のイメージがつきやすくなったとともに、新たに赴任して探究担当となった教員にとっても、概要を伝えられるようになった。

また、3組のゼミ混合プロジェクトが見られた。

② 探究活動

6つのゼミに分かれて探究活動を行った。各ゼミの構成は以下のとおりである。

探究ゼミ	生徒人数	教員人数
原子力防災	19	4
メディア・コミュニケーション	34	4
再生可能エネルギー	12	3
アグリ・ビジネス	9	2
スポーツと健康	29	5
健康と福祉	15	3

③ 未来創造探究発表会

「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。各分野の第一線で活躍されている方（専門知を持つ方）、地域の課題に取り組んでいる方（地域知を持つ方）を審査員兼コメンテーターとして呼び出し、各賞を設定した。

今年度は中学3年生も発表を行うことに加え、高校3年次のプロジェクト数が58PJと前年より増加したため、全PJを発表会当日に発表させることが時間的に不可能となった。そのため事前に発表動画を撮影・提出させ、各ゼミの選考および企画研究開発部による審査によって高校32PJを発表会当日の分科会に進出とした。

分科会発表ののち、専門知審査員の8名の先生方からミニ講義を頂いた。講義内容を書き起こしたものを右のリンク先に掲載する。

審査員の菅波香織さんからは「現状の把握ということでアンケートなどを行ったようだが、発表で見えてこなかった」、とご指摘を頂き、最後に「今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければ」というお言葉をいただいた。

④ 論文作成

発表会以降、探究内容を論文の形でまとめる活動を行った。分量を1万字以内とし、年次主任製作の論文ループリック（「関係資料」に掲載）のもと探究活動を文章でまとめを行ったが、行った活動や得られた知見を概念化し言葉にすることに生徒は苦勞していた。12月中旬を一次締め切り、訂正を経て1月下旬を最終締め切りと定めた。

(3) 評価と課題

感染症の影響による大きな制約の中でも、多くの生徒が地域や実社会の課題を「他人事」ではなく「我がこと」として捉え、主体的に探究に取り組むふたば未来学園の探究文化を堅持し、出来ることを模索し挑戦することができた。また、調査研究に留まらず実践に踏み出し、地域で新たな価値を創造した事例や、探究を通じて自身の生き方を見出し、進路へと向かう姿勢は高く評価できる。

課題設定、調査やデータ、考察の言及が少なく、「探究報告」ではなく「活動報告」の発表に見受けられた点が課題である。「やってみた」だけでは探究とはならない。自身の実践を、書籍や教科から得た知識と結び付け、抽象化して全国・世界の課題とも重ね合わせて考察を行い、地域や社会を揺り動かす新たな知の創出や、未来に向けた提言へと至った活動は少なかった。

また、地域の方を「高齢者」等でくくり抽象的なステレオタイプで捉えている発表が見受けられた。具体的な一人一人と向き合って問題を発見したり、解決策を見出したりしていくことが必要である。

2. 3. 1 ① 原子力防災探究ゼミ

原子力災害によって失われた地域コミュニティの再構築など、双葉郡における様々な問題を調査研究し、生徒それぞれが課題を設定しその解決を目指す。震災から10年が経過し、バナナやコーヒーの栽培など新しい事業を行うところがある一方で、期間が進まない地区もあり、地域が抱える問題や状況は大きく変わってきている。

5期生の原子力防災班は、2年次で中心的に行った調査研究を通して知った地域の状況と、未来を作り出す探究を考え、ありがたい未来を設定し、バックキャストで問題と課題を設定し解決アクションをはかった。

(QRを読み取ると動画をご覧になることができますが、スマホアプリ“FlipGrid”で読み取ることで、この紙面上にARで動画がご覧いただけます。)

(1) はじめに

昨年度の調査研究を中心とする現状把握については、以下の点に着目して改善した。これまでの反省点として「印象だけで物事をとらえ、事実を確認しないで、探究を進めていくこと」、例を挙げると、この地域の問題は何かと尋ねた際、「コミュニティの崩壊」、「風評被害」など震災当時から言われていることを、印象で語る傾向があった。改善点として、新聞やテレビからの印象操作に乗らず、それらメディアから1次情報を探るためのキーワードを見つけ出し、事実を明らかにするように指導した。

解決のアクションとして、クリエイティビティに着目し、自分の探究テーマに対して、全く違う分野のことを掛け合わせて、より効率的な解決案を考えることを行った。これについては、これまでの探究で大きく飛躍した先輩方が、無意識にこの発想で行っていたと思われる。たとえば、2期生のT・S君は「避難経路」に「祭り」を掛け合わせた探究、3期生のM・Wさんは、「地域理解」と「交換留学」を掛け合わせ地域交換留学を行った。

高校生が行う探究におけるプロジェクトは、フォアキャストで考えたものや、常識的な範囲で考えたものは、ほとんどすでに行われているものであり、経験のある地域の人たちにとって、高校生が使い勝手の良い人材になり、地域との協働を行う際にも、イニシアチブをとるところか、対等な関係でアクションを起こすことができなくなることがある。もちろんそれも学びになるので悪いことではないが、地域の人たちとwin-winの関係を構築するためには高校生の自由で闊達なわくわくするような発想を進めていけることが理想であると考えている。

以上のことを踏まえて、生徒に対する適切な関わり方を意識しゼミを進めてきた。

(2) 実施内容

【調査のためのオリエンテーション】

【解決アクション】

2年次からの探究活動を2021年9月に行われた「未来創造探究発表会」で提出する最終発表をご覧いただければ

幸いです。

○生徒の探究と実践の発表

① マイクラでつくる双葉郡

マイクラフトというゲームを使い、双葉郡を作成している。ゲームを使うことで多くの人に双葉郡に興味を持ってもらい、将来的にはVRで実際に体験できる様にしたい。



② 鉄卵という地域の可能性

地域の砂鉄を使って南部鉄器の技術で鉄卵をつくる探究と、物質が人体に与える影響を探究している2人が協働して探究している。鉄の専門家からアドバイスをいただきオリジナルの炉を作成し、鉄を取り出す実験をしました。



③ Future Quest～地域のゴミを花に変える

双葉郡にあるゴミをすべて花に変えるプロジェクト。ブンケンさんとゴミを拾ったり、国土交通省から借りた花壇を花で埋めたりしました。そして、ゴミを花に変えるスタートとして大きな看板を双葉町6号線に作りました。双葉と言えばきれいな花咲く場所！というイメージを作っていきたい！



④ 浪江町を元気に笑顔に～開けてびっくり！浪江の宝箱

浪江町商工会青年部と膝をつき合わせて町おこしを考えました。商品開発だけでなく、話題づくりのためのイベントを通して、協働しながらまちおこしをしてきました！



⑤ エネルギーからエコロジーへシビックプライドを形成する環境事業の提案

海洋プラスチックの問題の研究を通して、環境ビジネスの世界的な流れを知りました。住民と行政、そして企業が一体となって双葉郡を発展させていくた

めシビックプライドに着目しました。

⑥ 村おこし in 葛尾村

葛尾村の村おこしを探究している。スポーツイベント等様々なイベントを通して活気ある町作りと魅力作りを地域の方と協働しました。葛尾でできたお米を炊いておいしいご飯の魅力を伝えるイベントを行いました。



⑦ 絵本で記憶の受け渡し

震災の経験や体験を震災の記憶を持たない世代へ伝えていくことを探究している。記録としての震災ではなく記憶としての震災を伝えること、そしてそれを、絵本を通して伝えていくために日々探究している。



⑧ VR in Futaba (with メディア班)

多くの先輩方がチャレンジしてきた双葉郡ツアーを VR で海外の方でも双葉郡を楽しめるコンテンツを作っています。多くの方が、双葉郡の魅力を VR で感じてもらえるように進めています。

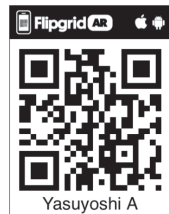


⑨ 双葉郡内の未来時代を描く！！

2年次に訪れた双葉駅周辺！震災で壊れてしまっている今の双葉町と未来の明るい双葉町の絵を描いて残す探究をしました。

⑩ ふたば花革命

アロマティックバーを双葉郡に咲いている花をつかって作る商品開発を行った。Future Quest の渡辺さんとともに、双葉郡のゴミを花に変える取り組みとコラボしながら行った。



(3) 成果と反省 (探究プロセス)

○課題設定について⇒現状分析

ふたば未来の「探究プロセス」では、stage1 で問題発見/課題設定を行うことになっているが、インプットが

《成果》

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 日本語部門 金賞 鉄卵という地域の可能性

文部科学省主催 Glocal High School Meeting 2022 英語部門 金賞 マイクラで作る双葉郡

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト

福島大学アドミッションセンター賞 浪江町をを元気に笑顔に

福島県教育委員会主催 令和3年度 ふくしま高校生 社会貢献コンテスト 入選 Future Quest

福島県総合学科課題研究発表会 口頭部門 入賞 Future Quest

ふたば未来学園 未来創造探究発表会 最優秀賞 鉄卵という地域の可能性

されていない状態でのそれらの設定は非常に難しい。理想の状態をイメージしようとしても、具体的に頭に浮かんでこない生徒が非常に多かった。そのため、原子力防災班では、2年次のはじめに、全員で、複数のフィールドワークや映像資料等を遣い現状把握を行った。その際、データや資料を読み取ることが得意な生徒には、RESAS やその他の1次資料をもとに地域をより客観的に見つめることを、そうでない生徒に対しては、様々な場所や地域の方（一般社団法人 AFS 吉川彰浩様など）のところに訪問しお話を伺うなどし、班の中でそれらの情報を共有することをスタートラインとした。現状を知るだけでなく、歴史的な観点から過去もしっかりと調べることが探究を行う上で非常に重要だと分かった。

○課題の再設定⇒解決仮説

現状を知ること、顕在的な問題を把握し、その後、生徒それぞれが理想の未来を設定し、問題と課題の再設定を行った。解決アクションについては、クリエイティブ思考として、自分の好きなものという全く異なることを掛け合わせ、解決方法を探った。

○解決アクション⇒考察

顕在的な問題(第3者が描いた理想に対するギャップ)に対する解決アクションは、すでに解決策が多くとられていることがほとんどであり、そこをスタート地点とすることは問題解決の学習としては良いが、社会との協働としては十分ではない。課題の再設定において作った解決アクションは、課題解決の学習だけでなく地域に対しての高校生としての新たな発想としてヒントを与え、WIN-WIN の協働を成り立たせることが可能だと分かった。

(4) まとめ

事実を客観的にとらえ、既存の問題に対して分析を行い問題と課題を再設定するという手順を踏むことによって、探究の土台とし、クリエイティブ思考として、生徒自身の興味あることをかけ算で組み合わせることで、生徒自身のオリジナルの探究を展開することが出来、持続的に探究活動に集中するということが見えた。総合的な探究の時間のあるべき姿として提案ができるものになったと感じる。

2. 3. 1 ② メディア・コミュニケーション探究ゼミ

メディア・コミュニケーション探究ゼミ（以下メディアゼミ）は地域や社会の問題を意識し、その解決のためメディアを用いた情報発信や、未来への伝達のアクションを目的とし、33名（女子25名、男子8名）が在籍している。注意点として、実践が進むほどメディア製作そのものが目的化してしまいがちなので、出発点である課題や伝えたいことを意識させ続けた。

(1) はじめに

五期生は震災当時小学校一年生だった世代だ。彼らには「自分たちが震災時の記憶を持っている一番下の年代ではないか」という意識が強くあるようだ。彼らの中には、下の世代に対して「震災の記憶を伝えていきたい」という気持ちだが、使命にも似た感情を帯びて秘められている。

(2) 二年次までの取り組み

第一原発最寄り校の本校生たちは、それゆえに社会の課題に向き合わざるを得ない。一年次は地域の現状と、解の見えない課題を肌で感じた。二年次では探究の授業で彼らは理想と現実のギャップから探究テーマを設定し、仮説を吟味するための「調査のアクション」をしてきた。これを踏まえ、三年次ではよりよい社会を自分たちの手で創ることを目標に探究活動を行った。

(3) 各生徒の取り組み

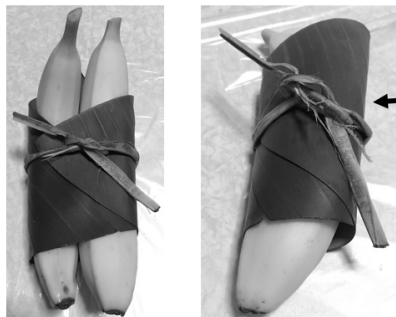
「ふたばの花革命」

双葉郡に咲いている花をドライフラワーにし、アロマンティックバー作りを図った。

「もったいないバナナ」

脱プラスチックに向けたレジ袋の有料化が浸透していることから、バナナの葉を再利用することでビニール袋のコストも削減できるのではと考え、地域の方とともに試行錯誤した。

①四角くカットして包む



(試行錯誤の一例)

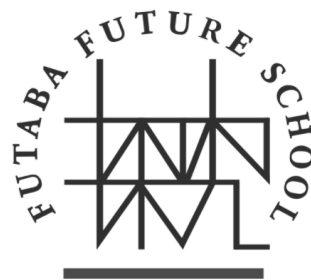
「VR in Futaba」

双葉郡のマイナスイメージを払拭するための情報発信を

行ってきた。双葉郡ならではの魅力をVRカメラで撮影し、その動画をYouTubeに投稿した。

「ふたばメディア」

今までの探究の活動を集約し、記録、発信し学びを還元するシステムが必要と考え、サイト「ふたばメディア」を製作した (<http://futabamedia.com/>)。これにより、先輩が先輩の活動を参考にでき、地域との協働を可視化することができた。



ふたばメディア

「ふたば、伝える」

(HPトップページ)

「動物の殺処分を減らしたい」

震災後放浪していた動物たちが殺処分となり福島県の殺処分数がワースト1位という記事を読みアクションを行った。ペットショップのことも考察した。



(富岡町のNPO法人栖さんへ取材しました)

「正しい情報を私の言葉で」

YouTubeで私自身の学校生活や探究活動、研修活動の様子などを撮影・配信することで福島の現状や課題を知ってもらい、無知による偏見をなくし福島の復興活動に携わっていく人を増やすことを目的として活動してきた。

「富岡元気づけっぺ」

富岡観光協会の方たちと協力し、自分たちが興味のある美容と関連づけ、町の特産品を使用した商品開発を考えることにした。そこで、富岡町のお酒「天の木」と富岡町のフルーツ「パッションフルーツ」に目を向けた。



(インスタグラムで広告した)

「全ての子どもに豊かな生活を」

現在、社会問題化している子どもの貧困に注目し、自分たちと同じ若い世代に伝えたいと考え、いわき法律事務所弁護士の菅波香織さんと相談、いわき市湯本町にある「放デイ AND 舎」のインスタライブにも参加をさせていただき、探究についての情報発信を積極的に行った。

「LGBTQと私」

LGBTQをただの個性として捉えてほしいため、探究テーマとした。アパレルブランド KINGLYMASK、EINS HIMMEL+から衣装提供を受けた。

「韓国と日本が仲良くなるには」

K-POP や韓国ドラマが好きで韓国について興味がありこのテーマにした。歴史を調べ、立命館アジア太平洋大学卒業生が立ち上げた任意団体 J IWA・J IWAが主催している J IWA・J IWA オンライン韓国語講座などに参加した。

「動物の殺処分を減らす&ペットとの避難について」

災害時にその場に残されて、家族と離れてしまう動物がいる。保護されても元の飼い主・引き取り手が見つからずに殺処分に回されてしまうペットがいることを知り、広報活動を行った。

「大熊町民とのつながりを作る」

実際に大熊町に人を呼び込むために、どのようなイベントを企画開催するべきかを考え、それを実行しどう回復していくか探究した。

「「他人事」を「知り合い事」へ FROM “SOMEBODY ELSEs THING” TO “KNOWN THING”」

自分のふるさとでは無い関係ない場所での問題に対して無関心な人の意識を変え、関心を持ってもらいその輪を広げていくためのイベントを行った。

「未来を担う人材を」

震災の記憶と教訓を伝える活動に貢献するべきではないかという思いから、震災から得られた教訓や人の想いを後世に伝え、新たな知識と繋げて発展させていくことができるような機会を作るプロジェクトを行った。



(関西の高校生とオンラインで交流した)

「富岡の酒粕を使った新メニュー」

富岡町で作った日本酒から生まれる酒粕を用いて、新しいメニューを考えました。

「ループリック、うちの言葉で訳してみた！」

ループリックはふたば未来学園の生徒のデータが一目でわかり、これからの学校に必要な物だと思う。しかし分かりづらいので、私たちはループリックの言葉を分かりやすく「翻訳」した。

「LOCAL WEDDING」

私たちの探究では、将来の夢であるウェディングプランナーに関する知識を身に着けることと、地元の活性化を関連付けたものだ。双葉郡の活性化、結婚式の魅力を知ってもらうことを目標に探究活動を始めた。

「震災について語ろう」

私たちは、震災の記憶を繋ぐこと、防災準備や対策の大切さを子供たちに伝えることを目的とし紙芝居イベントを開いた。

2. 3. 1 ③ 再生可能エネルギー探究ゼミ

福島県では、2011年3月に「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」を策定したまさにそのとき、東日本大震災とそれに伴う東京電力第一原子力発電所事故によって再生可能エネルギーを取り巻く情勢が激変した。そこで福島県では新たな再生可能エネルギー推進ビジョンとして震災以降の社会情勢も反映させた「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」を2012年3月に策定し、復興の主要施策の1つとした。このビジョンには原子力に依存しない、安全・安心で持続的に発展可能な社会を目指した福島の再生可能エネルギー産業の未来像が描かれている。

本校の再生可能エネルギー探究ゼミでは、「福島県再生可能エネルギー推進ビジョン」をもとに福島県や双葉郡の現状を把握し、課題を見いだし、解決の糸口を探究することが一般的な進め方ではあるが、私達は探究の動機付けとして学校周辺の産業や自然環境に着目し、フィールドワークや基礎実験などの演習を全員で行い、基礎知識や体験の共有化を行った。それと同時に、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。

(1) はじめに

再生可能エネルギー探究ゼミでは生徒13名が、お互いが協力しながら、探究活動を進めてきた。全体の活動としては、広野町火力発電所訪問、浅見川の清掃活動・水質調査、ふるさと創造学の講演会等、様々な取り組みを行ってきた。また、各グループごとの探究テーマも設定し、探究活動を進めてきた。それらのグループは大きく分けて、トリチウム水処理班、海洋温度差発電班、リモネン発電班、川探究班に分かれている。

(2) 実施内容

① トリチウム水処理班

東京電力第一原子力発電所事故によって発生しているトリチウム水処理の問題に注目した。この問題は、地域の関連性が非常に高いにも関わらず、地域の関心が低いという現状がある。このことを踏まえて、自分達でどのようにしたら、より分かりやすくトリチウム水処理の問題を伝えていけるのかを考察した。

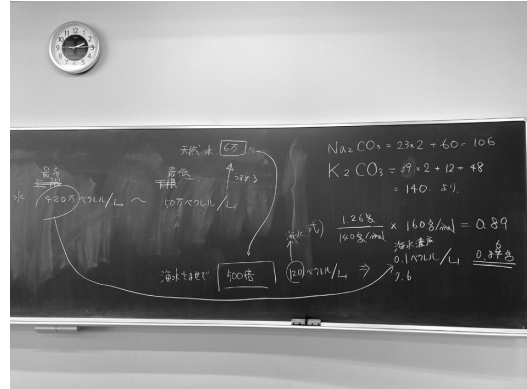
まずは本校の生徒がどれだけ問題意識を持っているかを調査するため、校内アンケートを実施した。アンケート内容は主に「トリチウム水を知っているか?」、「トリチウム水の海洋放出に賛成か、反対か?」の2つである。しかし、準備不足により、高校1年次からしか回答を得ることができなかった。回答数が少ないため、データの信頼性は低いだが、その中でも、6割の生徒がトリチウム水について知っていることや8割以上の生徒がトリチウム水の海洋放出に反対していることが分かった。こちらの予想よりも興味関心が高いことが分かった。

次に、トリチウム水の希釈の様子を分かりやすく伝える方法はないかと考え、牛乳をモデルとした希釈の実験を行った。牛乳をトリチウムに見立て、海洋放出が可能なレベルや自然界に存在するレベルなど、様々な状態を想定して、希釈の実験を行った。実際に希釈の計算を行うことにより、どれくらい薄めればよいのかが分かった。また、牛乳を使うことで、視覚的に濃さを表現することができた。

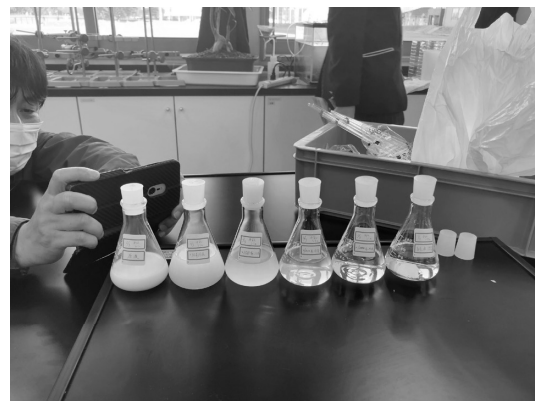
さらにこれらの活動を「福島イノベーションコースト構想の実現に貢献する人材育成」の成果報告会にオンラインで参加し、代表発表を行った。他の高校生とも交流を行い、積極的に意見交換を行った。

高校3年次では、川探究班と協力して、水質調査を行ったり、廃炉資料館や福島第一原子力発電所を訪問し、双葉郡が直面している課題について正面から向き合った。

探究活動を進めていく中で、最大のテーマであるトリチウム水の海洋放出が決定してしまったため、最終的にはトリチウム水の効果的な活用方法を考察することに舵をきった。



【希釈の計算】



【牛乳を使ったトリチウム水の希釈実験】

② 海洋温度差発電班

東日本大震災前は自然環境にも恵まれ、原子力発電によって、経済的にも支えられていた大熊町。しかし、東京電力第一原子力発電所事故によって、全域避難となってしまった。その結果、町外への人口流出が続いている。そんな大熊町を、再生可能エネルギーを使って魅力のある町にし、地域の復興につなげる活動をしたと考えた。その再生可能エネルギーの手段として、海洋温度差発電に着目した。海洋温度差発電とは、海の表層と深海の温度差を利用した発電方法で、発電量が安定しており、太陽の熱エネルギーを有効に使うことができる。この発電方法を大熊町の海洋で実現できないかと考えた。

まず海洋温度差発電を実現するための基礎実験として、対流の実験を行った。水槽に入った水をヒーターで温めることで、実際に対流が起きているかどうかを調べた。水槽の表層と深層の温度を実際に測定し、グラフにまとめることができた。やはり水槽全体を温めるためには時間がかかってしまい、さらに、温度差はあまりひらかないことが分かった。

次の基礎実験として、ジエチルエーテルをチューブ内で液化させる実験を行った。ジエチルエーテルは海洋温度差発電において、冷媒となる物質でありその性質を確認することができた。

高校3年次では、発電装置の構造を調べるため、本格的な理科の実験器具であるソックスレー抽出器を用いたジエチルエーテルの実験を行った。実験は一人でできるものではなく、あらためて他者と協働することの大切さを痛感した。理論→実証→改善、このサイクルを通して、少しずつ実験の精度をあげていった。

最終的にはオリジナルの海洋温度差発電の発電機的设计図を作成することができた。発電機の試作まではできなかったため、卒業後も引き続き、発電についての研究を進めていきたい。

③ リモネン発電班

広野町の特産品としてみかんが有名であるが、あまりみかん単体として販売されていない。その理由を調べたところ、主に加工用として生産されていることが分かった。そこで広野町のみかんを多くの人々に知ってもらい、さらに地域の活性化につなげるため、リモネン発電に注目した。リモネンとは、みかんの皮に含まれている成分で家庭用食器洗剤にも含まれている成分である。

まずは広野町のみかん園のみなさんに協力を依頼し、実際にみかん狩りを行った。みんなで協力して収穫作業を行い、数箱分のみかんを確保することができた。次に大量のみかんの皮を集め、それをすりつぶしてフラスコに入れて、水蒸気蒸留でリモネンを抽出する実験を行った。はじめは油のような成分を抽出することができたが、時間の経過とともに、その成分が蒸発してしまった。2回目の実験として

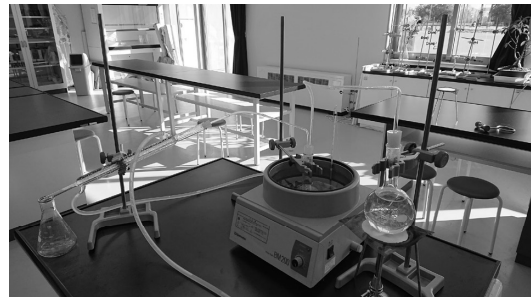
ウォーターバスを使用し、みかんの皮の温度を上げてから水蒸気蒸留を行った。その結果、リモネンと思われる成分を抽出することができた。

高校3年次では、地域のゆず狩りの活動に参加し、地元の幼稚園を訪問し、そこで自分達の実験を披露することができた。実際に実験を体験してもらうことで、成分抽出のプロセスを知ってもらい、興味関心を持ってもらうことを目的とした。抽出した成分は芳香剤として参加者にプレゼントした。

また UV 装置を使った、抽出したリモネンとサンプルの成分比較も行った。その結果、確かにリモネンの成分が存在するという検証結果が得られた。しかし、リモネンの成分を実用化するためには、みかんが最低1トン必要であり、発電への利用や商品化はとても難しいことが判明した。



【みかん狩り】



【水蒸気蒸留の実験】

④ 川探究班

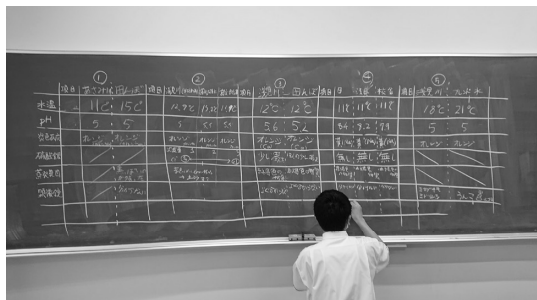
再生可能エネルギーの原点として、まずは地域の自然環境を知ることが基本として、活動を行ってきた。その中でも広野町の主要な川として、浅見川に注目し、水質調査や生態調査を進めてきた。水質調査では、実際に浅見川の上流・下流の水を採取し、CODを利用した実験で、その性質を確かめることができた。また生態調査では、浅見川に生息している生物を捕獲し、飼育と養殖を試みた。その中でも広野町にしか生息していないキタノスジエビを発見することができた。これ以外の活動としては広野町役場でのインタビュー、五社山のフィールドワーク、浅見川の清掃活動などを行った。

高校3年次では、引き続き、浅見川の清掃活動に参加し、地域の人々の温かさや本校に対する期待の高さを、身を持って感じる事ができた。復興の拠点としての本校の役割を再認識できた。

またキタノスジエビの飼育を行ったが、やはり自然

環境の生物をより自然環境に近い状態で飼育することはとても難しく、抜け殻を採取する前に、すべて死滅してしまった。

本来であれば、キタノスジエビの抜け殻を採取し、その抜け殻が CO₂ を吸収することを実証しようと計画していたが、残念ながら確かめることはできなかった。



The image shows a student from behind, writing on a chalkboard. The chalkboard contains a table with five columns and several rows of data. The columns are numbered 1 through 5. The rows include labels for '水温' (Water Temperature), 'pH', '溶存酸素' (Dissolved Oxygen), '透明度' (Transparency), and '濁度' (Turbidity). The data points are handwritten and include numerical values and units.

	①	②	③	④	⑤
水温	11℃、15℃	14.7℃、13.8℃	12℃、12℃	11.1℃、11.1℃	12.8℃、21℃
pH	5.5	5.5	5.6	5.4	5.5
溶存酸素	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
透明度	10cm	10cm	10cm	10cm	10cm
濁度	100	100	100	100	100

[水質調査]



[浅見川清掃活動]

(4) 課題と展望

これで約2年間の探究活動は終わりを迎えるが、それぞれのグループで様々な課題と新たなテーマを見つけることができた。この再生可能エネルギー探究ゼミの最大の強みは「チームワーク」であり、どんな困難に直面した時も、お互いが協力し、支え合いながら、1歩ずつ着実に探究活動を進めてきた。

「発電」だけに限らず、地域の「自然環境」にも着目し、幅広い視野で探究活動に取り組んできた。卒業後も、それぞれの分野でさらに調査研究を進めていってほしい。そして、「再生可能エネルギーの飛躍的な推進による新たな社会づくり」の実現を切に願っている。

2. 3. 1 ④ アグリ・ビジネス探究ゼミ

アグリ・ビジネス探究ゼミは、双葉郡の農業生産の現状を鑑み、今後の農業とビジネスを探究するゼミである。令和3年度はアカデミック系列、スペシャリスト系列農業、商業、福祉の生徒から成り、計12名（男子5名、女子7名）で実施している。

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向けた開発、地産地消の推進が主になっている。

(1) はじめに

本ゼミでは、これから始まる探究活動が単なる調べ学習や自己満足的な活動にならないよう、キックオフの際に、「あなたはなぜ〈プロジェクト〉を行うのか」、「そのプロジェクトは、〈誰のため〉〈なんのため〉に行うのか」といった問いを生徒に投げかけ、探究活動の意義を考えさせ進め方を共有した。

(2) 実施内容

① 今年度の流れ

本ゼミでは、6つのプロジェクトが進行しており、原発のイメージ払拭（①「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」）、県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み（②みんなバナナすきだよねえ）、③資源の再利用の推進（⑤「古着にもう一度光を」）④「ニーハオはばたけ広野バナナ」地域資源を活用した商品開発（⑤「凍み天復活」）、⑥メディア&福祉&アグリ協働「お肌つるつるお米パック」が主になっている。

・新型コロナウイルス感染症予防の観点から、アクションに制限があったが、感染症対策をしっかりとって、生徒それぞれが考えた未来創造探究発表会（9月25日）に向けた取り組みとなった。

・論文執筆

2年間の探究活動を論文にまとめた。

② 活動内容

・「大熊新特産品「いちご」～Make a Smile with sweets～」



福島民報 2021年7月23日

・みんなバナナすきだよねえ

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関わりが薄れている現状から、地域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナカステラ」を利用できないかと考えた。広野町の農産物を活用した加工品の商品開発を行い、町を訪れた人に配布することで、広野町の魅力発信を目的としていた。

広野町振興公社の中津氏の協力のもと、広野町特産のバナナを活用したカステラを製造し数度の試作をして完成させたバナナカステラに対して広野町をPRする貴重な取り組みと高く評価していただいた。



広野町振興公社 中津弘文様 2021年7月14日



試作の様子 (2021年2月)

・古着にもう一度光を

SDGs 12 つくる責任つかう責任に着目し、捨てられてしまう古着の再利用をテーマに掲げた。作業着として新たに古着のリノベーションを目指す。また、オーガニックコットンの需要と供給の調査調や、環境に配慮した持続可能な活動をめざした探究内容である。



N.P.O. ザ・ピープル理事長 吉田 恵美子 様



2021年
7月11日

・ニーハオーはばたけ広野バナナー

震災後、双葉郡の農林水産業を取り巻く課題の一つに「風評被害」がある。本探究では、この課題に目を向け、広野町の特産物として力を入れている「広野産のバナナ綺麗」を用い、風評被害の払拭と地域の方と関りが薄れている現状から、地

域の方とのコミュニケーションツールとして「バナナギョウザ」「バナナ春巻き」を利用できないかと考えた。

商品コンセプトとして必要な、商品のターゲット（誰が）、ベネフィット（どのような価値）、シーン（場面）を考え、商品の試作を繰り返し商品化に向けたアドバイスを受け商品開発を行った。アクションを通して地域の方々との交流がしつかりと生まれた。



広野町振興公社ひろぼーの休憩所
2021年6月30日

- ・皮がしっとり系よりもカリカリ系の方が良いと思う。(20代男性)
- ・中身の餡がもう少し詰まっていたほうが良い。(60代男性)
- ・餃子の皮ではなく、パイ生地が良いかも。(40代男性)
- ・チョコではなく、あんこバージョンも食べてみたい。(40代女性)
- ・油っこさが口に残った。皮ももう少し薄く、パリッとしていたらもっと良かった。(30代男性)
- ・軽い口当たりで美味しい。どうやって日持ちをさせるのか考慮する必要あり。(60代男性)
- ・アイディアは面白いと思う。冷めたせいか、バナナとチョコの味が薄く感じました。(30代男性)
- ・バナナ風味が弱いと感じた。「バナナ餃子」と言われなければわからなかったかも・・・(40代男性)
- ・チョコ味が濃いため、もう少しチョコを少なくしてもよいかも(20代男性)
- ・販売するにあたり、売値は幾らに設定するのか気になる。(20代男性)

・凍み天復活

震災前南相馬市で販売されていた上げ菓子「凍み天」。震災後工場が被災し一時生産中止となる。その後支援を受け、営業を再開するが、ほとんど知られていない。友人とのたわいのない会話から「凍み天」のワードに関心を持ち、「凍み天復活」を探究テーマに掲げ活動を試みた。

(3) 成果

新型コロナウイルスの影響で商品開発をした商品を地域イベントや自主企画イベントで地域の方々に広く伝えることができなかった。しかし、生徒は社会状況に順応し探究活動を継続することができた。

(4) 課題と展望

県内農産物の風評被害払拭に向けた取り組み、地域資源を活用した商品開発、持続可能な農業に向かう開発、地産地消の推進テーマを掲げそれぞれの探究活動を行ってきたが、多くの大人との関りから地域課題について再確認し、実践を通して何を学ぶのかを整理していくことが必要である。

2. 3. 1 ⑤ スポーツと健康探究ゼミ

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故から11年を迎えた。この11年の間には、避難指示区域の解除や常磐自動車道とJR常磐線の全面開通、ふたば未来学園高校と小高産業技術高校の開校、J-villageの機能再開など、復興が進み明るい話題が増えてきた。一方で復興は進んでも、人口の減少は歯止めがかからない。令和4年度には新地高校と相馬東高校が合併し、相馬総合高校となり、相双地区から高校が1つ減ることになった。さらに、今年度も新型コロナウイルス感染症が世界で猛威を振るった。

そんな中、今年度は延期になっていた東京オリンピックが十分な感染対策を施して開催されたことは日本全体に大きな希望と勇気を与えた。インターハイや夏の甲子園などのスポーツの祭典が実施され、少しずつではあるが日々トレーニングに励むアスリートたちの活躍の場が復活してきた。

「する」「観る」「支える」「知る」。このような状況にある今だからこそ、世界や社会、地域、さらには自らの課題に目を向けて、どのような課題が蓄積されているのかを知り、スポーツを生かして世界や社会、地域、自身の課題解決を目指した。

(1) 2年次の活動

総合型地域クラブによる地域活性化、健康の増進、子どものスポーツ環境の支援、スポーツビジネスによる持続可能で豊かな地域の実現やアスリートとしての技術や体力向上に関する科学的見地からの探究と実践を行った。

(2) 実施内容

本ゼミはトップアスリート系列の生徒で構成されている。全国各地から本校に集まってきている利点を生かし、「それぞれの3.11」を共有する時間を設定した。そして、その流れを生かしながら、それぞれの出身地における様々な課題を調査した。遠方でも自分の地域と同じような課題があるということを知り、互いの共通点を見つける時間とした。

次に「世界」へ目を向ける時間を設定した。スポーツに限らず、様々な世界の課題を調査した。

これまでの学習を積み上げ、世界や日本、地域、自身の課題調査からどの課題を解決するか決定し、自分がスポーツにおけるどのような立場（選手、指導者、経営者、スタジアム、アリーナ、スポーツショップなど）で関わり、最終的にどのように「win×win」の関係性を作り出すかを考えた。各々で思考を巡らせ後、アイデアが近い生徒同士でグルーピングを行った。過去の卒業生からは生まれてこなかったアイデアも出ており、思考に柔軟性があった。

(3) 3年次の活動

2年次からの活動を踏襲し、アクションを継続した。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響は大きく、現地に赴いてのアクションに制限がかかり、満足な活動ができなかった。そんな中でも自分たちができる活動を模索し、実践を行った。

“TikTok～いきいきプロジェクト～”

広野町の高齢者の健康増進にフォーカスし、高齢者の運動機会の拡大のためのアクションを立案した。SNSの「Tik tok」を取り入れることで、若者



や世界を視野に入れた情報発信を狙った。高齢者向けの簡単なダンスを作り、地域の集会所を訪問して実際に指導しながらダンスを一緒に踊るアクションを実施した。座ってもできるように、また、ダンスが苦手な方でも取り組みやすいように配慮したダンスを考え、アクションを重ねた。



“スポーツの力で世界と繋がる”

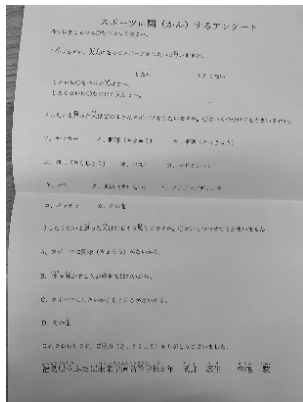
SNSを取り入れながら「世界と世界」を繋げる新しいパイプになるため、東日本国際大学の留学生との交流を通して、スポーツは言語や文化を越えて楽しむことができるツールであることを発信しようと考えた。コロナ禍で交流活動が制限されたため、「You tube」を利用して自分たちがサッカーを楽しんでいる動画を世界へ発信するプロジェクトを実施した。いかに海外の方が楽しんで観てもらえるか、という視聴者の視点で3本の動画を作成し、それぞれの動画に英語の字幕を添えたこともあり、海外



の方から高評価やコメントをいただくことができた。

“障がい者スポーツの振興”

福島県のスポーツの課題を調べていくうちに、障がい者のスポーツの機会が少ないことを知り、知的障がい者のスポーツの振興のためのアクションを立案した。富岡支援学校でフライングディスク、ボッチャ、いわき市のサンアビリティーズで車いすバスケットボールの体験をした。知的障がい者にスポーツを指導するうえで配慮しなければならないことを学び、バドミントンを富岡支援学校の生徒に伝えるアクションを立案した。また、県内の特別支援学校の高等部の生徒にスポーツに関するアンケートを実施し、する側の意識の問題より、支える側の少なさ、指導の難しさ、施設の少なさに課題があることを導きだした。



“貧血に悩む女性アスリートを少しでも減らそう”

女性の貧血問題に注目し、女性アスリート自身だけでなく、その周囲に関わる人々へも発信することで組織的な課題解決へ導いていくアクションを立案した。貧血のメカニズムから栄養や睡眠の質の高さが重要なことを知り、女性アスリートを対象に貧血についてどれくらい知識があるのかアンケートを作成した。また、JFA メディカルセンターの檜山トレーナー、元バドミントン女子日本代表の潮田玲子さんとのオンラインミーティングを開き、学んだことを生かし、校内で女子中高生向けの交流会を企画しようとした。交流会は実現できなかったが、貧血についてのパンフレットを作成した。



(4) 成果と課題

それぞれのグループで、2年次から考えを深めたテーマを実践すべく、3年次を迎えたが、新型コロナウイルス感染症の拡大は落ち着かず、現地に赴いたり、交流したりするアクションはほとんどできなかった

のが残念である。感染状況が落ち着き、プロジェクトの実践まであと一歩のところまで再拡大し、満足な探究活動が行えなかったことで、モチベーションを保つのが非常に困難だったように思う。それでも限られた時間の中で、対話を重ね、現在の状況でできることを模索し、プロジェクトを実践できたことは素晴らしいかった。幸いだったのは、この年代は休校期間があったことで、オンラインでの活動に慣れており、オンラインでの交流を深められたグループがあったのがよかった。また、SNSの取り扱いにも慣れており、映像編集も様々な演出を加えて見ごたえのある動画を作成できた。今後このような形での交流やプロジェクトが増えていくのではないだろうか。

一方で、テーマの設定については課題が残る。地域の課題に目を向けてはいるが、テーマが大きすぎてプロジェクトの実施が困難だったり、テーマとプロジェクトが重ならなかったりするグループもあった。「スポーツと健康」ゼミであることから、地域の課題とスポーツを結びつけて探究活動を深めていくのだが、地域の課題について、無理やりスポーツを絡めている感じが否めないグループもあった。

また、全員がトップアスリート系列の生徒であるので合宿や試合等が重なり、探究活動をしたくてもできない日が続いたりすることもあった。それでも電話やメールを駆使してアポイントを取ったり、依頼文を作成したりと自分の役割に責任を持って臨む姿はいかにもトップアスリートであった。しかし、生涯プレーヤーでいることは不可能で、いずれプレーから一線を引くときが来る。その時自分は何ができるのか。その時この探究活動で学んだことが生かされると考えている。

テーマ設定やプロジェクトの実施など、なかなか思うように進まない2年間ではあったが、この2年間の取り組みは必ず役に立つことと信じている。そのためにも、トップアスリート系列の探究活動のテーマの在り方を見直す時期に来ているのではないだろうか。地域の課題をスポーツを通して解決することも必要であるが、自分の専門種目の課題解決に向けた、いわゆる大学の卒業論文のようなテーマでも探究を深めることができるのではないかと。トップアスリート系列の生徒だからこそ、自分の専門種目に目を向け、自分やチームの課題解決に向けたアクションを実施することもプレーヤーとして大きな経験になると感じる。「スポーツと健康」ゼミの今後のテーマの在り方について、生徒とも議論を重ねていきたい。

2. 3. 1 ⑥ 健康と福祉探究ゼミ

健康と福祉ゼミは、「健康」や「福祉」に興味のある生徒や高校卒業後の進路に福祉系を考えている生徒が選択している。自らの関心のある事柄と「健康」や「福祉」の分野を関連させ、地域の課題解決に向けて探究活動を行っている。

(1) はじめに

「健康」や「福祉」の分野は幅が広く、生徒の興味・関心も多岐にわたる。本ゼミでは個人での活動が多く、昨年度からの継続でそれぞれ探究活動を進めている。

(2) 実施内容

① 今年度の流れ

- ・ゼミ内発表（4月14日）

中間発表の練習のためにゼミ内で発表会を行った。ゼミの仲間や先生方からアドバイスをいただき、スライドや発表の仕方を改善することができた。

- ・中間発表（4月21日）

2年次で行った探究活動の内容と反省、今後の見通し等をまとめ、PPスライドを用いて発表を行った。9月の未来創造探究発表会をイメージする機会となった。

- ・活動計画の見直しと実践（4月～12月）

これまでの活動や新型コロナの状況を踏まえて活動の見直しと実践活動をくり返した。

- ・ゼミ内発表会、発表動画撮影（9月15日）

未来創造探究発表会の代表者を選出するためのゼミ内発表会を行った。また、その様子を動画撮影し、各自で振り返りを行った。

- ・未来創造探究 生徒発表会（9月25日）

各ゼミで選出された代表者は、これまでの活動のまとめを発表し、審査員の方々からアドバイスをいただいた。



未来創造探究 生徒発表会の様子

- ・論文執筆（10月～1月）

2年間の探究活動を論文にまとめた。

② 活動内容

- ・広野町探検隊 ～仲良し大作戦～

子ども達の肥満率の増加に着目し、日常的に体を動かせる環境づくりについて考え活動をした。2年次で計画していた広野小学校3年生との「広野町探検」を実施し、広野町の歴史と運動することの大切さについて伝えた。



「広野町探検」の様子

- ・子どもロコモ改善プロジェクト

ロコモティブシンドロームの増加に着目し、小さい頃からの運動習慣の確立をめざし活動をした。広野町公民館にご協力いただき、自分の考えた運動を小学生と共にを行い、小学生の運動習慣の増加に取り組んだ。



「放課後児童クラブ」の様子

- ・音楽療法で認知症予防

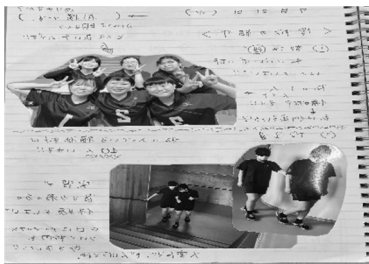
広野町社会福祉協議会にご協力いただき、認知症カフェで音楽を用いた動画撮影を計画した。新型コロナの影響により実践には至らなかったが、本校生徒の協力を得て動画のサンプルを作成した。

- ・The challenged

障害者に関わる職業につくことを希望しているので、障害者のニーズを知り、どのような活動をすれば交流できるか考え、計画した。新型コロナの影響により実践はできなかったが、調査アクションを通してノーマライゼーションについての理解を深めた。

・高齢者に生きがいを！！

高齢者が生きがいを感じるのほどのような場面かを考えた。新型コロナの対策をとりながら広桜荘に通う高齢者の方々との交換日記を行い、交流を続けた。



高齢者との交換日記の一部

・Make your life in a shelter better

—これからの災害に備えて—

学校で避難所の疑似体験を通して課題を発見し、その解決法を模索した。また、国内外の避難所の比較や避難所におけるベッドの有効性について検討した。

・ハンドケアで高齢者と交流

—私たち高齢者ができること—

ハンドマッサージに関する知識を踏まえて、ハンドケアの練習を繰り返した。また、広桜荘を訪問して高齢者と交流しながらハンドケアの実践を行った。



広桜荘でのハンドケアの様子

アロマストーンづくりの様子

・Aroma and refresh

アロマバスボムを作成し、それを利用したハンドケアで高齢者と交流することを計画した。また、アロマストーンを作成し、香りの癒し効果・リフレッシュ効果について調査した。

・健康な心を持つこと◎

高校生に対し高齢者に関するアンケートを実施し、高齢者に対する印象を知った。また、高校生に高齢者について知ってもらう機会をつくった。

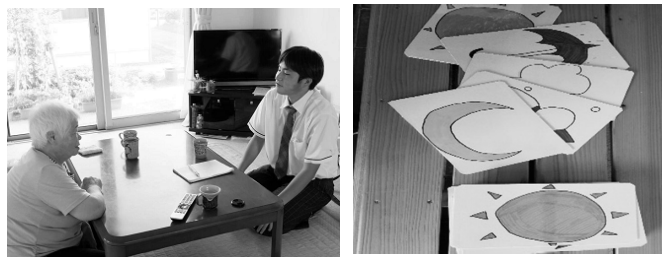
・コミュニケーションでつながるバトン

高齢者の孤独死が増加傾向であることを踏まえ、一人暮らしの高齢者の生活を安全なものにしていくことをテーマとして活動した。檜葉町の住宅地のゴミ拾いを通して高齢者と交流をした。

・認知症 もっと楽しく 毎日を〈ゲーム編〉

認知症患者の生活をより充実したものにしていくこと

を目的として活動をした。高野病院を訪問し、自作のカードゲームを実施していただき、アドバイスを踏まえて改良をくり返した。



高齢者との交流の様子

認知症患者のための手作りカードゲーム

・Enjoy with the elderly

将来、自宅介護をしなければならない人が増えることが想定されるなか、「いざその時」になって困らないように介護についての知識を広めることを目的として活動をした。レクリエーションを考え、広桜荘で実践をくり返した。



広桜荘での手作りボッチャ（レクリエーション）の様子

「福島県」を取り入れた高齢者の食事

・高齢者の健康を支える食生活

自らの進路を踏まえ、「食」を通して高齢者のQOLを向上させることを目的として活動を行った。福島県の食材を活用した献立を考え試作を繰り返した。

(3) 成果

新型コロナの影響により実践が難しい状況の中で代替案を検討し、十分に対策を取りながら探究活動を行っている姿が印象的であった。生徒は実践を繰り返しながら計画的に活動することや地域人材と協働することの大切さ等を学ぶことができた。

(4) 課題と展望

3年次の活動においては、積極的に実践をくり返した生徒が多かった。しかし、「実践してみた」で終わり、地域や世界の現状と関連付けた考察やまとめ発表ができていないことが課題である。実践と並行して「福祉」に関する知識のインプットやデータの活用方法を学ばせる時間をどのように確保するかを検討していく必要がある。

2. 3. 2 探究活動発展のための発表会（未来創造探究 生徒研究発表会）

高校2年次から2年間取り組んできた「未来創造探究」の集大成の場として「未来創造探究生徒研究発表会」を開催した。本校における課題解決型学習の成果を披露する機会として、調査アクションのみならず、課題を解決するアクション、生徒自身の総括、社会への提言等を発表した。様々な分野の第一線で活躍されている方（専門知をもつ審査員）や地域の課題に取り組んでいる方（地域知審査員）に審査をお願いした。感染症対策として体育館での全体会は行わず、分科会のみでの発表とした。また外部の参加者には全体会でZoomを活用したライブ配信を行い、保護者や地域の方のみならず、全国に向けて成果を披露した。また、今年度はふたば未来学園中学校が開学して3年目の年となり、初めて中学校3年生の「未来創造学」の成果を発表する機会となった。

(1) 概要

- ① 目標
- 1) 地域課題解決のための探究と実践に取り組む学習「未来創造探究」の成果をまとめて発表することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（D：表現・発信力、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 2) 発表を聴講することにより、ふたば未来学園が定める人材育成要件（ルーブリック）に定めた資質・能力（A：社会的課題に関する知識・理解、I：能動的市民性、J：自分を変える力）を育成する。
 - 3) 保護者、地域の方々、県内外の教育関係者に本校の探究活動の内容を発信し、ステークホルダーとの協働関係をより強固なものにする。
- ② 日時 令和3年9月25日（土）9：00～16：50
- ③ 内容 9：00～10：15 分科会（8教室で高校生4発表、中学生2発表ずつ）
- 10：30～11：10 専門知審査員によるミニ講義
- 11：30～11：50 ★開会行事
- 11：50～12：35 ★全体会Ⅰ（高校生代表発表【前半】）
- 12：35～13：20 休憩
- 13：20～14：05 ★全体会Ⅱ（高校生代表発表【後半】）
- 14：20～14：45 ★全体会Ⅲ（中学生代表発表）
- 15：05～15：50 ★閉会行事（結果発表、表彰、総評）
- 16：20～16：50 教員と審査員の探究交流会

④ 審査員 専門知を持つ審査員8名（1～8）、地域知を持つ審査員8名（①～⑧）

	氏名	所属	専門		氏名	分野 or 地域	地域
1	松岡 俊二 様	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科 教授	地域全般	①	青木 淑子 様	富岡町3.11を語る会、 元富岡高校校長	富岡
2	小山 良太 様	福島大学 食農学類 教授	アグリ	②	吉川 彰浩 様	一般社団法人 AFW 代表	南相馬
3	佐藤 理夫 様	福島大学 共生システム理工 学類 教授	再エネ	③	下枝 浩徳 様	葛力創造舎 代表理事	葛尾
4	菅波 香織 様	未来会議 事務局長 弁護士	地域全般	④	平山 勉 様	双葉郡未来会議 代表	富岡
5	永井 祐二 様	早稲田大学 環境総合研究 センター 准教授	地域全般	⑤	松本 昌弘 様	檜葉町役場	檜葉
6	中田 スウラ様	福島大学 人間発達文化学 類 特任教授	地域全般	⑥	吉田 恵美子様	NPO 法人 ザ・ピープル 理事長	いわき
7	古川 拓也 様	大阪成蹊大学 経営学部 講師	スポーツ	⑦	小松 理虔 様	ヘキレキ舎 代表 ローカル・アクティビスト	いわき
8	猪狩 僚 様	いわき市役所 IGOKU 編集長	福祉	⑧	青木 裕介 様	ちゃのまプロジェクト 共同代表	広野

⑤ 外部聴講者（Zoom） 185名（参考：昨年46名）

(2) 詳細

① 事前準備

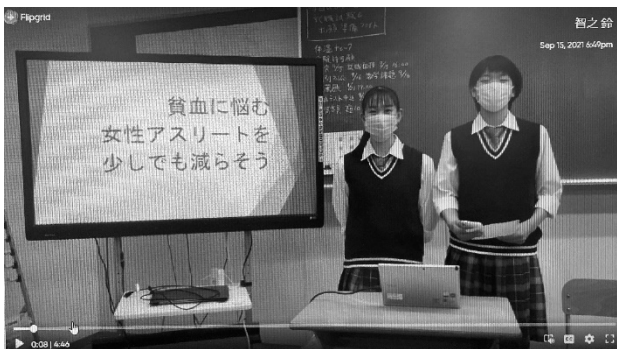
今年度の発表会は県内に「まん延防止措置」がとられている状況下での実施となった。昨年度同様に、コロナ感染症の防止対策を徹底して行うことに留意して実施することとなった。対策としては、全体会における三密回避を徹底するためにアリーナには高校2・3年次と中学校3年生だけとした（中学校1・2年生と高校1年次は別教室でZoom映像を参観する）。また分科会会場の人数についても多くなりすぎないように、8会場で分科会を行った。外部からの来場者は審査員のみとし、それ以外の参加者についてはZoomによるライブ配信を行った。

実践内容を様々な観点から探り、参加者全体で学びを深めるために、分科会会場ごとに専門知を有する審査員1名、および地域知を有する審査員1名に参加していただき、校内審査員（教員）1名を加えて3名で審査をすることとした。地域知を有する審査員は本校の開校の経緯や生徒の探究活動が面的に広がってきたことをふまえ、昨年度は双葉郡の全八町村からお呼びするようにした。今年度はさらにいわき市からも審査員をお呼びした。審査員の方々はこれまで本校の探究活動に参画して下さった方が多く、依頼した審査員の方には快諾をいただいた。

今年度は個人探究に組んでいる生徒が増加し、更に中学校3年生の発表も加わったため、総数の増加が昨年度以上に増加した（今年度74PJ【高校48PJ、中学校16PJ】、昨年度は48PJ）。そのため、今年度は動画による事前審査を行い、高校の発表プロジェクトを58PJから32PJまで絞ることとなった。また、昨年まで発表時間10分であったのを5分に短縮し、内容をより精選して発表するように指導をした。

- ・動画による審査（FlipGridを使用）

発表を5分にまとめ、動画をFlipgrid上にアップさせた。この動画は事前審査のために審査員とも共有をした。



② 分科会

- ・昨年同様に、分科会ではゼミの枠を外し、複数のゼ

ミの生徒が参加するようにした。とは言え、分野については共通して括れるように配慮した。

- ・発表数と時間を勘案し、会場数は8会場、各会場で6発表（高校4発表、中学校2発表）を割り当てた。
- ・各分科会に外部審査員2名、内部審査員（本校教員）、司会（本校教員）を設定した。生徒は発表に集中できるように、係の設定は極力少なくなるようにした。



- ・発表するだけでなく、専門知を有する審査員によるミニ講義の時間を設定した。
- ・審査のための審査基準を作成し、その基準に基づいて各分科会会場で審査を行った（未来創造探究賞）。また生徒投票による審査も同時に行った（共感賞）。
- ・分科会の結果、以下のグループが全体会出場となった。（全発表内容については巻末資料を参照）。

○環境事業でシビックプライドを作ろう

○Enjoy with the elderly

○もったいないバナナ

○大熊×いちご×私

○Future Quest

○子どもロコモ改善プロジェクト

○鉄たまごという地域の可能性

○わかものがたり



③ ミニ講義（専門知審査員による）

- ・今年度も昨年度同様に専門知審査員によるミニ講義をお願いした。特にこれから探究を進めていく低学年の生徒にとっては、専門家のお話を聞ける貴重な時間となっ

た。昨年度は講義 20 分の内容であったが、今年度は講義の時間を 30 分とし、内容を充実させた。なお、ミニ講義のタイトルは以下のとおりである。

	氏名	ミニ講義 タイトル
1	松岡 俊二 様	「2050 年の福島浜通りの地域社会を考えよう :1F 廃炉や復興はどうなっているのだろうか?」
2	小山 良太 様	震災 10 年以降の福島県農業と新しい産地・ブランド形成の可能性
3	佐藤 理夫 様	2040 年ふくしま再生可能エネルギー 100%の先に
4	菅波 香織 様	対話が未来を作る～8年間の未来会議を通じて感じる無力感と希望～
5	永井 祐二 様	豊島産業廃棄物不法投棄問題と自然再生事業～1F 廃炉における合意形成のヒント～
6	中田 スウラ様	子どもの貧困と地域社会～教育と福祉～
7	古川 拓也 様	スポーツを通して“誰が”地域課題を解決するのか?
8	猪狩 僚 様	「福祉の IGOKU、健康の極意」

④ 全体会

・全体会では先述の高校生代表 8 プロジェクトと中学生代表 4 プロジェクト、中学校バドミントン部の特別発表の全 13 プロジェクトが発表した。表彰は以下の通りとなった。

「未来創造探究 最優秀発表賞」

- ・鉄たまごという地域の可能性

「未来創造探究 優秀発表賞」

- ・大熊×いちご×私
- ・もったいないバナナ

「未来創造探究 発表賞」

- ・環境事業でシビックプライドを作ろう
- ・Enjoy with the elderly
- ・Future Quest
- ・子どもロコモ改善プロジェクト
- ・わかものがたり

「共感賞」大熊×いちご×私

中学校「未来創造学 優秀発表賞」

- ・りーふる編集部
- ・手話を使ってろうあ者理解への第一歩
- ・チームゲーマーズ
- ・五社山嵐 (ごしゃやまおろし) の研究



⑤ 総評 (専門知審査員: 佐藤理夫、菅波香織)

1) 佐藤理夫先生から

- ・探究活動ができる恵まれた環境を振り返って欲しい。他校にはない充実した設備、熱心に探究に向き合っ

ている先生、なにより地域の方々の協力があることを再確認して欲しい。

- ・中学生の皆さんの発表のレベルが高い。これをさらに高校で伸ばして欲しい。高校生も中学生の目標になるように頑張ってください。
- ・テクニカルな話になりますが、5分間のプレゼンはきつかったと思う。人に伝えたいものをもっともっと厳選して欲しい。グループでの発表は考察がちょっと甘いかなと思うところもあった。
- ・探究と学習が乖離していませんか? 理系は特に高校までの理科的知識を踏まえてください。また、理系に限らずデータ解析などを活用してください。「やりたいことをやってみた」となってしまう PJ も見受けられました。学んだものをいかし、どう進めれるか…特に大学進学を考えている方は意識してください。
- ・これは「探究」ではなく「地域貢献体験記」ではないかと思われるものがありました。それはそれで大切なことですが、成長するためには「高校生がやった」というレッテルがついて満足してしまっってはいけない。20～30 才にやった場合でも、そのプロジェクトが地域に活かされているか、考えたい。「高校生がやることだからまあいいか」となってしまうと甘くなる。探究はあくまで探究…。探究という言葉を再考してほしい。体験記録だけにとどまらない論文を期待しています。

2) 菅波香織さんから

- ・地域の課題と自分の関心を合わせて、自分事としてとらえているのが分かりました。みなさんのネットを使った情報活用も上手でした。
- ・現状の把握として、アンケートなどをやっていたと思いますが、発表で見えてこなかった。データがもう少しあればよかった。また、印象で語られる発表も多い。「ヒントを貰えました」「印象が変わりました」というコメントには何を得たのか、どんな風に変ったのか、具体的に欲しい。
- ・みなさんが探究を主体的に取り組んでいるのが伝わりました。2つ目とも関係しますが、みなさんの探究の対象となる地域の子供、高齢者も主体を持つ存在です。コロナで難しかったと思いますが、お一人お一人の心情や意思や尊重すべきことも考えつつ、皆さんのやりたいことを掛け合わせて共創していければ素敵だと思いました。
- ・私的にドキッとしたり、違和感を覚えたワードがありました。皆さんもそれを友人らと言葉にして、対話

をしてみてください。もやもやを一人の中で消してしまふのは勿体ないです。今日の探究のあとも、対話で未来を作ることを考えていただければと思います。



⑥ 教員と審査員の探究交流会

昨年初めて教員と審査員の探究講習会を実施して、外部審査員と担当教員との懇談会を、発表会終了後に設定した。生徒の発表を踏まえて、日頃の指導方法や連携の在り方等について忌憚のない意見をいただくことができた。今年度は「中学3年間の探究を高校でさらにどのように伸ばしていくか?」という問いを設定し、KPT (Keep, Problem, Try) 法を用いてグループディスカッションを行った。



【Keep (そのまま続けたいこと)】

- ・発表の丁寧な言語化
- ・専門知と出会える場を作る
- ・率直な個人の興味を反映した探究 (中学生)
- ・とがった才能をどんどん伸ばす

【Problem (問題点)】

- ・審査基準が文系の方が点数に反映されやすい (理系のプロジェクトを評価しにくい)
- ・理系をフォローできるゼミ編成
- ・高入生と一貫生のゼミの接続
- ・テーマと自分自身のつながりをもっと言葉にした方がよい
- ・課題からスタートにしないこと
- ・仮説と検証を行って、課題が変わってもいいはずなのに変わらない (「課題」という言葉を使わない方がいい

いのではないか)

- ・発表時間5分は短い

【Try (来年やってみたい)】

- ・最終発表会で地域の人とであるのではなく、常にオープンな関係を作る
- ・学年を超えた交流・コラボ

⑦ 結果および今後の展望

・今年度もコロナ感染症対策のため、予定していた活動ができなくなるケースがあった。昨年と異なっている点は、Zoomなどの新たなオンラインのツールを手に入れた点である。このツールを積極的に利用し、他県の高校生とオンライン交流会を行った探究やマイクラフトを利用した探究、分科会発表の様子をライブ配信で行う探究など新機軸を導入した探究なども見られた。

・この発表会は1期生から始めて今回が5回目であるが、会を重ねるごとに発表件数が増え、調査だけでなく課題解決のための実践を進める生徒の割合が増えており、質、量ともに高まっている傾向が見られる。一方で、現実的に地域の外に出て課題解決のアクションの総量は絶対的に少ない。また、海外研修がここ2年国内の代替研修に切り替わり一定の成果は出ているが、海外研修を通じて得られる世界の課題と地域の課題を繋げて考える視点が今回の探究で見られなかったことは次年度の課題ともいえる。

・外部参観者向けにZoomによる配信を行ったが、取組そのものに対しては好意的な意見が多かった。また遠方からの参加者も多く遠隔配信のメリットを活かすことができた。一方、映像や音声の質等、配信の技術的な点は課題が多かった。次年度以降は直接来場いただくようになることを願うばかりであるが、今回培った配信ノウハウは今後も生かしたい。

・3年生はこの後、論文作成や探究活動を仕上げる期間に入るが、それらの質を高めるための機会として、全体として今回の発表会は有効に機能したと思われる。また外部の方に本校の活動の様子を理解していただく場としても効果が大きかったと思われる。次年度以降も、定着した取組として実施していく。

2. 4 海外研修・国内研修

2. 4. 1 ドイツ研修代替研修

本校では、2年次からの未来創造探究として、原子力災害からの復興や、持続可能な地域づくりについて探究を行う。この取組は、福島だけの課題ではなく、全世界が共有する「持続可能な社会づくり」にも繋がるものである。これまでの1年次におけるドイツ研修では、環境首都と呼ばれるフライブルク等の町づくりを視察するとともに、本校の海外連携校である Ernst Mach Gymnasium 校（ミュンヘン）と互いの探究を通して交流を図り、将来起こりうる世界の難題に向き合い、持続可能な社会をめざして未来を創造していく一歩としてきた。ドイツ研修は本校の学びの核の一つであり、学年全体・学校全体が思考を深め、2・3年次探究にもつながる重要な機会となる。しかし、昨年度に引き続き、今年度も新型コロナウイルス感染拡大の鎮静化が見込めず、7期生はドイツ渡航を諦め国内代替研修とオンラインでのドイツとの交流を行い、学びを深めるとともに、学年全体へその成果を還元することとした。

(1) 代替研修内容

(1) 国内研修

- ① 国内のゴミ問題や放射性廃棄物など、この地域特有の課題について知識を得る。
- ② 「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）」を掲げ、究極の持続可能な地域を追求している徳島県上勝町のゼロ・ウェイストセンターを訪問し、スタディツアーを行うと共に、地域住民と交流し意見交換を行う。
- ③ 英語による議論やプレゼンテーションの技術を身に着けるため、British Hills における合宿を行う。

(2) ドイツとの交流・意見交換（オンライン）

- ① 国内研修を踏まえ、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校の生徒とオンラインにて交流を行う。

(2) 実施内容

募集の段階で現地渡航はできない旨を説明した。代替事業を複数設定することで、海外研修同様の学びを担保することを約束し、多くの生徒が選抜面接に臨んだ。なお、生徒の選考には以下のような課題を設定した。

- ① ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）についてのあなたの考えを明らかにすること。
- ② 持続可能な社会づくりについて全世界が共有する目標である SDGs の 17 の目標のうち、本研修を通じて考えを深めていきたい目標を明らかにすること。
- ③ 本研修での学びを今後の学校生活にどのように生かしていこうと考えているかを明らかにすること。

本研修の目的を自覚し、学校の代表としてドイツと交流し、そこでの学びを地域や学校に積極的に還元する意志を持った 12 名の生徒たちが選抜された。

代替事業① 語学研修

(1) ALT による SDGs 研修・英会話

期日：令和3年12月～2月

SDGs を英語で学ぶためのテキストを購入し、本校 ALT による事前講義を行った。講義では知識のインプットと語彙力の向上をねらいとし、そこで学んだことについて自分の考えを英語で話せるよう、ディスカッションやプレゼンター



ションなどを行った。また、昼休み時間に加えて、コロナ休校期間中や入試期間中は Zoom による英会話を実施した。3人グループの少人数での英会話の時間で、実践的な力を鍛えていった。

(2) ブリティッシュヒルズ(以下 BH)研修

期日：令和4年1月5日(水)～1月7日(金)

現地渡航ができない中で、3月に予定しているドイツとのオンライン交流に向けて英語でプレゼンテーションや議論を行う練習が必要となった。そこで、英国の文化・マナーに触れながら活きた英語を学べる県内の BH にて2泊3日の語学研修を行った。

ドイツの高校とはゴミ問題やリサイクルなどの環境問題について意見交換を行う予定であるため、SDGs を用いたレッスンを中心に、最終的にはプレゼンテーションを作成し、発表できるようなプログラムを実施した。

生徒達は初めこそ All English の授業に戸惑い、上手く反応できずにいたが、夜に宿舎内の Meeting Room に集合し、遅くまで SDGs にまつわる語彙や表現をシェアする様子も見られた。

最終日の発表では、SDGs 目標達成に向けた内容を組み込んだ街をデザインして発表を行った。生徒達は各々自由な発想で町をデザインし、楽しみながら自分達が理想とする社会について意見を発表することができた。



最終日の発表の様子



代替事業② ドイツとのオンライン交流

(1) e-Twinning を使用した交流

ドイツにて交流予定だった、ミュンヘンの Ernst Mach Gymnasium 校とオンラインによる交流を続けた。e-Twinning というサイトを使い、お互いに自己紹介や簡単な投稿を通して交流を深めた後、ドイツの高校生2名と本校生徒2名のグループを作り、あとはそれぞれに個別

に連絡を取り合うようにした。生徒達の中には Instagram など写真や動画をシェアし合う生徒もおり、デジタルネイティブならではの速さで距離を縮め、仲良くなっていた。大変楽しそうに交流しており、現地で会うことが叶わなかったことが尚更に悔やまれた。

e-Twinning でトピックを作成したり、アンケートを取ったり、チャットのやりとりをする機能もあったが、時差の問題もあり、即座の生きたやりとりにならなかったことと、生徒達にとっては使いにくく、なかなかこちらから話題を提供したりすることができなかった。そのため、グループでのやりとりはほとんどが Instagram などの個々のものになってしまい、オープンなディスカッションなどがあまりできなかった。

(2) Virtual Homestay

期日：令和4年1月9日（日）

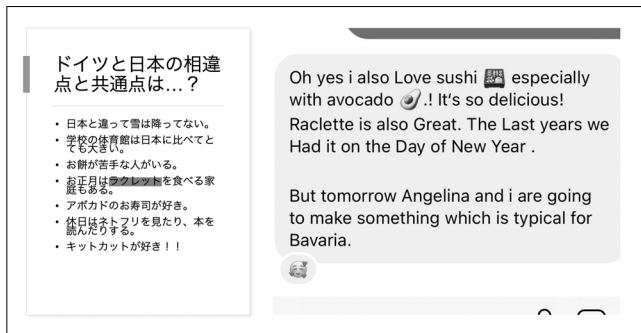
BH 研修の直後にドイツの高校生との Virtual Homestay を実施した。直前の BH 研修時に一度顔合わせを行った。お互いに顔を合わせて自己紹介をした。

Ernst Mach 校も新型コロナウイルス感染拡大により休校が相次いでおり、この日も学校からではなくそれぞれの家からの参加であったため、お互いのコロナ事情について情報交換をした。



Virtual Homestay 当日は、それぞれに Zoom のルームを割り当て、各家庭から接続して交流を行った。日本時間の 19:30、ドイツは 11:30 から、お互いに Lunch と Dinner を食べながらの交流となった。生徒達は家族や、お互いが食べているものを紹介したり、お互いの部屋を案内したりと楽しい時間を過ごした。

その後、振り返りではそれぞれがどのような話をしたのか共有し、スライドにまとめて共有した。スライドから、生徒達がそれぞれに交流を楽しんだことが伝わる内容だった。お互いの国の習慣などの話になると、生徒達も驚くことが多かったようで、日本での当たり前が世界では当たり前ではないということをドイツとの交流を通して学んだようである。それぞれにドイツの高校生から聞いたドイツの習慣や文化で驚いたことを共有していた。



生徒達の感想は以下の通りである。

「事前にいくつか話題を用意していたため、沈黙にはならなかったが、伝えたいことが伝えられない歯痒さを感じた。

もっと語彙力や文法知識を身につけて、ジェスチャーを交えながら会話できるようにしたい。」

「共通の話題がたくさんあって、話し足りなかった。英語が上手く話せるか不安だったけれど、楽しく文化交流することができた。いつか絶対に会いたい！」

「自分が言いたいと思ったことはなんでも言うべきだと思った。『相手に伝えられるか不安』『伝わらなかつたら恥ずかしいから意見を言わない』という考えはもつたいないと思った。英語が話せない僕でも1時間半もコミュニケーションを取れたので意見や質問の大切さがわかった。」



(3) Online Discussion

期日：令和4年4月（予定）

会場：本校協働学習室

この後、次年度の4月にオンラインディスカッションを行う予定である。テーマは①SDGs12「つくる責任、つかう責任」から、お互いの町の取り組みについて、②お互いの町についての紹介、③ロシアのウクライナ侵攻におけるドイツの状況などを予定している。現在、お互いの町を案内するビデオを作成したり、プレゼントを送りあったりと準備を進めているところである。これまでの学びのアウトプットと、ドイツの高校生との意見交換が英語で円滑に行えるように準備を進めている。



代替事業③ 徳島県上勝町研修（オンライン）

期日：令和4年1月17日（月）

講師：野々山聡氏（合同会社パンゲア CEO）

徳島県上勝町は、持続的な循環型社会を目指し、2020年までにゼロウェイスト達成を公約に掲げてきた。同町はゴミを45分別することで既に再資源化を8割達成しているが、その目標に向けてはゴミを処理する側の体制だけではなく、製品の供給側の意識や、生産・販売・消費の関係、ひいては私たちの暮らし方そのものを考え直すことが必要になる。

昨年度に続いて、国内代替研修として徳島県上勝町を訪問する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況を鑑み、中止となった。ここでは、訪問予定だった頃に事前研修としてオンラインで行った内容を記す。



(1) ゼロウェイストセンターについて

徳島県上勝町にあるゼロウェイストセンターは、町内

唯一のゴミ収集所である。上勝町はゴミ収集車がなく、住民が直接ゴミを持ち寄りその場で分別する。それぞれのゴミや資源の行き先やその後、1kgあたりの処理にかかる金額も明示しており、捨てる側も意識をするようになるという仕組みである。センターに併設されている宿泊施設「HOTEL WHY」ではゴミゼロ生活を体験できる。今回、体験はできなかったものの、様々な取り組みを知り、サーキュラーエコノミー（循環型経済）と、コラボティブエコノミー（共同経済）の両側面が実現されている場所から、これからあるべき町の姿としてのヒントをいただいた。

(2) 株式会社いろいろの「葉っぱビジネス」について

上勝町は、人口が約1,700人、町の面積の86%が山林である。さらに65歳以上の高齢者の割合が人口の半分を占め、県下でもっとも高齢化比率が高い町である。そこで、高齢者が里山の葉っぱや花を収穫し、料理の「つま」として出荷する「葉っぱビジネス」で生き生きと働き、年間2億円以上を売り上げている。町の高齢化や、自然豊かな町という点において双葉郡と共通する部分が多く、どうすれば地域住民が生き生きと暮らし、若者が戻りたくなる町になるのか考えた。

生徒達は事前に第一原理について予習をして今回の研修に臨んだ。第一原理とは、基本的前提のことである。上勝町と広野町の共通点として、豊かな自然が挙げた。この第一原理を魅力に変えていくには環境リテラシーが大切である。地域の資源を自分で分析し、理解した上で、それを使ってどのように地域の魅力を発信するかということが大事であるという言葉は、これから探究に進む生徒達にとって大きなヒントとなった。生徒達は研修を通して広野町の第一原理を見つけ、それを活かすプロジェクトを考え、上勝町民に発表する予定であった。今後の探究活動に期待したい。



代替事業④ NPO 法人 ザ・ピープルでの研修

講師：吉田恵美子氏（NPO 法人ザ・ピープル 理事長）

(1) 校内事前研修

期日：令和4年2月28日（月）

3月21日（月）イベントでの研修

「特定非営利活動法人ザ・ピープル」は、1990年いわき市内で設立された団体である。身近な生活環境の問題のひとつであるゴミ問題の解決に向けて、古着のリサイクル活動に1992年から取り組んでいる。

今回、吉田氏を講師に迎え、古着に着目したゴミ問題についての研修を行った。古着などの繊維製品のリサイクル率は全国平均で20%にも満たない。ザ・ピープルでは古着リサイクル事業を行っており、現在90%以上のリサイクル率を達成しているという。この活動をいわき地域内に留めることなく、他地域にも広く共有し、古着をゴミとして燃やさない社会に変えることが目標である。

アパレル業界の環境への具体的影響

- ◆1本のジーンズの生産に必要な水
≒約7,500ℓ≒平均的な人が7年かけて飲む水の量
- ◆ファッション業界が毎年使用する水の量
≒300億ℓ≒500万人の生存を可能にする水の量
- ◆ファッション業界が出す廃水≒全世界の20%
- ◆衣料品と履物の製造により生まれる温室効果ガス
≒全排出量の8%（「これまでどおりのアプローチを続ければ、業界からの温室効果ガス排出量は、2030年までに50%近く増大すると見られる」- エリザベツト・クワン・グレン、環境計画消費生産課長）
- ◆理め立てに使われたり、焼却されたりしている繊維
≒ゴミ収集車1台分/秒

Copyright © UNIC, All Rights Reserved.

(2) ザ・ピープル 諏訪倉庫での実習

期日：令和4年3月12日（土）

実際にザ・ピープルの倉庫を訪れ、古着の仕分けのボランティアを行った。県内の古着回収BOXから集められた衣類を、様々な用途に分類していった。倉庫内の衣類の量に衝撃を受けたが、まだ使える衣類が多く、生徒達は普段自分達が身に付けている衣類から大切に長く着ることの大切さを学んだ。ファストファッションが流行っている一方で、それらの衣類を低賃金で作っている発展途上国の人達がいること、我々にとってはゴミでも、他国の人にとってはまだまだ着ることが出来る貴重な衣類であることを知った。



(3) 「衣」と「食」について考える SDGsカードゲーム体験会への参加

期日：令和4年3月21日（月）

吉田氏が新たに立ち上げた「フード&クロージングバンク事業」のPRイベントに参加した。古着リサイクル事業の他に、震災後の新たな地域課題となりつつある生活困窮者支援の目的でスタートしたフードバンク事業を組み合わせた事業で、地域内で生活困窮に悩む方を「衣」と「食」の両面で支える仕組みづくりを目指している。循環型社会をテーマとする古い着物を活用したステージショー等に加えて、2030SDGsカードゲームの体験を通してみんなで「衣」や「食」の在り方を考えた。



カードゲームでは、他の参加者達とコミュニケーションを取りながら、経済・環境・社会をバランス良く成長させていくことの難しさを体験した。展示コーナーでは、市民から回収した古着を服飾専門学生が新たにリメイクした衣装が展示されていた。ファッションに関心のある生徒が熱心にデザイナーに質問し、探究活動のヒントを

もらっていた。吉田氏のご厚意により、最後のショーにも特別出演させていただき、出演者の皆さんとステージで踊り会場を盛り上げた。

代替事業⑤ 国際理解教育×哲学対話

ロシアが2月24日にウクライナに侵攻し、戦争が始まった。Ernst Mach Gymnasium校と連絡を取り合う中で、ドイツにもすでにウクライナからの難民が流れてきていること知った。生徒達も、隣の隣で起きている戦争に胸を痛めているが、やはり戦争を知らない世代であるため、何が起きているのか知りたいということで勉強会を開いたそうだ。そこで、オンライン交流の際にドイツの高校生とウクライナ問題について意見交換をすることにして、我々もまずは対話による勉強会を開いた。

(1) 世界史教員による哲学対話

期日：令和4年3月16日（水）

事前に宿題として、ウクライナに関する問いを1人50個考えてきた。生徒達からは以下のような問いが出た。

なぜ戦争を続けるのか？ 日本が巻き込まれる可能性はあるのか？ 中国はなぜ沈黙しているのか？ ロシアは戦争のルールを守っているのか？ なぜロシアは制空権を奪いに行かないのか？ 戦争後、ウクライナが復興するのに何年かかるか？ ロシアのメディアはどのような報道をしているのか？ なぜロシア軍はチェルノブイリ原発を抑えているのか？ ロシアは核兵器を使う可能性が本当にあるのか？ 日本がウクライナに防弾チョッキを提供することは憲法違反にならないのか？ 日本の報道の仕方は本当に公正なのか？

今回の課題「問いづくり」で生徒達が出した600の質問から、調べれば答えが出るものを除き、話し合いたい本質的な問いを選んだ。

ロシア国内でのプーチン支持者に年配者が多く、若者が少ないことが、情報の入手方法の差から来ているのではないかという意見から、メディアリテラシーの話にまで話が及んだ。現在ロシアやウクライナでインターネットが遮断されている箇所があるという情報を受け、ネットワークが遮断されるとどうなるのか想像した。世界から見て、現在ロシアが情報鎖国になっているという話から、高遠菜穂子氏が講演で仰っていた「日本は情報鎖国」という言葉と繋げて、日本はどのようなだろう？という話にもなった。また、歴史の上で独裁者を生んだ過去があるドイツ人はロシアのことを複雑な思いで見ているのではないか。自分の立場をはっきりさせずに中立でいることは果たして本当に良いことなのか等、オンライン交流会で是非ドイツの高校生と話し合いたい話題がたくさん出た。

(2) 高遠菜穂子氏との哲学対話

期日：令和4年3月20日（日）オンライン

「なぜ戦争は起きるのか？なぜ止められないのか？」

- ① 講義「国民は望んでいないのになぜ政治家は戦争をするのか？」柳澤協二氏（元内閣官房副長官補）
- ② 講義「国連や国際法では戦争は止められないの？」伊藤和子氏（弁護士/ヒューマンライツナウ事務局長）
- ③ BORを使った哲学対話
講師：神戸和佳子（北陸大学経済経営学部講師）

本校1年次の国際理解教育において、毎年ご講演いただいている高遠菜穂子氏によるオンラインでの哲学対話イベントに参加した。



Inputとしての講義を聴いた後、イラク戦争を知らない世代である10代の参加者の他に、世界中の様々な年齢・立場の方も交えて哲学対話を行った。

【生徒感想】

・「なぜ戦争がやめられないのか」というテーマで対話をした。主に、①罰則規定が弱いから、②戦争のイメージが持ちにくいから、③人々が強い国家を求めると、という話になった。また、見過ごされている人権侵害や戦争について考えていきたい。ウクライナ情勢が深刻化してから、それまで騒がれていたタリバン政権や中国のウイグル自治区の問題等について考える機会がなくなってしまった。1つの問題だけに目を向けるのではなく、世界で起きている問題にむけてもアンテナを広げていきたい。

・「自分家族や身近な人が殺された場合、武器を持って闘うか」という議題で対話をした。自分だったら善悪の判断がつかなくなってきくと報復をしようとしてしまうと思い、「闘う」を選択した。様々な人の考えを聞かなかで、自分がそうってしまったとき、こういう人達に止めてほしいとも思った。また、自分がそうってしまった人達を止められる人間になりたいとも思った。それができるのが理性なのではないか。そしてその理性は本を読んだり勉強をしたり対話することで身につけられるのではないかと。

最後に生徒の心に深く刺さった高遠氏のメッセージは以下である。「米兵やイラクの武装した兵士こそが戦争の被害者である。自分も同じ立場になった時、人を殺さずに自分を止められるのか。自分は自分のことを平和主義者だと信じたいが、私の中にもそういう残虐性を持っていて、自分は反射的に人を殺してしまうかもしれない。それを強く自覚することで私は武器を持たない選択をしたい。『私は違う』とは絶対に言い切れない。なぜこの人はその選択をしてしまったのかということを考える。それが私がこれまでの経験から学んだことである。」

(3) 成果と課題

コロナの影響により2年連続で渡航が叶わず、生徒達の大きな学びのチャンスを失ってしまった。しかし、同じ目的の下、国内代替研修に置き換えて実施することができたことについて、感謝申し上げたい。

国際交流の第一歩は、自分の国や地域のことを積極的に情報発信することである。しかしながら、毎年、基礎知識のインプットと英語力の向上については課題がある。国際理解教育の高遠氏も述べていたが、知識不足や表面的な情報だけで何かを意見することは、新たな対立や分断を生んでしまう。今後も双葉郡の高校生として、分断や対立・差別や偏見と闘うべく情報発信を行っていくためには、正しい情報リテラシーが必要である。

今回、様々なご協力の下生徒達は沢山のインプットができた。4月に最後のドイツとのオンライン交流を控えているが、ドイツの高校生と学びを共有し、意見を交換することで視野を広げ、難しい問いの中にあっても対話を諦めない人材育成の要となる研修としていきたい。

2. 4. 2 ニューヨーク研修代替研修

本校が SGH 指定校であった期間から続く本事業は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止や代替を余儀なくされている。SGH 指定最終年度となった一昨年度(本校 4 期生)およびグローバル型初年度の昨年度(本校 5 期生)、そして今年度(本校 6 期生)も渡航を断念した。このような状況であっても、グローバル型事業目標に立ち戻り、国内にいながら学習成果を最大限担保できる機会として、ブリティッシュヒルズ語学研修・留学生向け浜通りツアー・UNIS-UN2022 (オンライン)・UN 職員とのディスカッション (オンライン、来年度予定) を実施した。

(1) チームビルディング

本研修は、教員主体の語学研修や、探究活動の広報活動とは異なる。地球市民としての生徒たちが、能動的市民性を大いに高め、地域や世界に貢献していくために生徒主体で進めるプロジェクトである。

本研修のミッションを自覚し、国際社会で提言をしたという意志を持った 12 名の生徒たちが選抜される。原子力災害からの復興にかかわる自分たちが、世界の人々とともによりよい未来を目指すためには、どのような相手と議論をし、どのように提言をすべきかから生徒たちは議論を重ねる。研修前後には積極的に地域と学校に学びの成果を還元する。

参加者 12 名を選抜する際には、以上の観点を踏まえた内容および自分の探究と地域・世界とのつながりについての志望理由書を重要視し選抜した。

また、今年度は、渡航断念になった場合には、外国人に双葉郡地域を案内するという企画に切り替えることを想定しており、結果的にそのようになった。

(2) 実施内容① (ブリティッシュヒルズ研修)

期日：令和 4 年 1 月 5 日(水)～1 月 7 日(金)

県内にあるブリティッシュヒルズ (福島県岩瀬郡天栄村) は、語学研修を中心とした英語のイマージョンプログラムを提供しており、プレゼンテーションや議論を行う研修としては最適である。本研修では特に、建設的に議論を進める方法や重要表現と、効果的なプレゼンテーション方法および質疑応答の仕方について学んだ。

本研修は英語の運用能力を高めるためという要素が強いが、今後の留学生との交流、UN 職員とのディスカッションにも繋がられるよう、一方的なプレゼンテーションではなく、それに基づいた相手からの質疑応答および議論も効果的にできることを最終目標とした。実際、本研修の最終日に行う Public Presentations では、例年だと発表することに留まるが、今回は質疑応答を充実させること、また発表に基づいた議論の題材を聴衆側に投げかけさせることで、一方通行ではなく、発表者と参加者

とが意見を言い合える場を作ることができ、結果的に議論のファシリテーションをも英語で行う力も育成することに繋がった。

(3) 実施内容② (留学生向け浜通りツアー)

期日：令和 4 年 3 月 7 日(月)～3 月 10 日(木)

NY への渡航が断念された時、外国人向けに双葉郡ツアー (当初の仮称) を生徒が立案・企画・実施し、双葉郡の抱える課題を英語で説明するという研修に切り替えた。本校設立の経緯および双葉郡が依然として抱える諸問題について理解を深めるとともに、英語による説明によりプレゼンテーション能力の醸成および、その後の UNIS-UN や UN 職員との議論にもつながると考えたためである。

今回の対象は、APU 立命館アジア太平洋大学 (大分県) の留学生 (国籍：中国・タイ・ベトナム・ウズベキスタン・パキスタン・バングラデシュ・パレスチナ・ウガンダ・オーストラリア) で、本校併設の中学校が修学旅行で交流のため訪問する予定であったが、コロナのまん延防止措置により叶わなかった背景もある。

この研修の実施に当たり、主に 2 つの事前研修を行った。

※事前研修① 文献の輪読会

何のためにツアーを企画するのか等のコンセプトを決めるにあたり、参考とするのに相応しいと考える文献を提供した。

ブレイディみかこ『他者の靴を履く』

小松理度『新復興論』

ブレイディみかこ『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』

小手鞠るい『ある晴れた夏の朝』

このうち、上の 2 冊を役割分担による輪読を行い、UN ディスカッションでも重要となる「共生」という観点を深めた。残り 2 冊は推薦図書扱いとした。

※事前研修② 協力者への取材を含めた下見

ツアーの実施およびその説明にあたり、どのような場所でのどのような内容を伝えるのかを、生徒自身の目線で事前の下見を行った。参加者の中には双葉郡や相馬市出身がいるが、震災当時は幼稚園の年長で記憶もあいまいであり、また大半を占めるいわき市出身は、双葉郡のことについてそもそも知らない現状があり、綿密な下見が必要であった。

その際大事にしたのが、地域の地理・現状等に詳しい人物への取材である。自らが留学生に説明するという立場を想定して、現地の事情に詳しい人の話をどのように表現すればいいのか考えることで、その地域についての理解を深めることができるからである。

以上のような事前研修を踏まえ、本研修は以下のような行程で行った。

○1日目 (3/7 月)

東日本大震災による複合的震災の象徴である浪江町の請戸小学校を訪れ、その被害や課題を英語で説明を行った。

その後、檜葉町にある地域交流センターのならばCANvasにて、留学生と本校生がゲーム等を通じて親睦を深めた。

○2日目 (3/8 火)

朝は本校高校生と一緒に登校した後、中学生の探究発表を聴講し、お互いの親睦を深めた。

その後、帰還困難区域に指定されている大熊町を訪れ、時が止まった建物や中間貯蔵施設を見学した。

午後は、野馬追を体験するため、南相馬市の銘醸館で戦国時代の足軽や武将に扮し、練り歩いた。

○3日目 (3/9 水)

朝は富岡アーカイブミュージアムで、原発が誘致される前の町の様子や、原発設置後や原発事故について学んだ。

その後、双葉町を訪れ駅や伝承館周辺の様々なアートを見学し、それに込められた想いについて考えた。

お昼は、川内村のかわうちの湯で地元特産物を堪能し、天山文庫では伝統的な茅葺屋根の建物の造りなど日本文化の深さについて学んだ。

最後の行程として、檜葉町の天神岬で東日本大震災の犠牲者に追悼の祈りを捧げた。

○4日目 (3/10 木)

最終日は、これまでの行程を振り返り、「観光業」「ビジネス」「SNS」「雇用」という観点で双葉郡に足りないものについて議論し、閉会となった。

(4) 実施内容③ (UNIS-UN2022 オンライン参加)

期日：令和4年3月24日(木)～3月26日(土)

今年度のUNIS(国連国際学校)もオンライン参加となった。例年はニューヨークにある国連本部で、国連職員の子どもたちが通う学校であるUNIS-UNの生徒や世界各地から集まる高校生徒と一緒に、世界が抱える諸問題について議論する予定であった。オンラインでの参加とはなったが、講演・ディベート・ワークショップと形式が豊富であったのと、オンライン会議のブレイクアウトルームを多用し、発言がしやすい環境であったため、発言・質問を積極的に行った。

今年度のテーマ：Food for Thought : A Sustainable Approach to Food Security

ディベート議題

Motion 1: “The fast-food industry has had positive effects on reducing food insecurity.”

(ファーストフード産業は食糧不足問題に良い効果をもたらすか)

Motion 2: “Food secure nations have the responsibility to provide food for undernourished populations.”

(食糧安定国家は栄養不足の人々に食糧を与える義務がある)

ゲストスピーカー

Seth Goldman : Honest Tea, Eat the Change や PLNT Burger の創設者で植物ベースの料理を提供する。

Esther Penunia : アジア農民協会 (AFA) の事務局長で、小規模な家族農園経営の支援を行う。

Abby Maxman : Oxfam America の CEO。世界の貧困と不正をなくすための人道支援と開発を行う。

Mary Ellen McGroarty : アフガニスタンの世界食糧計画(WFP)で、食糧援助を行う。

Mai Thin Yu Mon : ミャンマーの権利活動家として、先住民の土地と天然資源の尊重と保護にあたる。

ワークショップ (参加したもののみ)

Diet Culture and Body Image, Evolving innovation and food, Business pitch Simulation, Jeopardy, United Nations Virtual Tour, Bagels: Nurturing New York, Sustainable Innovation in Urban Agriculture, Latin American Food as Art, Food and Climate Change Role Play

(5) 実施内容④ (UN 職員との議論オンライン参加)

期日：令和4年5月21日(土)予定

新型コロナウイルス対策に係るまん延防止措置が実施直前まで延長され、浜通りツアーの準備等にかかなりの時間を要したこと、および、浜通りツアーやそれに参加した留学生の感想等を元に、地域・世界が抱える問題にどのように対処していくべきかについての議論を十分に振り返り、今後の探究学習等に生かしていくため、年度内の実施を見送り、改めて来年度5月に実施する事とした。

(6) 成果と課題

チームビルディング

今回のチーム編成に当たっては、いわゆる「フリーライダー」を作らないよう、誰もが責任ある立場から物事を進めたいという観点から、議論をまとめる司会の輪番制、参考文献の輪読の割振り・プレゼン、各自の探究内容の英語プレゼンの深化等により、チームとは言えませんが個々のスキルアップの重点を置いた。英語力の不安を感じる生徒もいたため、朝・昼・放課後の時間をうまく活用し、個別指導に当たった。

しかし、英語力には差があり下位の生徒の練習にかなりの時間と労力を費やした。普段の授業がどれだけ大切かを思い知らされた。普段の授業において、プレゼンテーションやそれに基づいた質疑応答の言語活動のやり取りをすることの重要性を感じた。ふたば未来学園らしく、その場しのぎではない英語力を醸成するカリキュラムが、普段の授業の中で求められていると感じた。

ブリティッシュヒルズ研修

主に英語の運用能力を高めるためのプログラムであったが、単に提供されるプログラムをこなせばいいという考えにならないよう、本研修での最終目標を「自分の探究内容を英語で発表し、それへの質疑応答を行い、それに基づいたトピックによる聴衆と議論をする」と設定したこと。これにより、発表前日は夜遅くまで原稿書き・発音練習等の準備に勤しんでいた。また、「聴衆との議論」を大切にすることで、一方通行ではない、本物の英語力が問われるため、苦勞した生徒も多かったが、今後の英語学習への大きな動機付けとなった。

留学生向け浜通りツアー

代替研修の目玉である本研修は、「いかにして福島の問題を『共事化』(小松理虔氏の造語。「共感」と同義)でできるか」というコンセプトのもと、双葉郡など浜通り地

区の光(魅力)と影(課題)を体験によって感じてもらうというものだった。昨年度のUNDPの岸守氏の指摘にもあったように、例年のような単に発信するだけでなく、実際のアクションによる発信が求められていた。

そのような折、本校中学校が修学旅行先としていた(新型コロナの影響で断念)APU立命館アジア太平洋大学の留学生から福島を訪問したいという打診があり、多国籍を背景とする方々にとって浜通りの光と影がどのように映るかを実践検証するのに格好の機会だと捉えた。

ツアー中の留学生の反応は驚きの連続であった。まず、影の部分では複合的災害(地震・津波・原発事故)の象徴としての請戸小学校、帰還困難区域の中で当時のままの熊町小学校、人の住んでいない廃墟、広大な中間貯蔵施設など、まだまだ課題が山積している状況を目の当たりにして、「私の知っている日本ではない」という言葉が印象的であった。

また、光の部分では、浜通り地方の食の豊かさ、野馬追の追体験としての甲冑仮装、日本伝統文化の奥深さなど思ったよりも留学生の関心は高かった。

しかし、その場の楽しさを単なる楽しさで終わらせるのではなく、今回のツアー全体の中で福島の課題を提示するのにその楽しさがどう作用したのかを分析する必要がある。特に、福島と世界の課題との結び付けにおいて本校探究学習はいまだに発展途上のため、本ツアーを今後どう探究学習に生かしていくかが大変重要になる。この点については令和4年度5月に行われるUN職員との議論において本校生徒が作成するプレゼンテーションに組み込む予定である。

2022 UNIS-UN 会議オンライン参加

今年度もオンライン参加となったが、ブレイクアウトルームの多用で、講義・ディベート・ワークショップ等の各活動において、発言や質問がしやすくなった。そのためか、日を追うごとに発言・質問の回数が増え、議論に参加しようという姿勢が見られた。また、基調講演となるゲストスピーカーによる講義についても、前半は受け身になっていたが、質問を全体で取り上げて欲しいという一心で、後半では講義に備えるために、ゲストスピーカーについて調べ、それを全体で共有し、候補となる質問を考える等の準備を行った。講義の本番では、その努力が報われ質問を取り上げられたことで、改めて講義についての事前準備がどれだけ大切かを実感したようである。

2. 4. 3 広島研修

広島研修では、原爆被害からの復興と平和に向けた取り組みについて学習するとともに、広島県の高校生との交流を通して、双葉郡の課題を国内の他地区の課題と重ねながら、課題の本質を探る機会とした。

初日は原爆ドームと平和記念公園を見学した後、広島県立広島国泰寺高校においてエネルギー問題について意見交換を行った。二日目は、旧陸軍被服支廠、広島平和記念資料館を見学した後、被爆体験講話、広島市立舟入高校原爆劇鑑賞を行った。3日目は世界遺産厳島神社のある宮島を見学し、帰路についた。

(1) 日程・参加生徒

10月に募集を行い、事前研修を経て12月10～12日の2泊3日で研修を行った。生徒は2年次14名参加(男子4、女子10)。

(2) 実施内容

事前研修として、早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター主催のシンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」にオンラインで参加した。広島平和記念資料館の元館長の原田浩さんによる講演や同学芸課職員の菊楽忍さんの発表は、広島への原爆投下の状況や、戦後の原爆ドームの世界遺産登録に向けた動きなどを詳細に伝えるもので、広島訪問前に戦争・原爆・遺構についての基礎知識が得ることができた。

初日は広島到着後すぐに、原爆ドームをはじめ、平和記念公園内を見学した。同級生の協力を得て作った折り鶴の献納も行った。その後、広島県立広島国泰寺高校へ移動し、生徒交流と意見交換を行った。



生徒の感想…

- ・他校の高校生同士で日本の社会問題について対話することで、色々な視点を知ることができたり、高校生ならではの考えもたくさん話したりできた。
- ・日本の10年後、20年後を創っていくのは自分たちの世代だと思う。
- ・今大人が私たちの未来について考えて、エネルギー問題についても考えてくれている。私達もエネルギー問題について考えた方がいい。

二日目は朝に旧陸軍被服支廠を見学した。シンポジウムで知り合った多賀俊介さんにガイドを引き受けていただき、広島市内をバスで移動する途中も各所にて戦時の状況等について案内していただいた。その後、広島平和記念資料館を見学し、追悼平和祈念館にて山本玲子さんによる被爆体験講話を伺った。午後は、広島市立舟入高校を訪ね、演劇部による「ケイショウ ～『ある晴れた

夏の朝』から考えたこと～」を鑑賞させていただいた後、生徒交流を行った。夕食後は、舟入高校の前身である広島市立高等女学校(市女)の職員・生徒で原爆の犠牲となった方々を慰霊するため、ホテルのそばに立つ広島市立高女原爆慰霊碑を訪ね、手を合わせた。

生徒感想…

- ・この場所だけ時間が止まっていて、現代から被爆当時のことを想像させてくれる。何人もの人たちが助けを求めてやってきて亡くなった場所、爆風から身を守ってくれた場所…、色々な思いが詰まっていた。
- ・当時幼かった後輩たちには震災の記憶がないが、広島若者のように、体験者の記憶を言葉で聞き、表現し、受け継いでいく、「語り手の語り手」になることはできる。
- ・劇中の「原爆投下について肯定派でも、否定派でも、考えるのをやめないでください」というセリフが印象に残った。原子力発電所や処理水海洋放出への賛否についても同様で、他人事とってしまうのが一番いけない。



ホテルでは一日ごとに研修の学びについてグループで振り返りを行った。自分では言葉にできなかった思いが他人の言葉を聞くことで言語化できるようになったり、研修中に感じたモヤモヤを徹底的に議論することで少しずつはっきりさせることができるようになったりと、充実した対話の時間となった。平和、伝承などについて、一人ひとりが自分の思いを言葉にできるようになったのは大きな収穫であった。三日目は宮島を見学した。

後日、広島国泰寺高等学校の皆さんと、「原子力エネルギーを今後どう活用していくかをともに考える」をテーマにオンラインで意見交換を行った。

研修成果の報告の機会として、第9回ふくしま学(楽)会に参加し、代表生徒3名が研修での学びを報告した。

2. 5 発表・交流

ここでは外部団体が主催する発表会への参加や他校との交流についてまとめる。

2. 5. 1 ふくしま学（楽）会および関連学会

ふくしま学（楽）会は早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターが主催する学会である。世代を超えて、地域を超えて、分野を超えて、福島の復興について考える場として毎回多くの方が参加している。今年度も昨年度同様にオンラインで2回実施された。

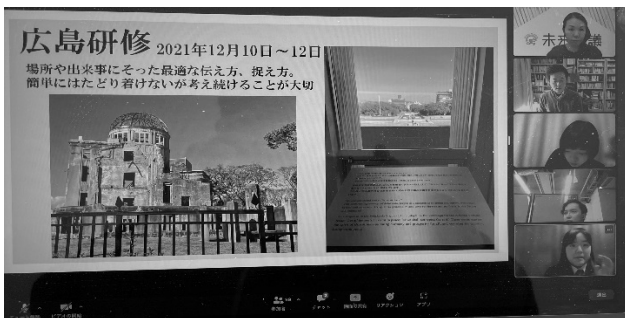
① 第8回ふくしま学（楽）会（7月25日（日））

今回のテーマは「福島の教訓を考える：福島から学ぶことは何か」をテーマとして、震災から10年の節目の意味について議論をした。第7回の発表(2021年1月)からさらに探究を進めた生徒がその進捗状況や考察について「マイクラでつくる双葉郡」「エネルギーからエコロジーへ：シビックプライドを形成する環境事業」というテーマで3年生の6名が発表を行った。



② 第9回ふくしま学（楽）会（1月30日（日））

第9回では1F 廃炉の先とこれからの対話をテーマとして、本校の広島研修に行った生徒が「広島視察を通じて学んだこと」というテーマで研修の成果を発表した。また、第2部の「福島の経験を学び、語り継ぐ絆組みを考える」では早稲田大学の学生との交流を行った社会起業部の生徒から「中高生と大学生との対話の報告」の発表があった。高校2年生を中心に参加した12名の生徒たちは、オンラインでのブレイクアウトセッションでも大人の参加者に負けないような対話を繰り返した。



早稲田大学ふくしま広野未来リサーチセンター関連行事として、以下の行事にも生徒が参加した。

③ シンポジウム「福島復興と国際教育研究拠点に関する地域対話」（7月4日（日））

国際教育復興拠点の第5分野「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」をテーマに本校の中高校生18名を含む95名の参加者がオンラインでのシンポジウムに参加した。また、3名の生徒が「ふたば未来学園から：国際教育研究拠点の第5研究分野をめぐって」というテーマで発表を行い、学校にいる生徒とオンラインで参加している一般参加者との対話を行った。

参加した本校の中学校の生徒から国際教育研究拠点について「地域との関係が深くなければ、地域住民の信頼や協力は得られない。小中高生との連携も大事であり、地元の中高校生や高校生が参加するだけでなく、他の地域の中高校生も参加し様々なディスカッションができる場になったら良い」という発言があったことが印象的である。

④ シンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と1F 廃炉の将来像を考える」（11月14日（日））

第8回ふくしま学（楽）会で地域の方から1Fを負の遺産として捉えるのではなく、福島復興の象徴として1F世界遺産（文化遺産）登録を行うための最初の取り組みとして、このシンポジウムがオンラインで開かれた。本校からは広島研修に参加する生徒12名が事前研修の位置づけとして本シンポジウムに参加した。



また、本校教員2名もパネラーとして参加した。元広島平和記念資料館の館長を務められた原田浩さんによる「原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズム」という講演は、広島と福島という原子力災害に見舞われた二つの都市を繋げて考えるための示唆に満ちたものだった。

ふくしま学（楽）会は本気で地域課題に取り組む大人たちと共に議論する貴重な機会である。また、生徒のテーマについて継続的にアドバイスをいただく人脈を築く場としても機能しているため、今後も活用したい。

2. 5. 2 ふるさと創造学サミット

(1) 「ふるさと創造学サミット」について

双葉郡8町村内の各学校で行われている「ふるさと創造学」の取り組みを共有し、子どもたちの学びの場となるのが「ふるさと創造学サミット」である。例年であれば、地域間の交流を生み出すイベントとして盛大に開催されるが、コロナ感染症対策のために今年度もオンラインにて実施された。

(2) 実施内容

本校からは、チアで双葉郡を元気にする「Let's cheer up ふたば!!」というプロジェクトを行っている高校2年生の生徒が代表として発表を行った。中学生は「双葉郡の魅力の発見・発信」というテーマで発表を行った。オンライン上でも積極的に意見交換を行う様子が見られ、双方の学びになったと考えられる。



また、全体企画では、福島県国際交流協会の吾妻久先生による「中高生のためのSDGs」というワークショップに参加し、“World Shift”について考えを深めた。社会の課題や理想の未来を言語化できずに悩んでいた生徒も、自分たちの身近な生活に視点を置くことで、持続可能で平和な世界へのシフトを宣言できるようになった。



(3) 成果と課題

本サミットは双葉郡内の小中学生と高校生とが交流できる貴重な場である。オンラインという限られた環境であったが、双葉郡で学ぶ児童生徒達が、お互いにどのようなことに取り組んでいるのかを共有できるきっかけとなった。

その一方で、貴重な交流の場を活かしきれていないという声も挙がった。学びの成果を発表したり意見を交換したりするだけでなく、学校を超えて、町村を超えての協働が今以上に促進されれば、より有意義なサミットになることが予想される。

2. 5. 3 福島県高校生社会貢献活動コンテスト

本コンテストは、地域の課題解決に向けた創造的復興教育を目的として、福島県教育委員会の主催で震災以降毎年行われている。各学校が探究活動を推進する一つのインセンティブとしての位置づけもあり、最優秀賞を受賞すると県知事への訪問という機会も与えられる。本校では令和元年度から本コンテストの積極的な活用を呼びかけており、今年度も希望のあった以下の3件を応募した。

このうち、書類選考に応募した3件が最終選考に選ばれた。最終選考会は10月3日(日)、自治会館(福島市)で行われ、県内の12件のプレゼンテーション、質疑応答が行われた。なお、例年よりもコンテストの実施時期が2か月早まり、進路活動が忙しくなる時期にコンテストの準備が重なることとなった。

審査の結果、以下のような結果となった。

<優秀賞>3プロジェクト

- ふたば未来学園高校
社会起業部
活動名：今と未来を
つなぐ語り部活動
- ふたば未来学園高校
メディアコミュニケーション探究ゼミ
ふたばメディアグループ
活動名：ふたばメディア



<入選>8プロジェクト

- ふたば未来学園高校
原子力防災班ゼミ
活動名：Future Quest
～ふたばの魅力を探る～



となった。令和元年度より本コンテストに参加し、過去2年連続で最優秀賞を獲得してきた。このコンテスト以外にも様々なコンテストがあるため、今後は年間計画を見ながら、長期的な視点で低学年からのコンテスト出場を進めていく必要がある。

2. 5. 4 マイプロジェクトアワード校内選考会

「マイプロジェクトアワード」は、高校生の探究活動、マイプロジェクトなどを発表する日本最大級の学びの場である（認定NPO法人カタリバ主催）。本校では、応募するプロジェクトの質を高め、あわせてプロジェクトからの学びをより深める機会を設定するため、福島県 summit の校内予選という位置づけで校内選考会を実施した。校内選考会の前には、応募者を対象に「事前ブラッシュアップ会」を開催し、学年の垣根を越えて、それぞれのプロジェクト内容や発表に対してアドバイスをし合う機会を設けた。アドバイスを受けて、自分の発表に磨きをかけた上で、選考会当日を迎えた。本選考会には高校1年生～3年生まで19件の応募があった。1年生から3件の応募があり、早期に探究に取り組み自発的に探究活動を行う生徒も見られた。

審査はマイプロジェクトアワードの審査基準に則り、アクションしていることを前提に、オーナーシップ、コクリエーション、ラーニングの観点で行った。

実施日：令和3年11月24・25日（水・木）

内容：発表、質疑応答、審査

審査員：本校教員5名、カタリバ2名

校内代表を選考する審査についてはかなり紛糾し、「生徒たちのプロジェクトをどう評価するのか」「良いプロジェクトとはどのようなものか」など、審査員も改めて、探究やマイプロジェクトの意義を考えるきっかけになった。いずれも甲乙つけがたい発表であったが、最終的に福島県 summit に出場する校内代表の10件を決定した。

選考会という観点だけでなく、生徒同士の学びの機会も設けることで、学年を超えて対話をし、様々な視点に気づくことができたようだった。ここでの発表後、お互いの活動に協力し合う様子も見られ、交流の契機となったことが伺えた。



2. 5. 5 マイプロジェクトアワード福島県 summit

マイプロジェクトアワード福島県 summit は全国 summit に向けた福島県予選として、今年度で2回目の開催となる「学びの場」である。本校から校内選考会によって選出された9件が応募し、全員が書類選考を経てそのまま参加した。

実施日：令和4年1月9日（日）終日

実施形態：オンライン

発表数：60件

本校からの発表テーマ

○私はカフェをつくる！！（1年）

○居心地のいい学校を（2年）

○Let's unify the AED mark（2年）

○生理によりそう探究（2年）

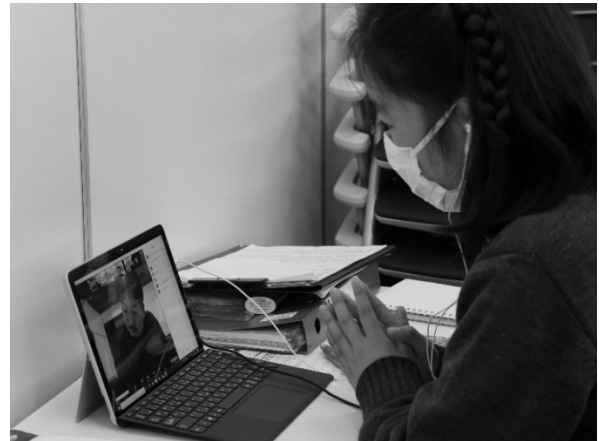
○誰一人取り残さない防災の世界（2年）

○浜通り×聖地巡礼（2年）

○双葉の新土産「石けん石けん」（2年）

○Let's cheer up ふたば！！（2年）

○人と人を繋ぐ場を（3年）



本年度の福島県 summit は「学びの場」として実施され、審査に関しては後日提出する発表動画をもとに、全国 Summit への選考を行う形であった。生徒達は分科会に分かれ、自分のプロジェクトの発表を行った。福島県ゆかりの専門家・実践者の方々や他校の生徒から、質問やコメントをもらいながら、自身のテーマや活動の内容について、分科会のメンバーと対話を行った。発表終了後の振り返りでは、どのような気づきや学びがあったかを言葉にするとともに、今後の活動をどうしていきたくかを考えた。普段は関わりのない大人や他校の生徒との交流を通して、自分の活動の意義に気づき、今後の活動のモチベーションアップにも繋がった。また、その結果、Let's cheer up ふたば！！が全国サミットに選出された。

2. 5. 6 全国高校生フォーラム 2021

本校では令和元年度まで SGH（スーパーグローバルハイスクール）に指定されており、その SGH ネットワーク参加校として本フォーラムに参加した。特に、生徒が探究において日常的に取り組んでいる地域の課題を全地球的な観点で捉えるきっかけとして本フォーラムに参加した。

実施日：令和3年12月19日（日）終日

実施形態：オンライン

発表者：久保田明日香、児玉花心

発表テーマ：To Use AEDs Effectively - the first step to people's proactive engagement in caring for each other's healthcare -

今回のフォーラムは、発表内容の事前の動画撮影と当日の交流会に分かれている。

まず、発表内容については、地域の課題として医師不足を取り上げ、医師や看護師といった医療の専門家でなくても人命を大切にするためにできることは何かを考え、身近にある AED に注目した。人々は AED については知っているものの、自分の身近な場所のどこに AED があるのか、それを常に意識して日々の生活を送っているのか、という点に着目し、日常生活の中で人々が AED の具体的な設置個所が分かるように、AED の標示を目につく箇所に設置するアクションを行った。その活動や調査を進めるにあたり、WHO の掲げる Social Determinants of Health（健康の社会的決定要因）という考えや、アメリカのシアトルでは住民の救急救命講習率が高い等、住民自ら自分たちの命を大事するという意識が高いという事実に出会い、AED を地域に広めていくためのヒントとしていく、という内容を発表した。

当日のフォーラムでは、大学教授や文科省の担当者の方、他県の高校生から様々な感想・意見をもらったが、特に「地元地域でのアクションはどのくらい行っているか」という質問によって、自分たちのアクションがまだ実際の地域レベルで行われていないこと気づき、今後本本格的に地域でのアクションを起こしていくことを確認した。

2. 5. 7 Glocal High School Meetings 2022

地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型指定校として、全国高等学校グローバル探究オンライン発表会に参加した。今年度も COVID-19 の感染再拡大に配慮し、Zoom を活用したオンライン発表会の形をとった。日本語発表と英語発表の2部門に分かれ、本校からはそれぞれに1プロジェクトずつがエントリーした。

(1) 実施内容と成果

参加校は事前に発表の様子を Zoom で収録した動画の送付と、発表の要旨の提出を求められた。提出された全参加校のデータは、幹事校の名古屋石田学園 星城中学校・高等学校のご尽力により

<https://www.seijoh.ed.jp/glocalhsm/> に日本語英語とも分科会毎にアップロードされた。参加校の教員と生徒は分科会の動画を審査し、投票を行った。各分科会から、金・銀・銅賞が選出され、金賞の中でも優れたものには、文部科学省初等中等教育局長賞をはじめとする特別賞が付与される。

本校の結果は以下の通り。

日本語発表部門 金賞・生徒間投票特別賞

タイトル「鉄たまごという可能性」

英語発表部門 金賞・探究成果発表委員会特別賞

タイトル「Memories and feelings connected by games」



(2) 今後の展望と課題

日本語発表部門は2年連続の金賞、今年度は日本語発表部門と英語発表部門のW金賞という成果を上げることができた。両部門金賞を受賞したのは本校と山形県立山形東高校の2校だけであった。ただ、大会委員長からのコメントにあるように、まだまだ「探究」として、改善の余地があるとのこと指摘もいただいた。生徒がたてた問いとその検証プロセスを明確にするための指導法の確立は本校の課題として残された。

2. 5. 8 第21回福島県総合学科研究発表会

(1) はじめに

福島県総合学科研究発表会は、総合学科での学びの集大成の場である。本校を始めとして、県内で総合学科を設置している福島北高等学校や、会津学鳳高等学校など計8校が参加した。

今年度は、令和4年1月14日に福島県立小野高等学校で開催された。本校からは、口頭発表部門に1発表、展示発表部門に1発表がエントリーした。

(2) 実施内容

【本校からの発表テーマ】

○口頭発表部門

「記憶と^{おも}念いを繋ぐ町づくり」(3年生)

○展示発表部門

大熊×いちご×私(3年生)

パワーポイントを用いる口頭発表部門では、3年間にわたり様々な探究アクションに取り組む中でNPO法人ハッピーロードネットの方々と一緒に活動に取り組み、特別な復興に取り組むのではなく、日常の何気ない活動にこそ「念い」が繋がる町づくりにつながることを本校の代表として発表を行った。

展示発表部門では、高校3年生1名が本校の代表生徒として発表を行った。スペシャリスト農業系列で活動する生徒がイチゴを用いたスイーツ開発や、大熊町民にかつて愛されていたUFOパンを復活させる取り組みなどを発表した。



(3) 成果と課題

本校からエントリーした1件の探究活動は、優良賞を頂いた。残念ながら優秀賞・最優秀賞には届かなかったが、生徒にとって総合学科研究発表会は、これまでの活動を客観的に振り返ることができる良い機会となった。特に高校3年生にとっては2年間にわたる探究活動の集大成を発表できる貴重な場となった。中通り、浜通り、会津三地域の高校生が交流することのできる数少ない機会を、今後も活用して



いきたい。

2. 5. 9 東日本大震災メモリアル day 2021

本校では設立以来、宮城県立多賀城高等学校が2016年より主催している本発表会に参加している。今年度はオンラインでの参加とはなかったが、東日本大震災と原発事故との関係性の深い本校として、震災によって浮き彫りとなった地域の課題に注目した探究を中心に、発表会に参加した。

実施日：令和4年1月22日(日)

実施形態：オンライン

発表者：大和田紗希

発表テーマ：食のありがたみを認識してもらうために

発表内容としては、まず、本人の東日本大震災と原発事故による避難の経験から始めている。震災当時は幼稚園生で、記憶もおぼろげながらも、避難生活の大変さと日常生活のありがたさを忘れてしまった現代の人々への警鐘を込めて、探究内容が構成されている。震災当時の大変さを考えれば、日々の食事等の当たり前にある生活がどれだけ大切かを、もう一度多くの人に再認識してもらいというのが発表の大きな動機となっている。

その上で、日本の食品ロスについて、その食糧自給率や世界で飢餓に苦しむ人々の状況と照らし合わせながら、調査を行い、特に自分たちでも実践できそうな「家庭形食品ロス」への対策として、身近なところからできることを模索している。

2. 6 社会起業部の活動

2. 6. 1 社会起業部

社会起業部は、普段から地域を「知る・伝える・盛り上げる」活動をしており、今年度は「今と未来をつなぐ語り部活動」を主軸として活動を行った。パンフレットやポケットティッシュなどを製作し、交流先への配布を予定した。製作費、およびフィールドワークの費用は福島県の「チャレンジ！子どもがふみだす体験活動応援事業」の対象である。

(1) News Picks 交流会 (5月28日)

オンラインで山口・島根・宮崎の高校生と交流、「福島の処理水問題」について伝える活動を行った。「原発事故に興味はなくても、自分で積極的に情報を集めたりはしない」「とはいえ福島＝原発のイメージは強い」などの意見があった。

(2) 広野町の限界集落・簗平を訪問 (6月11日)



(3) いわき市湯本の原子力災害考証館でワークショップ (7月10日)

湯本温泉に原子力災害考証館を創設した古滝屋の当主・里見喜生さんからお話を伺い「語り部活動」を行うためには地域の歴史を学ぶ必要があることに気づかされるとともに、ふたば未来が、原発事故が起こった双葉郡にある唯一の高校だということを強く意味づけをしてくれた。

(4) 双葉町フィールドワーク (7月20日)

「ふたばプロジェクト」さんによる双葉町フィールドワークを通じて、双葉町を知り、語り部として必要な知識を学んだ。

(5) 白河高校とオンライン交流 (7月27日)

「浜通り×中通り 高校生震災対話会」をテーマに震災の意識について語り合うとともに、震災時小学5年生だった両校のOBからお話を伺った。その後、グループごとに話し合いをし、あるグループでは「若者に震災体験をどう伝えるか」という話題が出た。

(6) 福島県 社会貢献活動コンテスト (10月3日)

今までの活動を2年生がオンラインで発表し、優秀賞(2位相当)を受賞した(写真)。



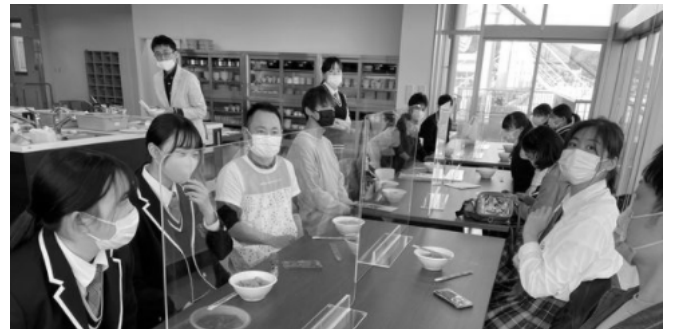
(7) 岐阜県瑞浪市の中京高校さんと交流 (10月27日)

(8) 東京都小金井市の中央大学附属高等学校の2年生と交流 (10月29日)

(9) 気仙沼・石巻研修 (11月20日～21日)

気仙沼のクッキングスタジオという所を借りて福島県産で豚汁を作り、NPOの方々と共食して福島の話をして、気仙沼の話聞いた。

NPO底上げを通じて、生徒より少し上の若い世代の方々3名に来てもらってお話を伺った。



観光客用さかな市場で、製作した双葉郡八町村のティッシュと部のパンフレット、福島県産のリンゴを配布したのち、南三陸町で語り部の方に乗っていただき津波被害のあとを見て回る。

小高い丘の上の小学校に行き「この一階まで津波が来ました」と言われてギョッとする。

翌日は8時半に宿を出て石巻へ。語り部さんに乗っていただき、児童の津波被害者を出した大川小学校跡へゆく。校舎の壁が引きちぎられ鉄骨がむき出しとなり、2階渡り廊下もねじ切られて倒れており、津波の凄まじい力を感じた。



(10) 早稲田大学の学部生・大学院生との交流 (11月22日)

(11) 水俣研修 (12月26~28日)

福島原発事故の構造が水俣病事件の構造と似ていることに気づき、熊本県水俣市で水俣病について学習するとともに、福島県の現状を伝えていく2泊3日の水俣研修を企画した。

事前研修を経て(講義動画を右リンク先に掲載する)、初日は水俣病資料館を訪問した。症状の他に偏見・差別のことも深ぼりしていると同時に、各節の最後に「あなたがそのとき 患者家族、チッソ社員、水俣市民、周辺住民だったらどうしただろう」など、問いかけが設けてあるのも面白い。

翌日はホテルの朝食会場で朝食を食べているお客さんたちの前で、ポスターをあげれば未来学園高校創設の経緯と、社会起業部の取り組み、福島県の現状について話をしたのち、各テーブルに福島県産のリンゴと社会起業部配布セット(パンフ、双葉郡8町村ティッシュ、コーヒーなど)をお配りした。皆さん聞いてくださり、喜んで受け取ってくれた(右上写真)。

この日は一般財団法人水俣病センター相思社のKさんの案内のもと、水俣病事件の現場をフィールドワークした。

大崎岬から半島と島に囲まれた不知火海を見晴らし

た。「見えている範囲全てに患者がいます」とのこと。



おれんじ鉄道水俣駅からJNC正門まで歩いた。駅舎には水俣を紹介するコーナーがあり、オープン時は石牟礼道子さんの紹介もあったそうだがクレームがついて一カ月で撤去したという。現在、そこでは水俣病について一切言及されていない。水俣病を排除したい、なかったことにしたい、という市民の気持ちがうかがえる。「差別していたし、されてきたし」「それをのりこえて、売りにしていこう、という気持ちまではとても到達していない」とKさん。

水俣病「爆心地」の百間排水溝から埋立地を左手に見つつバスは走る。16年間かけて埋め立てられたようだ。先端はエコパーク水俣となっており、石仏が並ぶ敷地を歩いた。碑があるが「過ちは繰り返さない」という碑文にはヒロシマと同様主語がない。英訳の主語はWeとなっている。「行政としては、水俣病はみんなが悪かった、時代が悪かった、というストーリーを作りたいんです」とKさん。

続いて漁村地域を見学する。一口に水俣市といっても工場がある北部と漁村がある南部は全く異なる印象だった。10キロの間に前近代と近代の暮らしがある。山にへばりつく漁港と平野、一次産業と二次産業、海に生きる人々と経済成長を担う人々、そして「被害者」と「加害者」の世界だ。

お昼のあと相思社へ行き、水俣病歴史考証館を見学し、患者さんのお話をうかがった(下写真)。



2. 6. 2 社会起業部カフェチーム

(1) はじめに

「地域を知る・伝える・盛り上げる」ことを目的として、社会起業部カフェチームとして高校の部活動でカフェを運営している。ケーキや焼き菓子の製造、子供たち向けのイベント開催など、生徒主体で活動している。

(2) 実施内容

今年度の社会起業部カフェチームは、コロナウイルス感染症の感染予防対策をしっかりと行い、より地域に密着したカフェを目指すため一か月毎に双葉八町村などをテーマとしてイベントやインタビューを実施した。また今後の活動内容について情報共有を図った。

(3) 成果

① 「双葉のだるまを知ろう!!」(本校) 5/20

双葉だるまは、従来のだるまをそのまま使うのではなく、町章の「竹」を模様付けしてした「町章だるま」。「鶴は千年、亀は万年」という縁起がよいことわざをモチーフとして、眉は鶴、ひげは亀のデザイン。震災後の双葉町を応援する気持ちで「七転び八起き」という意味があることを学んだ。

双葉だるまの特徴を知るだけでなく、そこに込められた想いを直接講師の方から聞くことができよい経験となった。



② 藍染め体験(楡葉町) 7/17

広島の小中学生たちが応援の思いをこめて、楡葉へ藍の種を送った。そこから「ならば藍染会」の方々の活動が始まった。その復興の思いが込められている藍を使って、シルクのスカーフを10枚染めさせていただいた。作成後のインタビューでは、「若者が藍染めという伝統文化にどう関わるかは自分たちで考えること」という熱い言葉をいただいた。今後のcaféふうとして自分たちにできることを考え、今後の活動に生かせるよう思わせる体験となった。



③ 第6回全国高校生SBP交流フェア

カフェの紹介をします! オリジナルブレンドコーヒーのふうスペシャルを召し上がれ

カフェチーム小野澤、山田が全国高校生SBPフェアに参加し、「極」を受賞した、惜し



くも決勝進出は果たせなかったが審査員より大会評価を受けた。

特別賞 極株式会社百五銀行賞
皇學館大學学生スタッフ賞

④ 嵐が丘(葛尾村) 10/23

奥様はおいしいものを食べることが大好き。すべて手作りにこだわった料理やケーキをみんなに食べてほしい思いでカフェをオープンした。若いころから自分が気に入ったものを少しずつ集めたコーヒーカップやソーサーでお客様をもてなしていた。3.11の地震により大切に集めたコーヒーカップやソーサーの大部分が割れ、「地震があるなら福島にはこなかったのに」との言葉が印象的だった。現在は、福島や関東からもお客様が利用する予約でいっぱいのカフェだ。



⑤ ハロウィンイベント 10/30

今年のハロウィンイベントは福祉系列の生徒とコラボをした。

caféふう主催! みんなで楽しむハロウィンイベント

かぼ"ちゃまつり"

10/30(土)
10:30~13:30

参加費 無料

イベント①「折り紙でハロウィン飾りを作ろう!」
ふたば未来学園高校の生徒が折り方を教えます! 色々な形を折って、お家やカフェをデコレーションしてみませんか?
お子様だけでなく、大人の皆さんもぜひ一緒に折ってハロウィン気分を味わいましょう~

イベント②「みんなでポッチャを体験しよう!」
ポッチャとはパラリンピックの正式種目でボールを転がして目標のボールに近くに近づけられるかを競うスポーツ! 当日はふたば未来の生徒がルール、やり方を丁寧に教えます。初心者大歓迎!幅広い年代の方にお楽しみいただけます。

⑥ 出張販売

広野町役場に出張販売を試みた。役場いっばいにコーヒーの香りが立ち始め、多くの方に利用していただき、準備したポットではお湯が足りず、役場のポットで助けていただいた。役場の方からは次回開催の催促と、「予約」というキーワードをいただいた。ご利用ありがとうございます。



(4) 課題

今後の課題としては地域イベントへの参加を積極的に行いたい。コロナウイルスによる制限も徐々に解除の見通しが立った今、たのしい思い出を作りながらcaféふうでゆったりとした時間を過ごしていただけるような新たな企画を立案している。

生徒の学びが継続できるように、様々な工夫をしながら他校との交流会も含め積極的に活動していきたい。